

中 南 部 (8)

麦野A遺跡第6・7・11・13次調査

麦野C遺跡第4・7～9次調査

雑餉隈遺跡第11・13次調査

寺島遺跡第2次調査

2 0 0 5

福岡市教育委員会

中南部(8)

麦野A遺跡第6・7・11・13次調査

麦野C遺跡第4・7～9次調査

雑餉隈遺跡第11・13次調査

寺島遺跡第2次調査

2005

福岡市教育委員会



巻頭カラー1 調査区全景（北から）



巻頭カラー2 調査区全景（西から）

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本書は、福岡市中南部地区11カ所で国庫補助対象事業として行われた発掘調査の成果を報告するものであります。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご協力とご理解を賜りました各関係者の皆様をはじめ、多くの方にご協力とご理解を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例 言

1. 本書は、福岡市内における国庫補助対象事業である個人専用住宅工事等の開発行為に先立って、福岡市区教育委員会が平成8年度(1996年度)から平成15年度(2004年度)にかけて実施した中南部地区遺跡の発掘調査報告書である。
2. 各章の執筆は調査担当者が行い、本書の編集には本田浩二郎があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図・遺物実測図は各担当者が作成し、製図した。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より6°21'西偏している。
なお、本書に使用している座標は、国土座標第Ⅱ系を用いている。
5. 本書で使用した写真は、各担当者が撮影した。
6. 本書に収録された各調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

I. 遺跡の立地と環境	1
II. 麦野A遺跡第6次調査	7
III. 麦野A遺跡第7次調査	15
IV. 麦野A遺跡第11次調査	31
V. 麦野A遺跡第13次調査	39
VI. 麦野C遺跡第4次調査	45
VII. 麦野C遺跡第7次調査	53
麦野C遺跡第8次調査	
麦野C遺跡第9次調査	
VIII. 雑餉隈遺跡第11次調査	67
IX. 雑餉隈遺跡第13次調査	75
X. 寺島遺跡第2次調査	87

巻頭カラー1	麦野A遺跡第7次調査	調査区全景(北から)
巻頭カラー2	麦野A遺跡第7次調査	調査区全景(西から)
裏表紙	麦野A遺跡第7次調査	調査区全景(北側上空から)

I はじめに

1. 発掘調査の経緯

福岡市教育委員会では、福岡市内域内の建築確認申請・確認申請のうち、周知の遺跡範囲内に含まれるものについては、事前に試掘調査等を行って埋蔵文化財の有無の確認を行っている。試掘調査の結果、建物基礎や建築に伴う土木工事が埋蔵文化財に対して影響が及ぶと判断された場合は、設計変更や盛土の協議を行い埋蔵文化財への影響を最小限に留め現状保存の処置を行っているが、やむを得ず破壊される場合については記録保存のための発掘調査を事前に行っている。

近年、建築基準法が改定され、個人専用住宅についても耐震構造を採用する建築方法が増加しており、これに比例して小面積の発掘調査が増加している傾向が見られる。今回報告を行う麦野遺跡群・雑餉隈遺跡・寺島遺跡等では、埋蔵文化財が現表地表面から比較的浅い部分で検出される例が多く、個人専用住宅等の比較的掘削の浅い工事についても埋蔵文化財への影響は避けられないため、発掘調査を実施している例が多い状況である。これらの調査費用については個人専用住宅建築である場合、福岡市国庫補助要項の要件を満たしたものについては、国庫補助金を適用し調査を行っている。また、短期調査・小面積の発掘調査についても国庫補助要項に則り、一部は国庫補助金適用対象として発掘調査を実施している。

2. 調査体制（整理・報告年度）

調査主体	福岡市教育委員会	教育長		植木とみ子
調査総括	同	文化財部	部長	山崎 純男
	同	埋蔵文化財課	課長	山口 謙治
	同	埋蔵文化財課	第2係長	池崎 謙治
	同	埋蔵文化財課	事前審査係長	濱石 哲也
調査庶務	同	文化財整備課		御手洗 清
調査・整理担当	同	埋蔵文化財課	調査第2係	各担当者
	麦野A遺跡第6次調査		同	田上勇一郎（調査時）
	麦野A遺跡第7次調査		同	本田浩二郎（調査時）
	麦野A遺跡第11次調査		同	本田浩二郎（調査時）
	麦野A遺跡第13次調査		同	本田浩二郎（調査時）
	麦野C遺跡第4次調査		同	加藤 隆也（調査時）
	麦野C遺跡第7次調査		同	本田浩二郎（調査時）
	麦野C遺跡第8次調査		同	本田浩二郎（調査時）
	麦野C遺跡第9次調査		同	本田浩二郎（調査時）
	雑餉隈遺跡第11次調査		同	本田浩二郎（調査時）
	雑餉隈遺跡第13次調査		同	吉武 学（現任）
	寺島遺跡第2次調査		同	井上 繭子（調査時）

なお、調査当時の調査体制については各章に記載した。また、調査期間中には原因者をはじめ多くの方々の配慮を賜った。記して感謝の意を表する。

3. 遺跡の立地と環境

福岡平野は、東側を三郡山系、南側から西側にかけてを背振山系により囲まれており、北側は玄界灘に面している。平野内は南北方向にむけて展開する丘陵と沖積平野によって形成されている。この沖積平野上には那珂川・御笠川等の河川が博多湾へ向けて北流し、周囲には河川により開折された丘陵や河岸段丘が点在している。これらの丘陵・段丘上には弥生時代から中世にかけての拠点的性格を持つ遺跡が列状に点在している。

麦野遺跡群・雑餉隈遺跡は、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積段丘の中段段丘上に位置し、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南端に存在している。地形的には春日丘陵の東辺にはほぼ平行して伸びる台地上に立地しており、この台地は北西方向から多くの谷によって開折され数条の舌状台地を形成している。この舌状台地上には南八幡遺跡・雑餉隈遺跡・麦野A～C遺跡などの遺跡群が存在していることが知られているが、これら遺跡群の地形的な境界は現在の地形からは不明瞭である。しかしながら、これまで行われた発掘調査や各種開発に先立って行われた試掘調査の成果によって、現在はこれらの遺跡群は埋没した谷状地形によって面されていることが判明している。これらの谷地形は戦前の区画整理段階で埋め立てられ宅地化されたものも多いが、それ以前の遺物包含層が形成されているものもあり、地形の変更は中世以前の古代の段階から開始されていることが推定される。これまでの調査成果より麦野遺跡群・雑餉隈遺跡・南八幡遺跡の帯には、古代の時期に大規模な集落が存在していたことが知られている。

麦野遺跡群周辺でもっとも遡る遺物としては、麦野B遺跡第4次地点、麦野C遺跡第1次地点、南八幡遺跡第1・3・10次地点から出土した旧石器時代に属する石刃・剥片等が知られている。

縄文時代の遺構・遺物については、これまでの調査からの検出数は少なく、麦野C遺跡第3次地点において該期の石鏝が出土した他には、麦野B遺跡第3次地点などに該期の落し穴遺構が検出されているだけである。落とし穴遺構は、麦野A・C遺跡などから埋没した谷頭付近の地形に沿うように数基単位で設置された状況が検出されている。これらの遺構からの遺物の出土はなく時期は特定しがたいが、堆積する埋土から縄文時代に属するものと考えられている。

弥生時代になると遺構・遺物の検出数は増加し、雑餉隈遺跡第5次地点からは前期の住居跡・貯蔵穴等が検出され、続く中期の円形住居跡も検出されている。中期の住居跡の中には大型のものも検出され、比較的規模の大きい拠点集落が短期間ながら展開していた可能性が考えられている。後期の段階になると南八幡遺跡第5次・第9次調査地点で方形竅穴住居・掘立柱建物によって構成される集落が検出される。麦野遺跡群では弥生時代後期に属する遺構として、麦野C遺跡第5次調査で竅穴住居数軒・小児壙棺1基が検出されている。この他の調査地点においても、弥生時代に属する遺物は報告されており、遺跡群内における該期の遺構の存在が推定できる。

古墳時代には遺構・遺物は増加せずに、前期から中期にかけては何も検出されていない。後期になって南八幡遺跡第2・3次地点で合わせて7軒の竅穴住居が検出されるのみであり、小単位の集落が展開していたことは推測されるが、これは後の奈良時代の大集落とは連続せず短期間の居住であったことと言えよう。

7世紀後半から8世紀代にかけては、これらの遺跡群にとって大きな画期となる。雑餉隈遺跡第9次地点では7世紀末から8世紀初頭的大型建物群が検出され、その規模と配置から官衙的性格が想定されている。8世紀中頃から後半にかけては各遺跡群において竅穴住居で構成される集落が検出されるようになる。集落がほぼ同時期に広範囲にわたり展開し始めるこの現象は、各遺跡群の各調査地点の調査成果からも伺うことができよう。これらの住居群はかなりの高密度で分布しており、雑餉隈遺

跡第5・8次地点合わせて5200㎡中に56軒の検出数を数え、麦野C遺跡第1次・第5次調査地点においても70軒以上の住居が濃密な分布状況で検出されている。これらの住居群は数回の建て替えがなされており、長期間にわたり集住が行われたことがわかる。9世紀代に入ると検出遺構は極端に減少し、賑わいを見せた遺跡群一帯は、閑散とした景観に変化したものと想像される。

中世の段階でも検出される遺構は希薄で、麦野A遺跡第4次地点で中世前半期の掘立柱建物などの集落、麦野C遺跡第5次調査地点で区画溝が検出される程度である。後半期には麦野A遺跡第1次地点で15世紀代の集落が検出された程度である。麦野C遺跡内に存在する日吉神社内の板碑には嘉暦三年（1328年）の造立年が刻まれており、「筑前国統風土記付録」にも記述されている。該期の集落が展開していたことを伺わせる資料であろう。

寺島遺跡周辺には南西側に奴国の王墓とされる須玖岡本遺跡を中心とした弥生時代中期～後期の須玖遺跡群が広がる。南側には御陵遺跡が存在し、銅鐻鉤型などの遺物が出土している。西側には笠拔遺跡があり、福岡市南端部を東西方向に貫く外環状道路建設時の発掘調査において銅鐸土製品・銅矛片・青銅器鋳造関連遺物などが出土している。この他にも突帯文期の水路や弥生時代中期末から後期にかけての井堰を伴う貯水遺構、古墳時代前期や律令期の遺構群が検出されている。

平成17年3月現在、各遺跡では以下のように発掘調査が実施されている。

- a. 麦野A遺跡群においては第14次調査までが実施されている。調査は遺跡範囲の中央部付近にやや集中しており、範囲北側での調査事例は少ない。調査は個人専用住宅・共同住宅に伴うもので、調査面積は1000㎡以下の小規模なものが多く。
- b. 麦野B遺跡群においては第4次調査までが実施されている。共同住宅・公共施設建設に先立って行われた調査が多く、調査面積は1000㎡を超える大規模な面積で実施されている。
- c. 麦野C遺跡群においては第9次調査までが行われている。第1次・第5次調査は比較的広い面積で行われているが、それ以外は小面積の発掘調査である。調査は範囲西側に集中している。
- d. 雑餉隈遺跡群においては第17次調査までが実施された。調査は東側と南東側に集中し、第9次調査は5000㎡を超える大規模な範囲で行われた。第11・12次調査は南西側の宅地内で個人専用住宅建築に際して行われ、いずれも小面積について実施されたものである。
- e. 南八幡遺跡群においては第10次調査までが行われている。これまでの調査は遺跡範囲東側に集中して行われており、今後も増加するものと思われる。
- f. 寺島遺跡では2次調査までが実施されている。第1次調査は遺跡範囲南端部において外環状道路建設に先だて行われてのもので、第2次調査は遺跡中央部で実施されている。

これらの遺跡群の範囲は、発掘調査・試掘調査など成果をもとに日々改訂されている。前述のように雑餉隈遺跡では平成17年3月現在までに第17次までの発掘調査が行われているが、雑餉隈遺跡の東側には近接して中ノ原遺跡が埋蔵文化財包蔵地として新しく登録されている。両遺跡の間には現在は埋没している谷地形が存在しており、それぞれ独立して存在する遺跡であることが近年の試掘調査から判明している。なお、雑餉隈遺跡第2次・第3次調査は現在では中ノ原遺跡範囲内に含まれており、それぞれ中ノ原遺跡第1次・第2次調査と調査回数の変更を行っている。平成16年4月には中ノ原遺跡範囲確定後、福岡市では初めての発掘調査が行われたが、この調査を第3次調査として登録している。これまでの福岡市南端に存在する麦野遺跡群周辺では50次以上の発掘調査が実施されており、急速に進む開発に対応している。外環状道路の整備や再開発を起因とする開発が増加する地域であり、発掘調査もこれに比例して増加する地域の一つである。今後の調査によって遺跡群全体の様相が解明されることに期待したい。

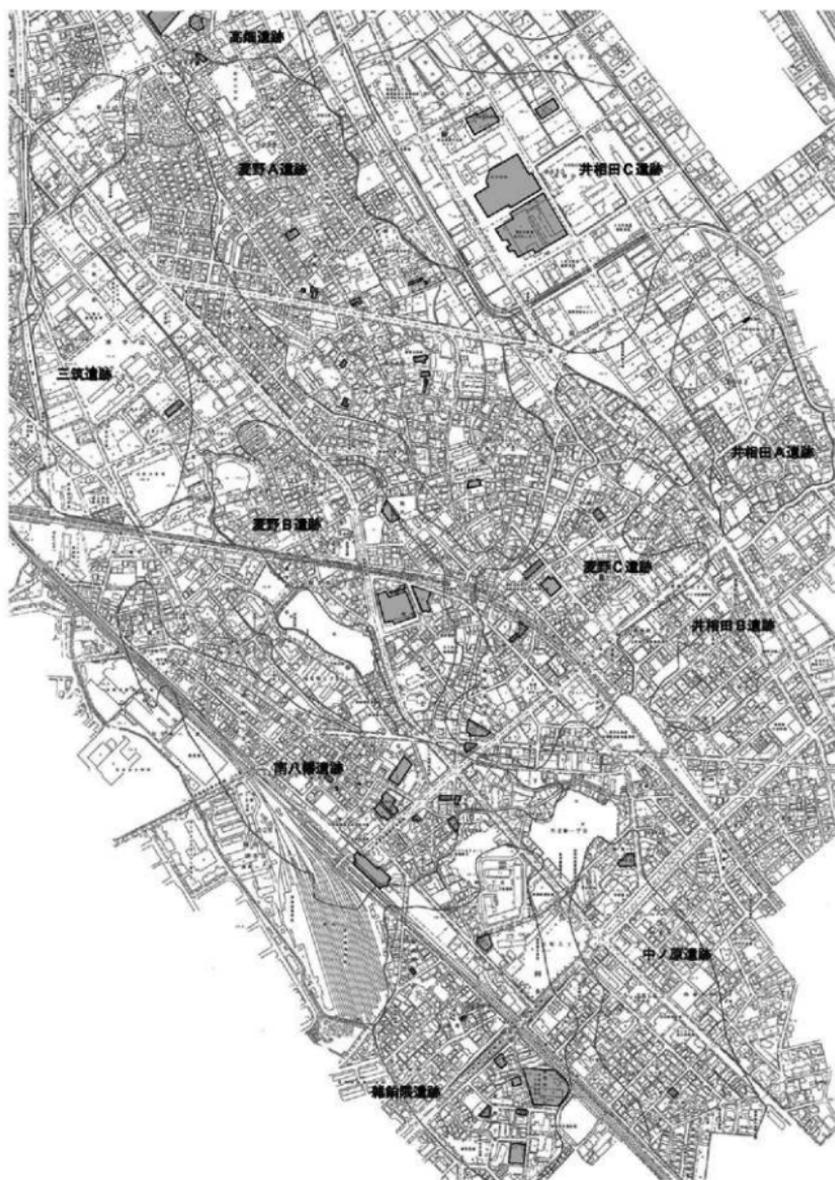


Fig. 1 通跡位置図 (S=1/10000)



Fig. 2 遺跡位置図 (S=1/8000)

収録遺跡一覧

調査名	担当者	調査番号	遺跡略号	所在地	
麦野 A 遺跡第 6 次調査	田上勇一郎	9 8 2 4	MGA6	博多区麦野 3 丁目 11-29	
	調査面積	244㎡	調査期間	1998.07.011~1998.07.16	
	調査原因	個人専用住宅		分布地区番号	12・麦野・0048
麦野 A 遺跡第 7 次調査	本田浩二郎	9 9 7 2	MGA7	博多区麦野 5 丁目 2-33・36	
	調査面積	450㎡	調査期間	2000.03.13~2000.05.02	
	調査原因	個人専用住宅		分布地区番号	12・麦野・0048
麦野 A 遺跡第 11 次調査	本田浩二郎	0 1 3 9	MGA11	博多区麦野 4 丁目 11-5	
	調査面積	130㎡	調査期間	2001.11.20~2001.12.01	
	調査原因	個人専用住宅		分布地区番号	12・麦野・0048
麦野 A 遺跡第 13 次調査	本田浩二郎	0 1 5 6	MGA13	博多区麦野 2 丁目 1-8	
	調査面積	250㎡	調査期間	2002.02.18~2002.03.09	
	調査原因	宅地造成		分布地区番号	24・板付・0048
麦野 C 遺跡第 4 次調査	加藤隆也	9 6 2 8	MGC4	博多区銀天町 2 丁目 3-6	
	調査面積	265㎡	調査期間	1996.08.05~1996.08.13	
	調査原因	ビル建設		分布地区番号	12・麦野・0050
麦野 C 遺跡第 7 次調査	本田浩二郎	0 3 0 4	MGC7	博多区麦野 6 丁目 18-1	
	調査面積	115.83㎡	調査期間	2003.04.14~2003.04.23	
	調査原因	個人専用住宅		分布地区番号	12・麦野・0050
麦野 C 遺跡第 8 次調査	本田浩二郎	0 3 0 5	MGC8	博多区麦野 6 丁目 18-15	
	調査面積	121.38㎡	調査期間	2003.04.24~2003.05.07	
	調査原因	個人専用住宅		分布地区番号	12・麦野・0050
麦野 C 遺跡第 9 次調査	本田浩二郎	0 3 0 6	MGC9	博多区麦野 6 丁目 18-16	
	調査面積	40.98㎡	調査期間	2003.05.08~2003.05.20	
	調査原因	個人専用住宅		分布地区番号	12・麦野・0050
雑餉隈遺跡第 11 次調査	本田浩二郎	9 9 1 6	ZSK11	博多区昭和町 1 丁目 36	
	調査面積	60㎡	調査期間	1999.05.24~1999.06.03	
	調査原因	個人専用住宅		分布地区番号	13・雑餉隈・0054
雑餉隈遺跡第 13 次調査	吉武 学	0 2 3 4	ZSK13	博多区新和町 2 丁目 7 番 11 号	
	調査面積	156㎡	調査期間	2004.09.26~2004.10.11	
	調査原因	ビル建設		分布地区番号	13・雑餉隈・0054
寺島遺跡第 2 次調査	井上麻子	0 2 0 8	TRS 2	南区横手南町 10-8	
	調査面積	89㎡	調査期間	2002.04.01~2004.04.12	
	調査原因	個人専用住宅		分布地区番号	25・井尻・0102

II 麦野A遺跡第6次調査

1. 調査にいたる経緯

1998年（平成10年）4月8日、大村善弘氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区麦野3丁目11-29における個人住宅建設にともなう埋蔵文化財事前審査願が申請された。申請地は麦野A遺跡にあたるため、埋蔵文化財課では1998年6月9日に確認調査を実施した。その結果、現地表下30cmで明褐色のローム層にあたり、土坑や柱穴を発見した。遺構面まできわめて浅いため、工事による文化財への影響は大きいと考えられた。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもち、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査は1998年7月1日より7月16日まで実施した。

2. 調査の組織

発掘調査にあたっての組織は以下の通りである（調査当時）。

調査委託	大村善弘		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田 英俊
調査総括	埋蔵文化財課	課長	柳田 純孝
		調査第2係長	山口 譲治
事前審査	埋蔵文化財課	事前審査係長	田中 壽夫
		主任文化財主事	杉山 富雄
		事前審査係	屋山 洋
調査庶務	文化財整備課	管理係	河野 淳美
調査担当	埋蔵文化財課	調査第2係	田上 勇一郎

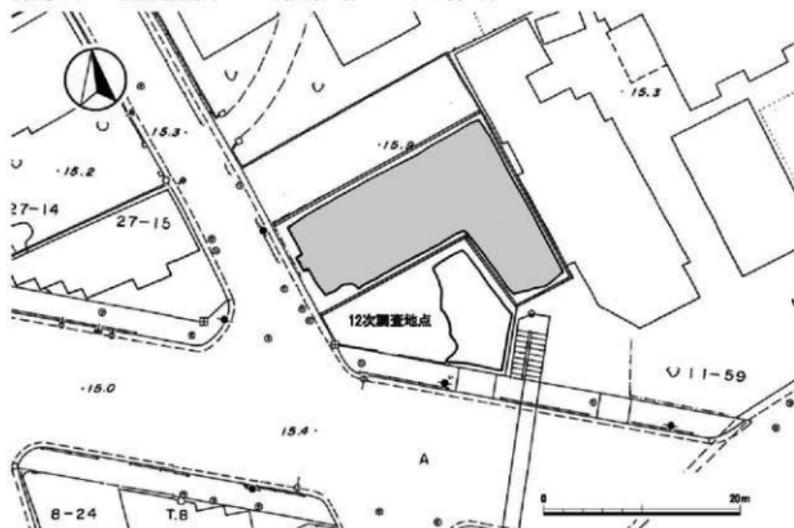


Fig. 1 調査地点の位置 (1/500)

3. 調査の記録 (Fig. 1・2, Ph. 1・2)

調査地点は遺跡のほぼ中央部にあたり、標高は15.5mともっとも高いところである。南隣では12次調査が行われている。排土を場内に置いたため、東西2分割して調査を行った。検出した遺構は奈良時代から中世後期のもので、竪穴住居1軒、溝3条、井戸1基、土坑9基、ピット多数である。ピットは木の根によると思われるものが大多数である。調査区北東部は地山であるロームが下がっていくが、中世後半の遺物を含む明褐色土で盛土されていた。

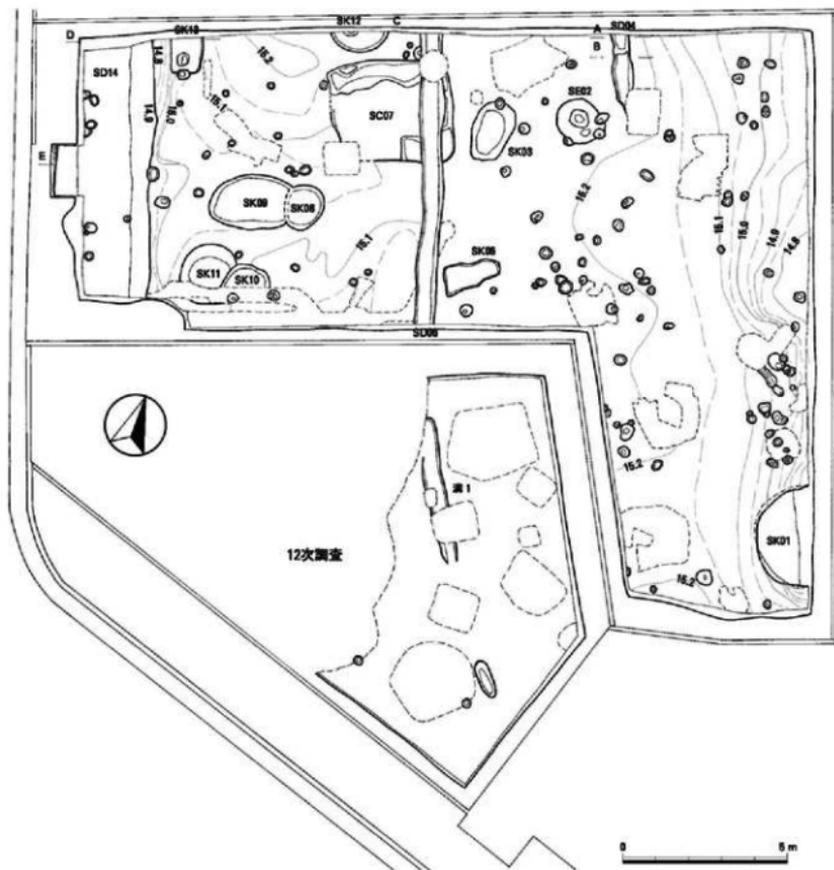


Fig. 2 遺構分布図 (1/150)



Ph. 1 調査区東側全景 (南から)



Ph. 2 調査区西側全景 (東から)

(1) 住居

SC07 (Fig. 3・4, Ph. 3)

調査区中央北寄りで検出された。SD06に切られている。3.1×3.7mの長方形で残存壁高は10cm程度。かなり削平を受けている。床面(堀方?)は北側がやや深くなっている。柱穴、竈は検出できなかった。出土遺物は土師器の甕、須恵器の坏身・坏蓋・甕、砥石がある。1は須恵器の坏蓋。つまみは欠損している。2は須恵器の坏身。やや外に開く高台を貼り付ける。3は土師器の坏身。4は砥石である。頭部に穿孔がある。4面使用している。石英長石斑岩製。奈良時代の住居である。

(2) 溝

SD04 (Fig. 3・4)

調査区北東部で2.2m分確認した南北方向の溝。幅50~60cm。北側は調査区外に伸び、南側は浅くなって終わる。北側が一段深くなっている。土師器碗、須恵器片、黒色土器が出土した。5は土師器の碗である。10世紀前後の遺構か。

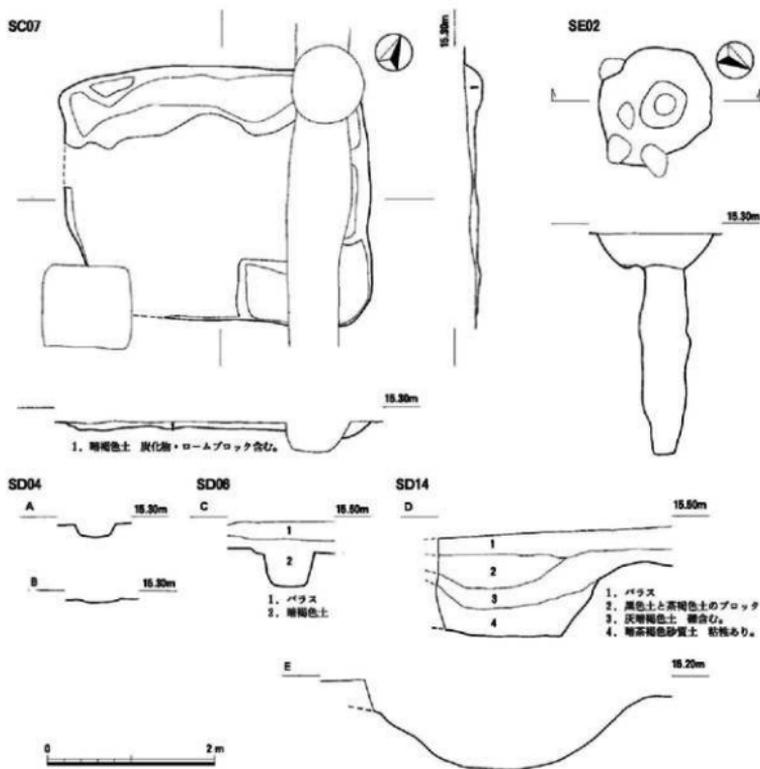


Fig. 3 遺構実測図1 (1/60)

SD06 (Fig. 3・4, Ph. 4)

調査区中央で検出した南北方向の溝。両端とも発掘区外へ伸びる。南側で行われた12次調査で延長部が確認されている。幅60~70cm、深さ40cm。龍泉窯系青磁碗Ⅱ類(6)、白磁平底皿のほか土師器の坏・甕・甔、須惠器の坏身・坏蓋・甕などの奈良時代の遺物や、風化の度合いから旧石器時代のものと思われる黒曜石の調整剥片(17)が出土している。13世紀代の遺構である。

SD14 (Fig. 3・4, Ph. 5)

調査区西端で検出した南北方向の溝で、両端とも発掘区外へ伸びる。西側は一部拡張して溝の西側を確認した。幅3m、深さ90cmである。底は平らでいわゆる箱堀の形状をなす。白磁碗、底部糸切りの土師器坏・皿、土師質の播鉢、土鍋、瓦のほか、奈良時代の土師器坏身、須惠器坏身・甕などが出土した。7は須惠器の坏身。8は土師器の小皿である。底部は糸切りで板状圧痕が残る。9は土師器の壺である。10は白磁碗で見込みの軸を輪状に掻き取る。3層より上は近世以降の堆積であり、中世後期に掘削され、近世以降に埋没したと考えられる。

(3) 井戸

SE02 (Fig. 3・4, Ph. 6)

調査区中央やや北寄りで検出した。径1.3mで40cmほど皿状に掘り下げ、そこから径50cmを2.3m掘り下げている。覆土は粒子が細かい黒色土である。土師器の坏身・甕・長頸壺、須惠器の坏身・坏蓋・甕が出土している。11は須惠器の坏蓋である。天井部は回転へら割り。12・13は須惠器の坏身。14は土師器の坏。15は土師器の甕。16は土師器の長頸壺の頸部である。奈良時代の井戸である。



Ph. 3 SC07 (南から)



Ph. 4 SD06 (南から)



Ph. 5 SD14 (南から)



Ph. 6 SE02 (東から)

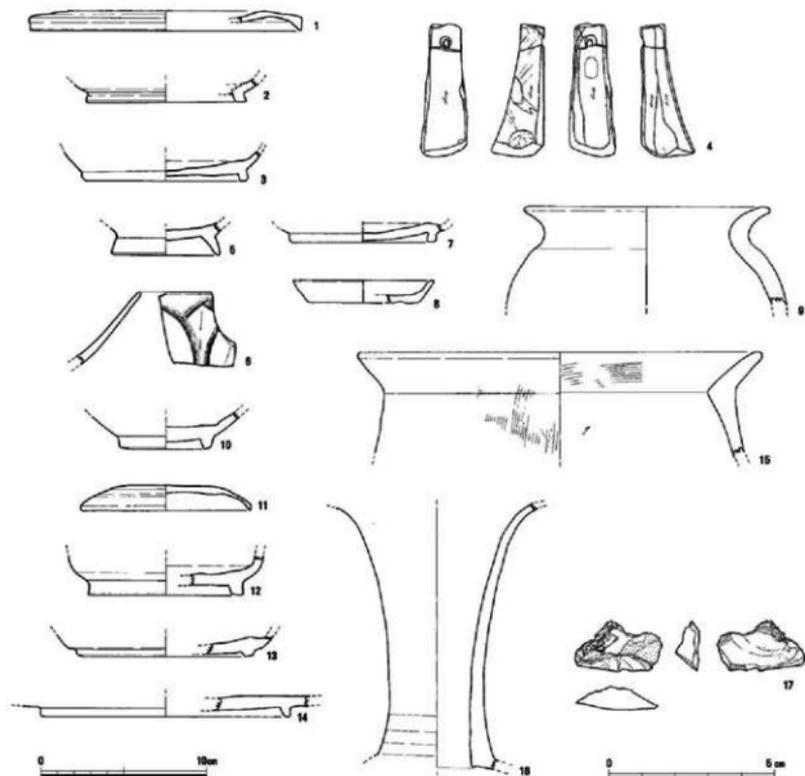


Fig. 4 出土遺物実測図1 (17: 2/3・他: 1/3)

(4) 土坑

SK01 (Fig. 5・6, Ph. 7)

調査区南東端で検出した径3mの円形土坑である。東半は発掘区外に伸びる。壁は垂直で、底に近いところで広がりオーバーハングしている。底は平坦である。残存壁高は1.4m。出土遺物はほとんどが底部糸切りの土師器の坏・小皿で、そのほかに土師質の擂鉢、土鍋、奈良時代の須恵器环蓋がある。18~21は土師器の小皿、22~25は土師器の坏でいずれも底部糸切りである。19には板状圧痕がある。26は土鍋である。中空の把手がつく。中世後期の遺構である。

SK03 (Fig. 5)

調査区中央やや北寄りで検出した略楕円形の土坑。長軸2m、短軸1.2m、深さ30cm。土師器と須恵器の小片が出土している。

SK05 (Fig. 5)

調査区中央で検出した不定形土坑で、長軸1.7m、短軸0.9m、深さ5cm。出土遺物はない。

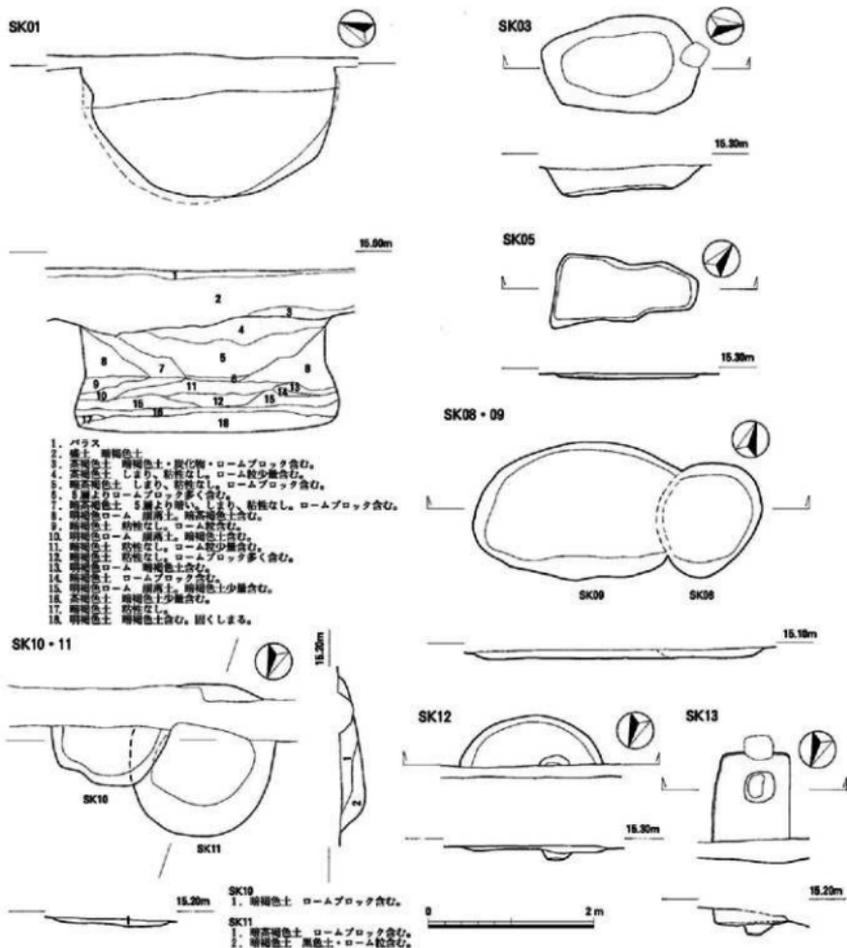


Fig. 5 遺構実測図2 (1/60)

SK08・SK09 (Fig. 5・6)

調査区西寄りで検出した土坑である。覆土や底面の深さが同じではっきりしなかったが、SK08がSK09を切っているようである。SK08は長軸1.5m、短軸1.2mの略楕円形土坑で深さは10cm。越州窯系青磁碗、須恵器甕、黒色土器、土師器片が出土した。27は粗製の越州窯系青磁碗である。体部下半は露胎。28は内外面を黒色にした黒色土器である。内面にヘラみがきがなされている。10世紀前後の遺構と考えられる。SK09は長軸2.5m以上、短軸1.6mの楕円形土坑で深さは10cmである。



Ph. 7 SK10 (南から)



Ph. 8 SK10・SK11 (北から)

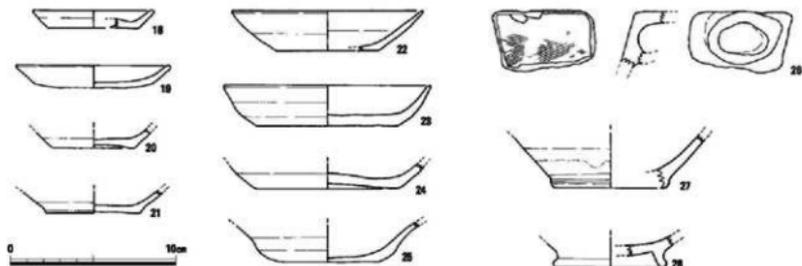


Fig. 6 出土遺物実測図2 (1/3)

SK10・SK11 (Fig. 5, Ph. 8)

調査区西寄りで検出した土坑で、南側は攪乱により失われている。SK10がSK11を切っている。SK10は径1.4m程の円形土坑で深さは10cm。土師器の丸底椀などが出土している。SK11は長軸1.9m、短軸1.3mの楕円形土坑で深さは30cm。須恵器環、土師器の小型甕などが出土している。

SK12 (Fig. 5)

調査区の北端で一部を検出した。北側は発掘区外へ伸びる。径1.7m以上の円形土坑である。深さは5～10cm。西寄りに深さ15cmのビットがあるが、土坑と同一か不明。土師器の小片が出土している。

SK13 (Fig. 5)

調査区北西で検出した。北側は調査区外に伸び、西側はSD14の肩にかかる。長軸1.1m以上、短軸0.9m以上、深さ20cm。南寄りに径30cm、深さ10cmのビットがあるが土坑と同一か不明。出土遺物はない。

4. 小結

かなりの削平を受けているものの、奈良時代から中世後期の遺構が検出された。現在調査区西側には台地の中央部を縦断する道路があるが、検出された溝はこの道路と平行している。1次調査ではこの道路と直交する溝が検出されており、中世後期には現況道路に沿った地割りが成立していたことが判明した。

Ⅲ 麦野A遺跡第7次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成12年1月24日、長沼廣臣氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区麦野5丁目2番33・36地内における個人専用住宅建設予定地内に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された（事前審査番号11-2-0820）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野A遺跡範囲内の中央部南側に位置しており、これを受けて埋蔵文化財課では平成12年2月24日に現地での試掘調査を行った。

申請地の現状は畑であり、標高15.5m前後を測る。試掘調査の結果、現地表面から10～30cmほど掘り下げた烏桕ローム層上面において、古代から中世にかけての溝状遺構、土坑・柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。

これらの遺構は住宅建築に伴う基礎工事による破壊を免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、調査費用は個人専用住宅であることから国庫補助金を充てることとし、条件整備の整った平成12年3月13日に着手し、平成12年5月2日に終了した。

発掘調査では、古代の時期が考えられる溝状遺構とこれに前後する掘立柱塀の下部構造と考えられる柱穴列が検出された。調査区付近は古代の那珂郡の南端部付近に位置しており、大宰府と現在の博多を結ぶ官道（東門ルート）に近接している。検出された遺構は規模・構造から官衙関連遺構と考えられ、当時の律令体制の末端機構を明らかにする上で貴重な資料であることから、現状保存についての協議を申請者と重ね、申請者である長沼廣臣氏のご厚意とご理解により住宅基礎部分の設計変更を行い（盛土による基礎底面のかき上げと鋼管杭の位置の変更など）、遺構の大部分を埋め戻し現状保存することとなった。

2. 調査体制

調査委託	長沼 廣臣			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		西 憲一郎（調査時）
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長		山崎 純男（調査時）
	同	埋蔵文化財課 第2係長		力武 卓治（調査時）
	同	埋蔵文化財課 事前審査係長		田中 壽夫（調査時）
調査庶務	同	文化財整備課		谷口真由美（調査時）
調査担当	同	埋蔵文化財課 事前審査係 第2係		加藤 隆也（調査時） 本田浩二郎

調査期間中には長沼廣臣氏をはじめ積水ハウス株式会社福岡支店の方々に、多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。また、福岡市教育委員会埋蔵文化財課の米倉秀紀氏、長家伸氏をはじめとする同僚諸氏からも多くの助言を頂いた。深く感謝する。

3. 調査概要

麦野A遺跡は福岡市南端部に位置しており、周辺には麦野B・C遺跡、雑餉隈遺跡、南八幡遺跡、井相田遺跡群などの遺跡群が展開している。これらの遺跡群は舌状台地状の丘陵上またはその縁辺部の沖積地上に分布するが、その地形的な境界は現在の地形・これまでの調査成果からは判然としない。これは周辺地域が戦前の区画整理によって、大幅な地形改変を受けた結果である。低丘陵部は宅地化のため平坦に削平され、谷部はその削平土によって埋め立てられる。また、石炭運搬用の簡易な鉄道敷設のため丘陵中央部は南北方向の切り通し状に削平を受け、その周辺部については鳥状に残る旧来の宅地敷地内でのみ遺構が検出されるという現状である。

第7次調査地点の現状は畑地で、遺構面である鳥栖ローム層上面までは重機によって掘り下げた。検出される遺構面の標高は15m前後を測る。調査区は、戦前の地形測量図との比較により区画整理時の地形改変は免れており、それ以前の中世の時期にある程度地下げを受けていることが推測された。検出された柱穴・土坑などの遺構の残存度合いや周辺の地形観察から、約50cm前後の削平を受けているものと考えられる。

調査では8世紀中頃から9世紀初頭にかけての二時期に分けられる溝状遺構と、掘立柱淵の基礎構造と考えられる柱穴列、これに伴う門遺構、中世の溝と掘立柱建物数棟を検出した。

調査区内で検出された柱穴列は15基で約30m分を確認した。この柱穴列は主軸をN-55°-E方向にとり、調査区周辺で確認されている条里制の方向ともやや異なる。柱穴の平面形は方形～長方形となり、1辺が1～1.2m前後を測る。検出面から底面までの深さは30～80cmを測り、土層断面の観察からは明確な柱痕跡は確認されないが、柱穴底面においては直径20cm程度の柱圧痕が確認できる。

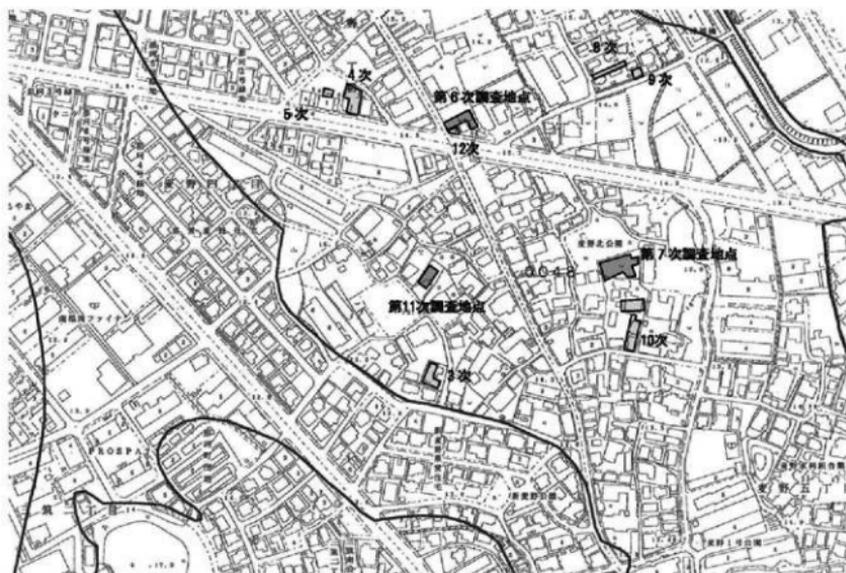


Fig. 1 調査区位置図 (1/4000)

これらの柱底間の距離は、平均で2.1m前後を測る。数基の土坑土層断面からは廃絶後に柱が抜き取られたことが伺える。

検出された溝状遺構は断面形が逆台形を呈し、上場で幅1.4m、下場で幅70cm、検出面から底面までの深さは50～60cmを測る。第一期段階の遺構としては溝状遺構のみが確認され、次の第二期段階で柱穴列を基礎構造に持つ掘立柱塼が構築される。第一期段階の溝状遺構には北側に土塁状遺構、もしくは簡単な柵列が伴うものと考えられるが、遺構としては検出されていない。

溝状遺構の主軸方向は柱穴列とほぼ並行方向を採り（溝状遺構の主軸はやや東方向に振れる）、前段階の構造を熟知した上で、近接した時期に再構築されたものであることが考えられる。この溝状遺構の南側には、柱穴列に並行して掘削された浅い断続する溝状遺構が検出され、これが柱穴列（掘立柱塼）遺構に付随する第二期段階のものと考えられる。

第一期段階の溝状遺構は、ある程度自然堆積により埋没した時点で、基礎層である鳥栖ロームを用い人為的に埋め戻され平坦に造成され、その後柱穴列・浅い溝状遺構の造営作業が行われている。

本調査区周辺で行われた試掘調査においては、今回検出された列の柱穴に類似する方形の柱穴が確

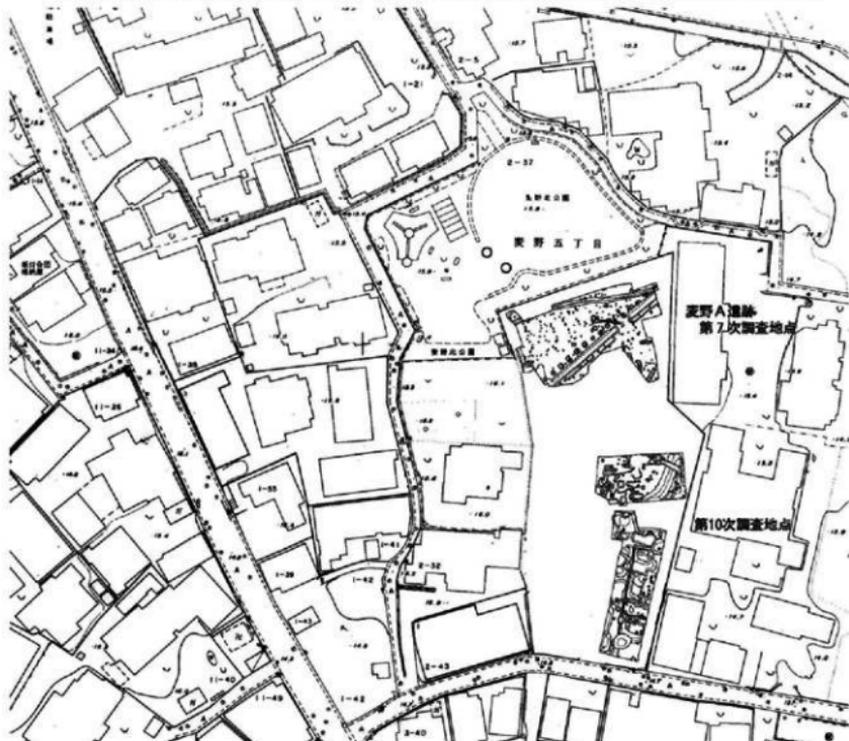


Fig. 2 調査区位置図 (1/1000)

認されており、これを門遺構の地点から折り返すと推定で100m四方（約一町四方）の規模の施設を囲む柱穴列（掘立柱基）を復元することができる（第V章Fig. 5参照）。

調査区東側で検出された陸橋状の形状となる門遺構は、第一期段階での規模は小さく、第二期段階でその規模は拡大される。第一期段階での幅は約3mで、第二期段階の門遺構の幅は4.6mを測る。

遺構の規模・構造から官衙関連施設の外周を区画する遺構であることが考えられるが、調査地点は古代那珂郡の南端に位置しており（Fig. 9参照）、これらの遺構がどのような性格を持つ施設に伴うものかは周辺で検出される遺構などの詳細な検討を必要とする。

本調査地点から北東約300mの地点には、井相田C遺跡が所在し古代の官道（東門ルート）の一部が検出されている。この官道は大宰府より水城東門を通る経路で造営されており、高畑遺跡第18次地点においても、その延長部分が検出・調査されている。本調査地点で検出された溝状遺構等は、この官道にほぼ直交するように掘削されており、官道を強く意識して造営された遺構であることが推測される。なお、門遺構は官道方向ではなく、大宰府方向に向けて設置される。

本調査後の平成13年1月～3月にかけて本調査地点南側地点において第10次調査が実施されている（Fig. 2参照）。調査では古代の竪穴住居2軒、時期が不確定であるが方形の柱穴を持つ掘立柱建物1棟、中世後半以降の掘立柱建物2棟、中近世の溝遺構4条、近世の井戸遺構1基などの遺構が検出・調査されているが、本調査地点で検出された官衙関連遺構群と関連する遺構は掘立柱建物以外検出されておらず、門遺構前がどのような景観であったかは不明確なままである。



Ph. 1 調査区全景



Ph. 2 調査前状況（北東から）



Ph. 3 遺構検出状況（北東から）



Ph. 4 遺構検出状況（東から）



Ph. 5 拡張区遺構検出状況（南から）



Ph. 6 遺構検出状況（北東から）



Ph. 7 遺構検出状況（北東から）



Ph. 8 遺構検出状況（東から）



Ph. 9 調査風景（南東から）

4. 遺構と遺物

前述のように、第7次調査では8世紀中頃から9世紀初頭にかけての二時期に分けられる溝状遺構と掘立柱塼遺構の柱穴列、これに伴う門遺構、中世の溝と掘立柱建物数棟を検出した。

a. 溝状遺構 (SD-001)

調査区を東西方向に横断するように検出された。SD-001とした溝状遺構については、門遺構を挟んで西側で17.0m、東側で7.0m分の調査を行った。溝の主軸はN-55°-Eの方向を採る。断面形は逆台形を呈し、上場で幅1.4m前後を測り、下場では幅0.7m前後を測る。溝の底面はほぼ平坦に掘削されており、側面の一部に幅10cm程度の段を設ける。検出面から溝底面までの深さは60cm程度を測り、遺構面自体が削平を受ける調査区西側端部付近では50cm程度の深さとなる。前述したが、調査区付近は区画整理以前の造成により50cm程度削平されていることが推定されており、本来は上場幅2.2m程度、深さ1.2m前後の規模であったことが想定される。

溝の土層断面観察より、南側に検出される浅い溝遺構との切り合い関係がわかる。SD-001とした溝状遺構はある程度周囲からの堆積で埋没した段階で、遺構面となる鳥栖ローム土を用いて人為的に完全に埋め戻されている。これは溝内が周囲からの堆積土により埋没したことによる溝としての機能低下と、施設造り替えに先立つ整地のための二つの要因が考えられる。

削平により溝上部が失われているため判然とはしないが、埋め戻しには大量の鳥栖ローム土が用いられること、溝埋土北側にブロック状に集中して堆積することから溝北側に土盛りの高まりが存在していたことが考えられた。外周施設の造り替え時にこれを除去し、溝の埋め戻し・整地に利用したことが推測された。SD-001埋土からの遺物の出土はわずかであり、底面直上で須恵器甕の破片などが検出できただけである。

SD-001とした溝状遺構の埋め戻し・整地が完了した後に、南側に位置を変えて連続する方形土坑状の溝（連続土坑状施設）が掘削されている（Ph. 11・Ph. 12参照）。検出面では断続した溝状に確認されるが、完掘時には方形土坑が連続して掘削された形状となる。各土坑は長辺2～3.5m前後の長さとなり、底面の深さも一定ではないことなどから、掘削作業単位を指し示している可能性が考えられた。この溝状遺構は検出の段階では幅1.5m程度を測り、検出面から底面までの深さは20cm前後を測るが、削平以前の本来の規模は幅2.6m前後、深さ40～60cm程度と復元される。調査で検出されなかった部分については、掘削が他の部分に比べ浅かったと考えられ、底面以下までの削平により失われたと推測される。この溝状遺構の埋土は、しまりのない黒褐色土で、須恵器甕の破片などの遺物が少量含まれていたのみである。

規格性・掘方ともに整然と配置され丁寧に掘削・調整されたSD-001に比べ、作業の粗さが目につく溝状遺構であるが、外周施設としての主体が溝単体（SD-001）から掘立柱塼（SA-003）へと移行した結果であろうと考えられた。

b. 掘立柱塼 (SA-003)

SD-001と同様に調査区内を東西方向に横断するように検出された柱穴列である。調査区内で検出された柱穴列は15基を数え、門遺構を挟んで約30m分を確認した。この柱穴列は調査区西側部分ではSD-001とはば並行するN-55°-E方向を主軸方向にとるが、門遺構東側ではやや西側に振れたN-54°-E前後の方向となり、調査区周辺で確認されている条里制の方向とはやや異なる規格性が見られる。検出された各柱穴の平面形は方形～長方形となり、1辺が1～1.2m前後を測る。検出面から底面ま

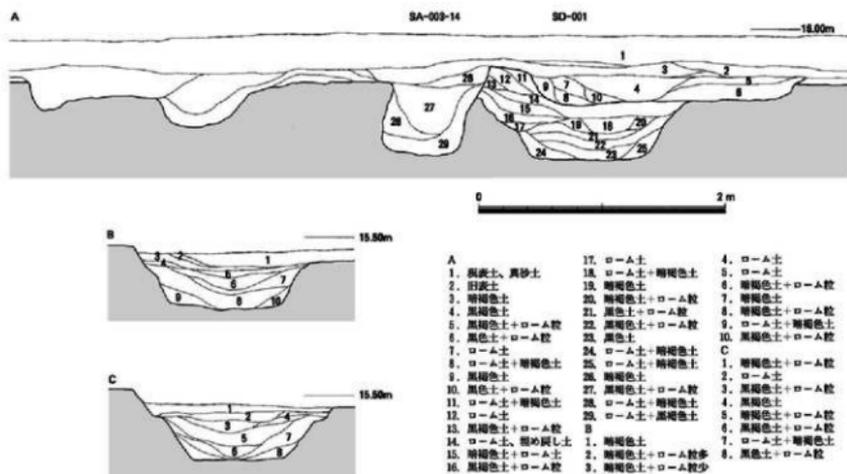
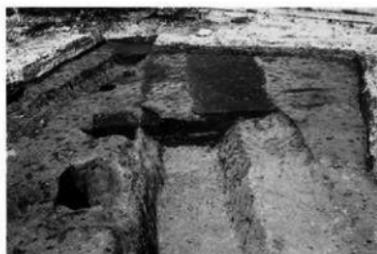


Fig. 4 土層断面実測図 (1/40)



Ph. 10 SD-01土層断面 (北東から)



Ph. 11 SD-01土層断面 (南西から)



Ph. 12 SD-01土層断面 (南西から)



Ph. 13 SD-01土層断面 (南西から)

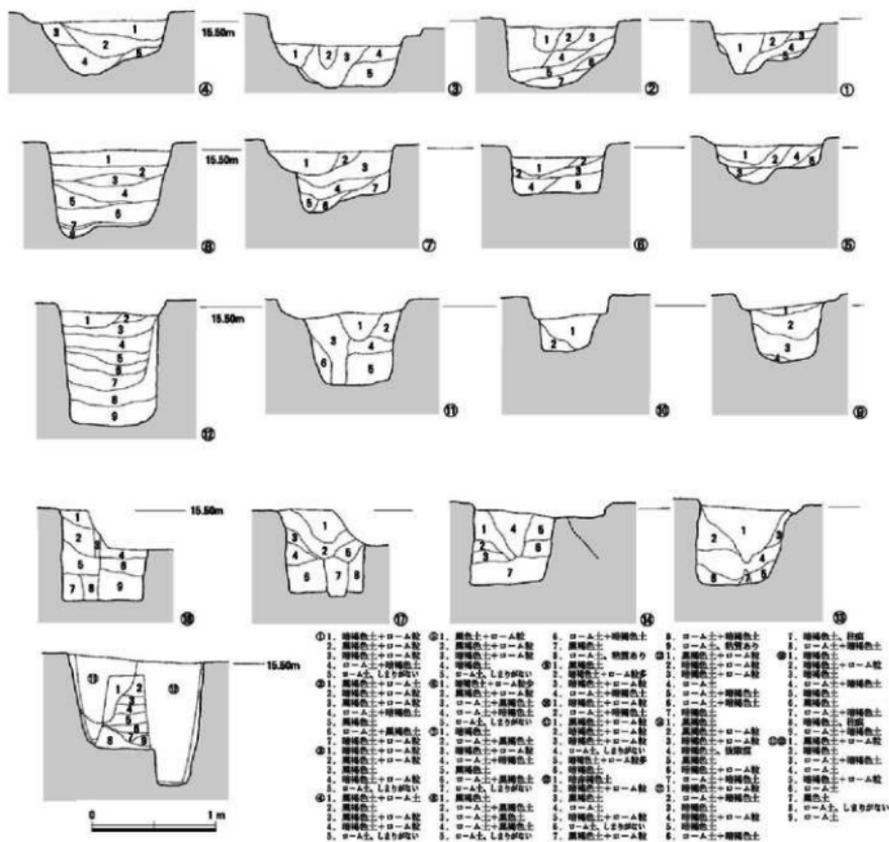


Fig. 5 土層断面実測図 (1/40)



Ph. 14 柱穴1土層断面 (北から)



Ph. 15 柱穴2土層断面 (北から)



Ph. 16 柱穴3土層断面 (北から)



Ph. 17 柱穴4土層断面 (北から)



Ph. 18 柱穴5土層断面 (北から)



Ph. 19 柱穴6土層断面 (北から)



Ph. 20 柱穴7土層断面 (北から)



Ph. 21 柱穴8土層断面 (北から)



Ph. 22 柱穴10土層断面 (北から)



Ph. 23 柱穴11土層断面 (北から)

での深さは現状で30～80cmを測るが、本来は80～130cm前後の深さで掘削されたと考えられる。各柱穴の土層断面実測図はFig. 5に示した。柱穴の底面には直径20～30cm前後の柱圧痕が検出されるものがあるが、土層断面中で明確に柱痕跡が観察できるものではなく、廃絶後に抜き取られたものと考えられる。本調査で検出された柱穴列は施設外周を巡る掘立柱掘の下部構造と考えられるが、瓦などの出土はなく、板葺きの上部構造であったことが想定される。また、柱穴底面で検出される柱圧痕も5cm前後と比較的浅く、上部構造があまり重量のかからない構造体であったことも分かる。検出される柱圧痕間の距離は平均で2.1m前後を測るが、門遺構付近では間隔をやや狭くする。

西側部分ではSD-001とはほぼ並行に掘削されているが、調査区東側ではSD-001とした溝状遺構を柱穴が切った状態で検出され、SD-001埋没後に掘削されたことが分かる。

各柱穴の埋土からの遺物の出土はわずかであり、須恵器碗・甕の破片が数点出土したのみである。これらの出土遺物より遺構の時期としては9世紀初頭の時期が考えられた。9世紀代は麦野遺跡群・雑餉隈遺跡では遺構の検出数が減少する時期であり、これまでの調査で検出される大規模な集落が廃絶される直前の時期でもある。

c. 門遺構

調査区東側部分で検出された陸橋状の遺構で、溝状遺構・掘立柱掘遺構に伴う門遺構である。規模と溝・柱穴列との関係より二時期に分けられる。第一期段階での幅はSD-001間の約3m前後を測る。



Ph. 24 門遺構全景

この門遺構には簡単な上部構造が伴っているものと考えられ、検出された柱穴から梁間1間×桁間1間(2.4m×5.6m)の簡易な四脚門であることが想定された。検出される柱穴は北側では方形土坑となり、南側では楕円形の平面形を呈する。北側の柱穴は検出面から1m程度の深さを測るが、南側では40cm程度の深さとなることから、北側に重量のかかる構造であったことが想定される。北側の柱穴付近には土塁状の高まりの存在が推測されており、門の上部構造はこれに連結する構造であったことも考えられた。門遺構周辺には、これと方向を同一とする浅い溝状のくぼみが検出される。これらは同一直線上に並びことから轍状の形状となる。陸橋部の幅が2.4m程度と狭く、小規模な門であった

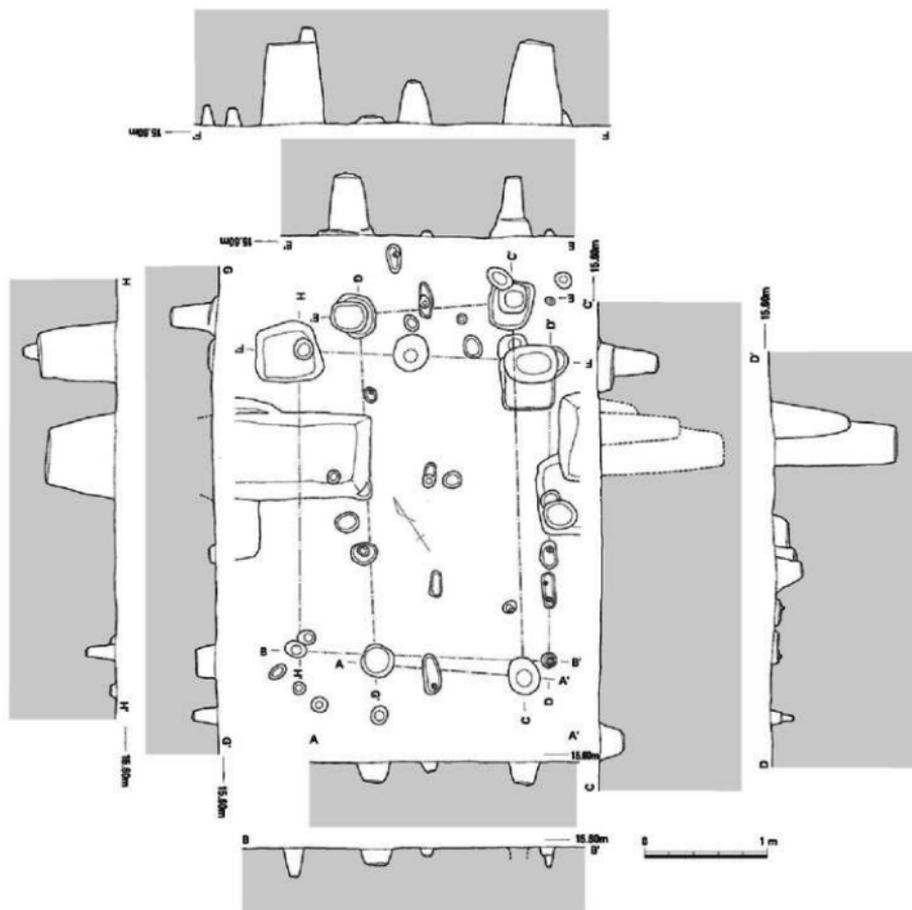


Fig. 6 門遺構実測図 (1/40)

ことが想定された。

第二期段階の門遺構の幅は4.6mを測る。これはSD-001を埋め戻した後に掘削された溝状遺構間の距離であり、門自体も西側に拡張する形で造られる。第二期段階の門遺構も簡易な四脚門状の上部構造を伴っている。梁間1間×桁間1間(2.4m×5.0m)の構造と考えられる。北側の柱穴は、獨立柱脚基礎柱穴列から北側にずれる位置に配置されているが、屋根材や壁体の構造材で連結していたと考えられる。北側柱穴は獨立柱脚の柱穴と同様に方形を呈し、一辺1m前後を測る。検出面から底面までの深さは1.4～2.0mを測り、検出された柱穴の中でも特に深く掘削されており、底面で検出された柱圧痕も深さ40cm前後を測り、北側柱穴に重量がかかる構造であったことがわかる。これらの上部構造についても瓦などの出土はないことから、板葺きの屋根構造を採用していたと考えられる。

今回の調査では官衙関連施設本体の検出はなく、施設の外周を巡る外郭遺構のみの調査であったため、主要施設の性格などについては不明確であるが、門遺構が主要幹線となる官道方向に設置されず、南側に存在したであろう支線側に設置されている点は施設の性格を考える上で興味深い。

d. 獨立柱建物

調査区北西側で検出された遺構で、中世の時期が考えられる遺構である。1間×2間以上の平面形を持ち、配置から数棟の建物が存在していたものと考えられる。柱穴はいずれも円形を呈し、直径20～40cm程度を測る。検出面から柱穴底面までの深さは30cm前後を測る。

本調査区では獨立柱建物と東西方向に主軸を採る溝状遺構(SD-002)が中世に属する遺構として検出された。南側で行われた第10次調査においても中世の時期に属する獨立柱建物と溝状遺構が検出されており、調査区付近が中世の時期に集落の一端であったことが分かる。

e. 出土遺物

調査では土師器・須恵器・貿易陶磁器などの遺物がコンテナケース1箱分出土した。第7次調査は318㎡の面積について行っており、面積と比較すると遺物の出土量はわずかである。これは調査地点が中世に大幅な削平を受けていることや、検出された古代の遺構が施設本体でなく、その外周施設であることも影響しているものと考えられる。以下に出土遺物の説明を行う。

1・2は遺構検出時に出土した須恵器碗である。1は復元口径13.4cmを測り、色調は灰褐色を呈する。2は復元高台径11.4cmを測り、高台の断面形は台形を呈する。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。3・4は中世の溝であるSD-002埋土から出土した土師器環である。いずれも底部は糸切り調整する。3は復元口径12.4cm、4は口径12.6cmを測る。3・4ともに色調は褐色を呈する。

5はSD-002から出土した片切彫りによる装飾が施される。内器面には片切彫りによる装飾が施される。

6はSD-001下層から出土した土師器碗である。復元高台径8.4cmを測り、高台の断面形は台形を呈する。7・8はSD-001上層から出土した土師器壺口縁部である。7は復元口径13.2cmを測り、8は復元口径15.4cmを測る。7は外器面に指頭圧痕が残存、内器面には横位の刷毛目調整とヘラ削り調整が施される。8は外器面に縦位の刷毛目調整が施され、内器面にはヘラ削りが施される。焼成はいずれも良好で、色調は褐色から暗褐色を呈する。

9はSD-001下層から出土した須恵器広口壺頸部片である。口縁端部は欠損する。体部はナデ調整によって成形される。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。

10はSD-001上層から出土した須恵器碗である。復元高台径は10.2cmを測り、高台の断面形は方形

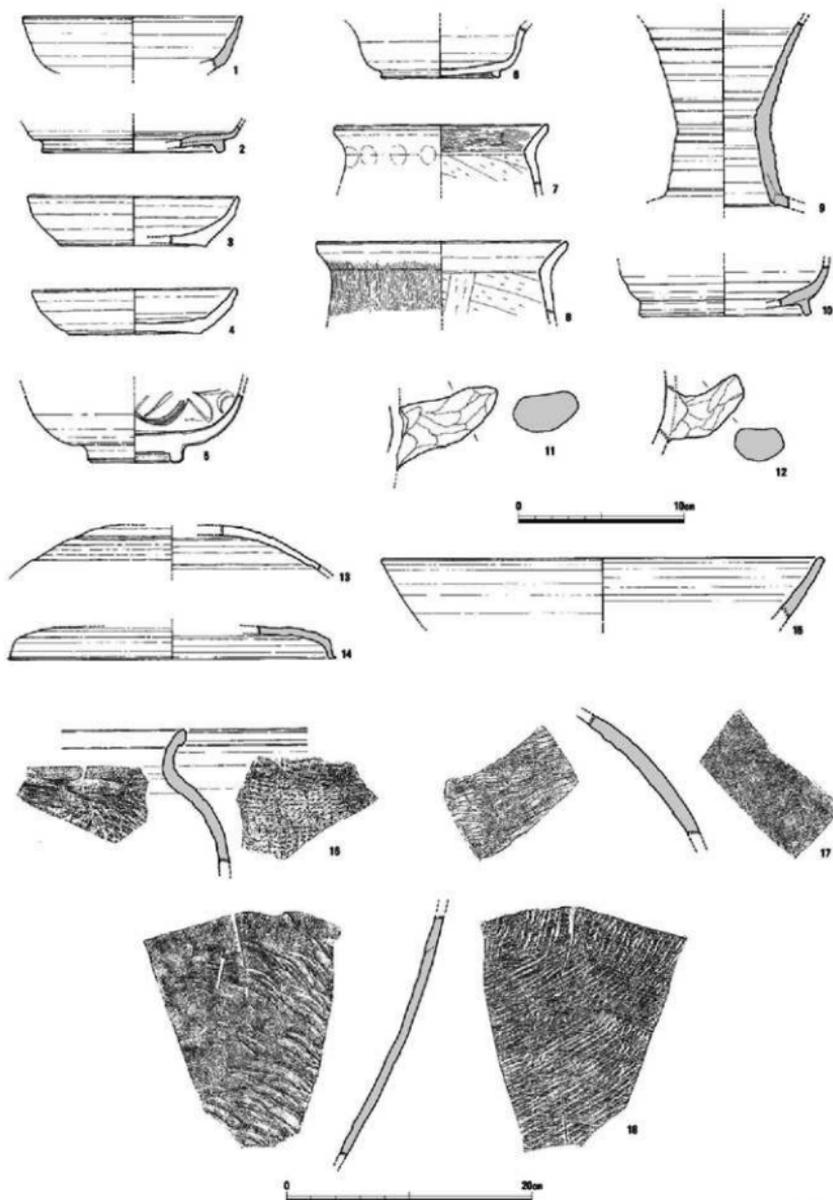


Fig. 7 遺物実測図 (1/3・1/4)

を呈する。体部は丸みを帯び、高台は外底際にて接合される。色調は暗灰色を呈する。

11は遺構検出時に出土した土師器甕把手である。直線的に伸びる形状で、手捏ねで成形される。基部は欠損しているが、甕本体にナデ調整によって貼り付けられたものと考えられる。12はSD-001上層から出土した土師器甕の把手である。上方に屈曲する形状で、基部に体部壁の一部が残る。手捏ねで成形され、焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。13はSP-004から出土した土師器甕である。口縁端部が欠損するため、正確な法量は不明である。天井部付近はヘラ削りが施され、沈線が一条走る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。14はSP-014から出土した須恵器蓋である。天井部は欠損するが、復元口径19.8cmを測る。口縁部の屈曲が強い器形で、天井部付近はヘラ削りで調整され、体部はナデ調整で成形される。色調は暗灰褐色を呈する。15はSD-001上層から出土した須恵器鉢である。復元口径36.0cmを測る。内外器面ともナデ調整が施される。色調は黒灰色を呈する。

16はSD-001上層から出土した須恵器壺の口縁部片である。外器面には叩き目が残り、内器面には青海波文が残る。口縁部はナデ調整で成形される。色調は黒灰色を呈する。17はSD-001西側上層から出土した須恵器甕の胴部片である。18はSD-001西側下層から出土した須恵器甕胴部片である。外器面には平行叩き目が残り、内器面には青海波紋が残る。色調は黒灰色を呈する。

調査では古代から中世にかけての土師器・須恵器などの土器類は出土したが、それ以前の黒曜石などは出土しなかった。

5. まとめ

本調査で検出された遺構の性格としては、規模・構造から官衙関連施設の外周を区画する二時期にわたる外郭遺構であると考えられる（Fig. 8参照）。今回の第7次調査地点を含む麦野遺跡群は古代那珂郡の南端に位置しており、これらの遺構がどのような性格の施設に伴うものかは、今後周辺で検出される遺構・遺物との比較検討の必要がある。以下に簡単な調査のまとめと、これまで行われた周辺遺跡の調査成果から復元できる古代の景観復元を行いたい。

麦野A遺跡の中央部南側に位置する本調査地点から北東約300m地点の付近には、古代の官道（東門ルート）が存在しており、その一部が井相田遺跡・高畑遺跡第での発掘調査で道路状遺構として検出・報告されている。この官道の道路状遺構は大宰府より水城東門を通る経路で造営されており、丘陵部は切り通しで貫通し、周辺の条里制の方向からずれた方向を採り直線的な配置を強く意識して造営されている。本調査地点で検出された溝状遺構・掘立柱源遺構は、この官道にはほぼ直交するように掘削され、立地的にも官道の存在する平野部を見下ろす丘陵上東側端部付近に存在していることから、官道からの視点・景観を考慮して造営された遺構群であることが推測される。本調査では外周施設のみ調査であり、門遺構が南側方向に向けて設置されていることから、これに画される本体施設は調査地点より北側に存在していることが推定される。第7次調査地点から北側約170m付近に位置する麦野A遺跡第4・5次調査地点では、古代に属する井戸遺構や墨書土器なども検出されており、これらは本体施設背面に設置された付属施設の遺構である可能性が考えられた。

（一）周辺遺跡における古代の様相

麦野A遺跡の周辺遺跡における、これまでの発掘調査成果を概観すると、古代の時期に属する竪穴住居・掘立柱建物群など遺構が多く検出されているが、これらの遺構群は二つの傾向に分けられる。

官道南西側の低丘陵上に展開する麦野C遺跡・雑餉隈遺跡・南八幡遺跡からは、8世紀後半から8世紀末にかけての竪穴住居群などが、広範囲（最大で南北2.5km×東西1.2km程度の範囲内に竪穴住居約200軒以上・掘立柱建物50棟以上）に展開した状況で検出される。これらの住居群は、各遺跡内で

いくつかの群集を形成しているものと考えられるが、同時期に存続した一連の大規模な集落と考えられている。これらの集落については、これまでの調査成果においては大宰府・水城・大野城の造営・修繕などの国家的大規模事業等に従事した労役集団のために形成された集落である可能性が想定されていたが、この集落群の存続時期とこれら国家的構築物の造営時期には大きな隔りがあり、これとは異なる当時の社会・時代背景などの要因による集住政策の産物であるものと考えられる。

一方これらの遺跡とは反対の官道東側に位置する井相田遺跡群や高畑遺跡では、8世紀中頃以降の独立柱建物群で構成される集落が検出されており、上級官人の居住地や官衙施設に伴う倉庫群とする見方もある。出土遺物からも官道の西側集落と東側集落とでは大きな差違があり、麦野遺跡群・雑餉隈遺跡などでは墨書土器などの官人の存在を示す遺物の出土量は僅かである一方、井相田遺跡では墨書土器・木簡・人面墨書土器などの遺物が多数出土している。これらの官道を挟んで同時期に展開する遺跡群での検出遺構・出土遺物の違いは、居住集団の差や明確な居住域の区分が行われていたことなどを示す資料として注目される。

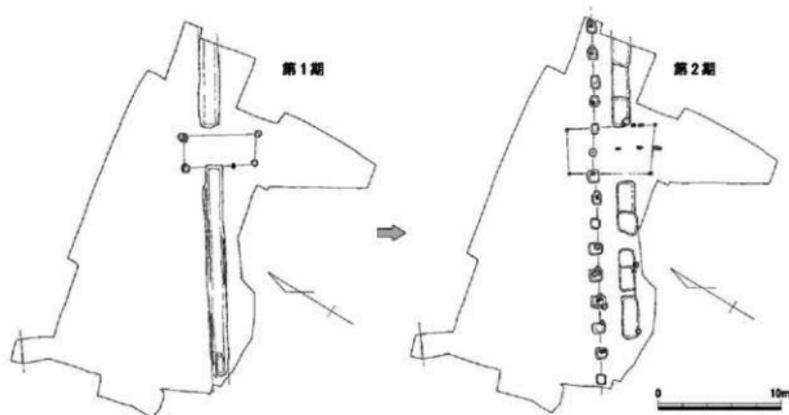


Fig. 8 遺構変遷図 (1/400)

(二) 麦野A遺跡周辺における官衙関連遺構について

これまでの麦野A遺跡周辺調査から検出された遺構のなかで、官衙関連施設と考えられるものとしては、雑餉隈遺跡第9次調査で検出された8世紀後半代に位置づけられる大型独立柱建物2棟などがある。これらの大型独立柱建物は2間×5間以上の規模で、コの字状に配置されている。建物主軸はN-14°-Wまたはこれに直交する方向を採り、建物周辺には性格不明な土坑が連続して検出される。官道からは1.1km程度離れた位置であり、視覚的にも丘陵を挟んでおり直視することはなく、建物配置は本調査地点検出遺構と異なり官道の影響を受けていない。外柵などの外周施設遺構は検出されていないが、集落内住居群の一つを統括する別院（郷衙）・支所などの官衙の性格が想定される。本調査地点で検出された遺構の時期は出土遺物より8世紀中頃から8世紀末前後と位置付けられることから、大規模集落の中心的な官衙施設の位置的な推移を示している可能性の一つとして考えられたが、周辺で検出される遺構や立地条件などから、二つの遺構群については同時に存在した官衙関連施設であると推定される。ただし、(二)で述べたように、官道西側の整穴住居群内に存在する遺構群であ

ることから律令体制に属する公的な根幹施設というより、私的な性格を持つ施設または末端施設である可能性が残る。

(三) 福岡市内の官衙関連遺構について

これまで福岡市内で行われた各遺跡の発掘調査では、多くの官衙関連遺構が検出されている。代表的な遺跡としては鴻臚館、6世紀後半代の三本柱櫓で囲まれる総柱建物群などが検出される有田遺跡群や那珂・比恵遺跡群が挙げられる (Fig. 9)。いずれも対外交渉や郡衙などの律令体制において中心的役割を持つ施設であり、一般集落とは混在しない立地環境で造営されている。これらの遺構群は律令体制初期段階のものであり、いわゆる拠点施設といえよう。その後、律令体制は全国各地へと浸透していくが、8世紀後半から9世紀代にかけては律令体制が弱体化し崩壊を始める時期と言われる。これは同時に、律令体制が地方権力に完全に取入れられ、官衙関連施設が最も成熟し細分化される段階でもあり、本調査検出の遺構の時期と符合するものである。北部九州域においても中央政府による直接的な掌握体制から、大宰府を通じての管理体制に変質した時期であり、それまで那珂・比恵遺跡群内に設置されていた旧那珂郡の中心的な郡衙施設の持つ機能の一部が、より大きな権力をもつ大宰府に近い那珂郡南部域に移設された可能性が考えられた。

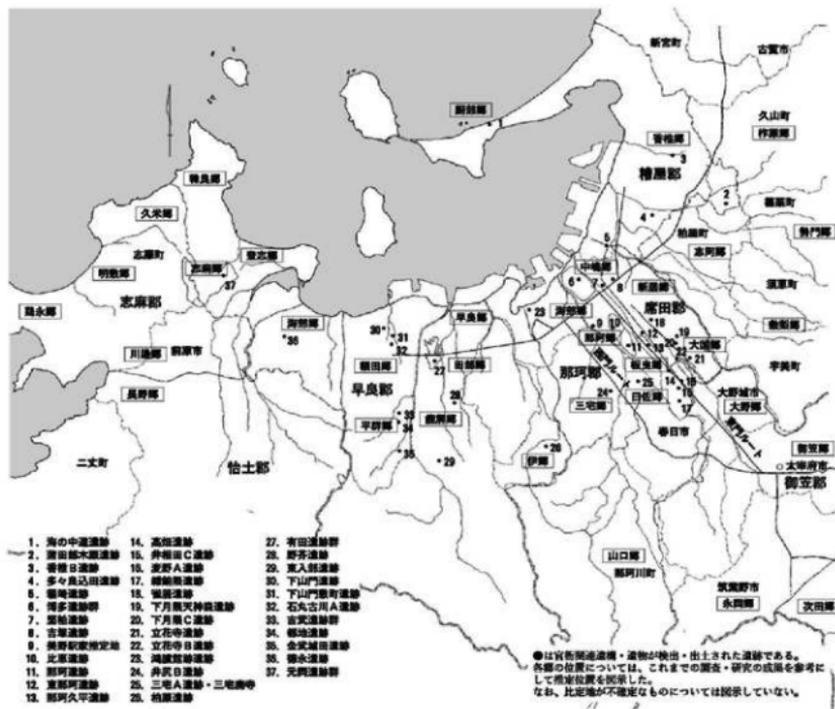


Fig. 9 官衙関連遺跡位置図 (1/24000)

IV 麦野A遺跡第11次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成13年10月12日、渡辺重則氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区麦野4丁目11番5地内における個人専用住宅建設予定地内に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された(事前審査番号13-2-0567)。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野A遺跡の中央部南側に位置しており、周辺でのこれまでの発掘調査・試掘調査から古代の大規模な集落の存在が知られている地点で、竪穴住居などが存在していることが推定される場所であった。これを受けて埋蔵文化財課では平成13年11月5日に現地での試掘調査を行った。申請地の現状は畑で周辺道路とほぼ同じ高さの標高15.7m前後を測る。申請地南側で行った試掘調査の結果、現地表面から30cmほど掘り下げた鳥栖ルーム層上面において古代から中世にかけての土坑、柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。

これらの遺構は、住宅建築に伴う基礎工事による破壊を免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、基礎工事によってやむを得ず破壊される部分(130㎡)については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、調査費用については個人専用住宅であることから国庫補助金を充てることとし、条件整備の整った平成13年11月20日に着手し、平成13年12月1日に終了した。

2. 調査体制(調査当時)

調査委託				渡辺 重則
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		生田 征生(調査時)
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長		山崎 純男(調査時)
	同	埋蔵文化財課 第2係長		力武 卓治(調査時)
	同	埋蔵文化財課 事前審査係長		田中 壽夫(調査時)
調査庶務	同	文化財整備課		御手洗 清(調査時)
調査担当	同	埋蔵文化財課 事前審査係 第2係		大塚 紀宣(調査時) 本田浩二郎

調査期間中には渡辺重則氏をはじめ積水ハウス株式会社福岡支店の方々に、多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

3. 調査の概要

麦野A遺跡群は福岡市の南端に位置している。周辺には麦野B・C遺跡、雑輪隈遺跡、南八幡遺跡、井相田遺跡などの遺跡が展開する。これらの遺跡は近接する舌状台地状の丘陵上に点在するが、過去の区画整理により大きく地形の変更が行われ、地形的な境界は現在の地形からは判然としない。

調査区の現状は宅地内に存在する畑であり、本調査はバックホーを使用して遺構面上に堆積する約30cmの耕作土を除去することから着手した。遺構面は標高15.5m前後の鳥栖ローム層面に設定した。

調査は個人専用住宅用地内ということで約130㎡の面積範囲内であったが、古代の時期が考えられる竪穴住居2軒、溝遺構1条、落し穴状土坑1基、建物としてはまとめられない柱穴群などの遺構を検出した。竪穴住居は付近一帯で検出される住居と同様に、8世紀後半から9世紀初頭にかけてのもので、地形改変による削平を受けているため、住居底面から20～30cm程度しか残存していない。住居は一辺が3m前後の方形プランで、住居内床面に柱穴を伴わないタイプのものである。カマドは住居東側隅部の張り出し部に白色粘土で構築されていたが、廃絶時に破壊されていた。

落し穴状土坑は、検出時は崩壊のため平面形が円形を呈していたが、下部では1m×60cm前後の長方形プランを採る。土坑埋土からは遺物の出土はなく、時期特定は困難であるが、近隣の雑輪隈遺跡・麦野C遺跡などの調査においても同様の構造をもつ落し穴状遺構が検出されているため、比較的近接した時期を考えることが可能であろう。

遺物は土師器・須恵器などの古代に属する遺物がコンテナケース1箱分出土した。

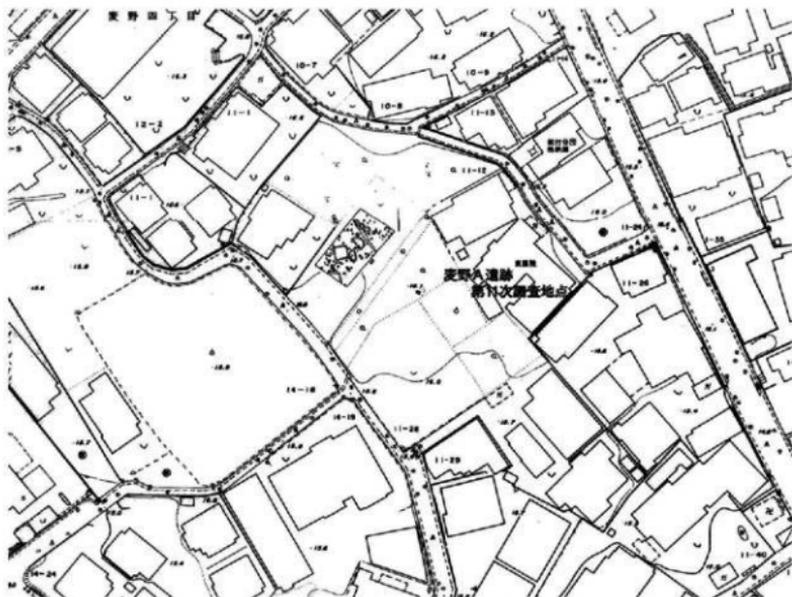


Fig. 1 調査区位置図 (1/4000)

本調査地点付近は8世紀後半から9世紀前半にかけての大規模な集落が形成された地域であり、今回検出されて住居群もその一端を示すものであると考えられる。なお、この大規模な集落の範囲や形成された契機については不明な点が多く、今後の検討を必要とする問題である。

以下に検出遺構と出土遺物についての説明を行う。

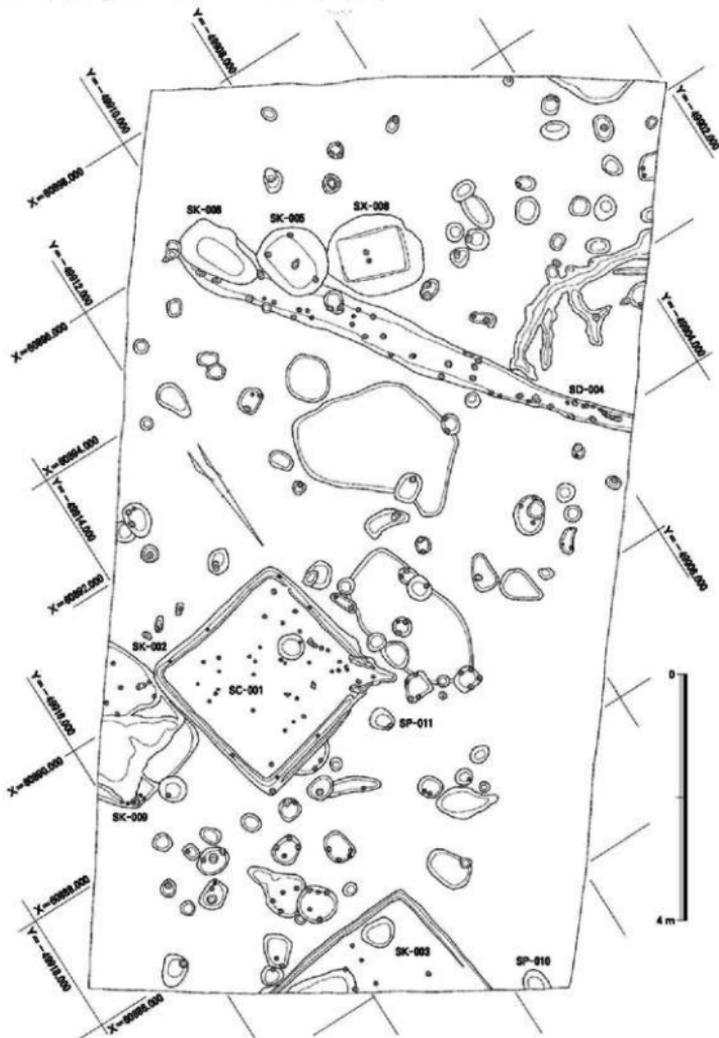


Fig. 2 遺構実測図 (1/80)

4. 遺構と遺物

前述のように調査では、方形竪穴住居2軒、落とし穴状遺構1基、溝状遺構1条、土坑・建物としてはまとめられない柱穴群などの遺構を検出した。遺構面が耕作土直下ということもあり、検出された遺構とは別にピット状の植物痕等が存在する。これら植物痕と遺構とは埋土・規模などで判別可能であった。

a. 竪穴住居

SC-001 (Fig. 3)

調査区中央部南側で検出した竪穴住居である。平面形は方形を採り、一辺2.8m前後を測る。検出面から住居床面までの深さは25cm前後を測り、周辺で検出される同時期の住居と同様に床面上では主柱穴は検出されない。住居床面周囲にはほぼ全周うのように壁溝が設けられ、南東側隅部にカマドが設置される。カマドは住居隅部に張り出し部を設け、白色粘土を壁体として構築されるが両袖底部を残して破壊されている。カマド部北西側床面上には白色粘土・焼土が集中して堆積しており、廃絶時に破壊されたものと考えられる。カマド基底中央部付近の床面は被熱のため、赤変化し硬化している。煙道は住居外に延びるが、削平のため大半が失われている。住居埋土は大別して2層に分層される。上層にはしまりのない暗褐色土が堆積する。極小のローム粒を含むが焼土・炭化物などは混入していない。下層の住居床面直上には黒褐色土が堆積する。カマドを構成していた白色粘土を含む層で、埋土中より土師器・須恵器などの遺物が出土する。壁溝部分には2層に比べやや粘質を帯びる黒褐色土が堆積する。これまで周辺で検出された住居と同様に、住居外周辺部に主柱穴を配置する形態と考えられるが、削平のためこれらも失われている。住居床面上の東側部分で住居内土坑を検出したが、



Ph. 1 調査区全景 (南西から)



Ph. 2 調査区土層断面 (南から)



Ph. 3 調査区土層断面 (東から)



Ph. 4 SC-003検出状況 (北から)

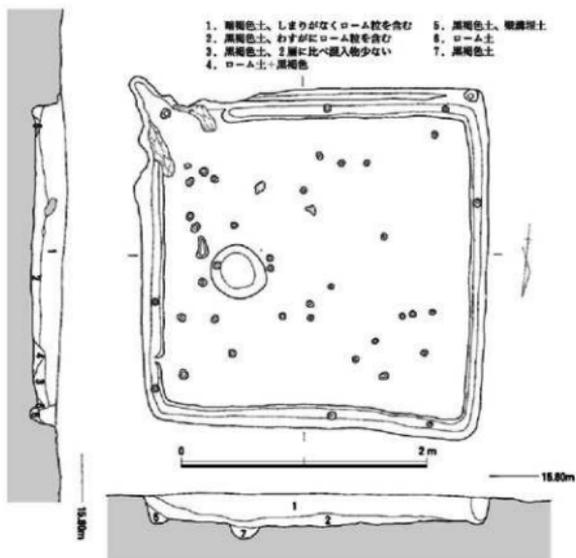


Fig. 3 SC-001実測図 (1/40)

土坑内からは遺物の出土はなかった。土坑内には2層とはほぼ同一の黒褐色土が堆積するが、ローム粒を含まない。

遺物は住居埋土下層より土師器移動式竈・甕や須恵器碗・蓋などが出土した。

出土遺物をFig. 7に示した。

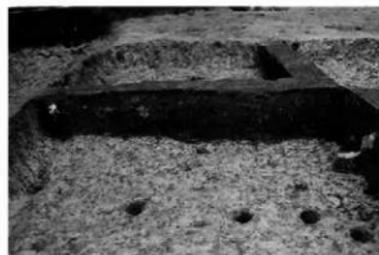
1は須恵器蓋である。蓋は欠損する。天井部はヘラ削りされ、体部はナデ調整される。焼成は良好で、色調は暗灰褐色を呈する。2・3は須恵器碗である。2は復元口径13.6cm、3は口径14.2cmを測る。3は断面形が台



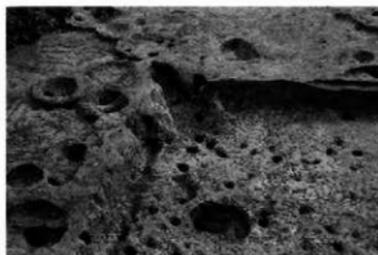
Ph. 5 SC-001検出状況 (北から)



Ph. 6 SC-001完備状況 (北から)



Ph. 7 SC-001土層断面 (西から)



Ph. 8 SC-001カマド検出状況 (北から)

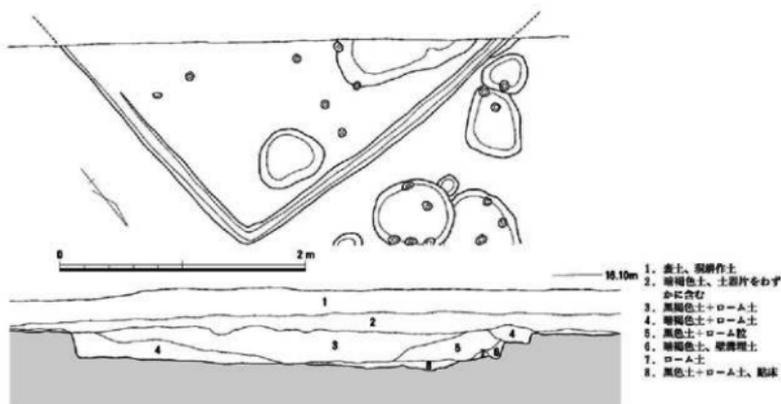


Fig. 4 SC-003実測図 (1/40)

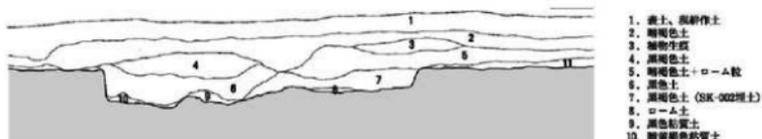


Fig. 5 調査区土層断面図 (1/40)

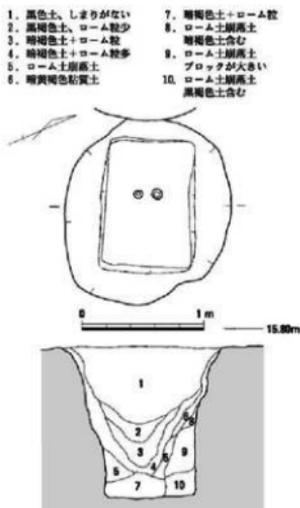
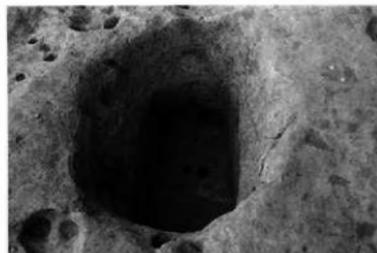


Fig. 6 SX-008実測図 (1/40)



Ph. 9 SX-008土層断面 (南東から)



Ph. 10 SX-008完壁状況 (南東から)

形の高台を貼り付ける。いずれも焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。4・5は土師器甕である。4は復元口径14.8cm、5は復元口径14.6cmを測る。摩滅のため器面調整のほとんどが失われている。色調は褐色を呈する。8は土師器移動式竈焚き口部である。これらの出土遺物より住居の年代は8世紀中頃と考えられる。

SC-003 (Fig. 4)

調査区南端部で検出した方形竪穴住居で、南半部は調査区外に位置するため未調査である。SC-001と同方向の主軸を採る住居で、北半部2.7m×2.2m分について調査を行った。検出面から住居床面までの深さは20cm程度を測る。住居上には調査区全域に堆積する暗褐色土が厚さ5～20cm程度堆積する。住居埋土上層にはローム粒を含むしまりのない黒褐色土が堆積する。この層位からの遺物の出土はなく、下層に堆積する暗褐色土・黒色土より須恵器・土師器などの遺物が少量が出土した。住居検出部分では壁溝が巡り、床面には一部貼床される部分が見られる。なお、カマド・柱穴は調査区内では未検出である。

出土遺物をFig. 7に示した。

9は土師器甕である。外側に開く口縁を持つ甕で、復元口径は22.2cmを測り、外器面には縦位の刷毛目調整が施される。内器面には上方へのヘラ削りが施される。口縁下には煤が付着し、器面の色調は暗褐色を呈する。10は須恵器甕である。頸部より上は欠損する。胴部上半には波状文が施され底部はヘラ削りされる。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

住居の年代はSC-001よりやや新しい8世紀後半と考えられる。

b. 落とし穴状遺構

SX-008 (Fig. 6)

調査区北東側で検出された落とし穴状遺構である。検出時には平面形が長軸1.5m×短軸1.4m前後の楕円形を呈していたが、底面近くでは長方形プランの土坑となる。土坑底面中央部付近からはピット2基が並んだ状態で検出される。底面では長辺106cm×短辺68cm前後の規模となる。土坑底面直上にはローム粒を含む暗褐色土が堆積し、崩落時のローム土が壁際に堆積する。上層にはしまりのない黒色土が厚さ65cm程度堆積する。これら埋土中からの遺物の出土はなかったため、時期は特定できないが、麦野C遺跡や麦野B遺跡で検出される落とし穴状遺構と同様に弥生時代以前の時期に属するものと考えられる。これらの落とし穴状遺構は通常数m間隔で数基単位で設置されるが、本調査区内では1基のみが検出された。過去の地形図では調査地点が北西方向に開く谷地形の東側斜面に位置することから、周囲にも落とし穴遺構が連続して掘削されている可能性が考えられる。

c. その他の出土遺物 (Fig. 7)

6は須恵器環である。復元口径23.6cm、器高2.6cmを測る。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。7は土師器甕口縁部片である。外側に開く口縁部を持つ甕で、外器面は摩滅が著しく器面調整は観察できないが、内器面には斜め上方へのヘラ削り痕が残る。復元口径18.6cmを測る。11は土師器甕の把手である。体部側面にナデ調整によって直接貼り付けられるもので、把手基部には軀体部が残る。12は須恵器甕底部片である。高台の断面形は方形を呈し、体部はナデ調整される。焼成は良好で、色調は黒灰色を呈する。

5. まとめ

以上、検出遺構と出土遺物についての説明を行った。調査の簡単なまとめを行いたい。

調査では弥生時代以前の落とし穴遺構1基と古代の堅穴住居2軒を検出した。これらの遺構より、調査地点が弥生時代以前に狩猟場として使用されていたこと、古代の時期には広範囲に展開する集落の一部であったことが判明した。落とし穴状遺構は、麦野遺跡群・雑輪限遺跡などが立地する台地に複数存在する谷地形の上場沿いに広範囲に設置されていることが、周囲の調査成果から推定される。

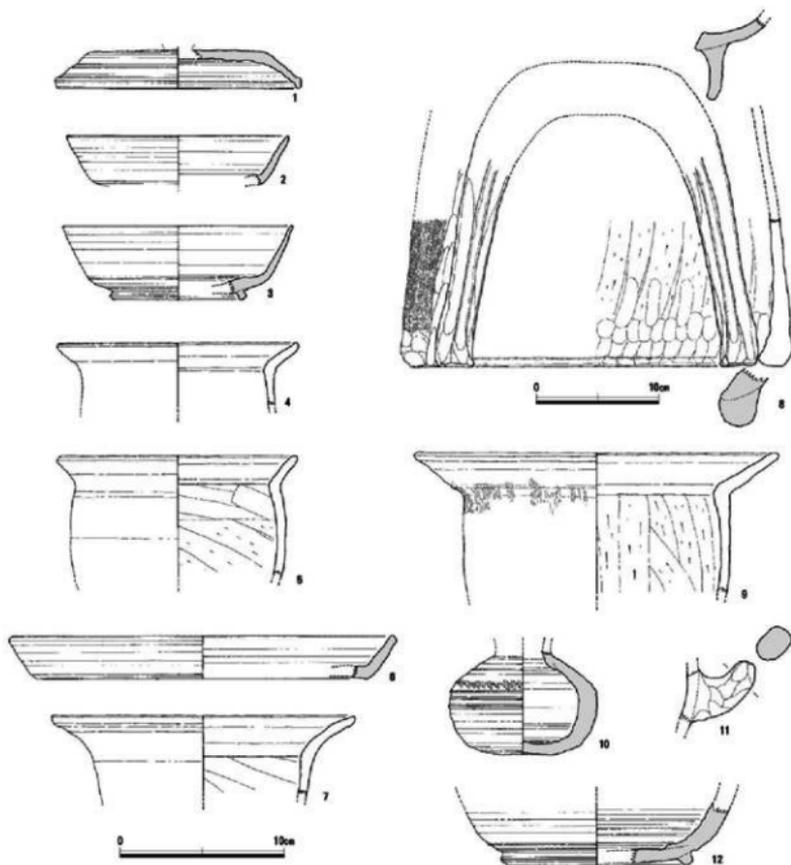


Fig. 7 遺物実測図 (1/3・1/4)

V 麦野A遺跡第13次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成13年12月12日、山根木材株式会社 代表取締役 山根恒弘氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区麦野2丁目1-8、1-9地内における宅地造成工事予定地内に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された（事前審査番号13-2-0731）。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野A遺跡範囲内の北端部に位置している。本申請以前に福岡財務支局より埋蔵文化財課に対して事前審査願（事前審査番号12-1-3）が提出されており、平成12年5月31日に試掘調査が行われている。申請地の現状は宅地であり、標高12.4m前後を測る。

試掘調査の結果、申請地西側では現地表面から20cmほど掘り下げた鳥栖ローム層上面において古代から中世にかけての土坑・柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認されたが、申請地東側の宅地内での試掘では戦前の宅地造成時に大きく削平されたため遺構は検出されなかった。

申請地は丘陵北側突端部付近に位置しており、前述の戦前に行われた開発により申請地東側（丘陵頂部付近）は大きく削平され遺構は既に失われていたが、西側の丘陵斜面部については削平を免れ遺構が残存していたものと考えられる。

申請地西側で検出された、これらの遺構は宅地造成に伴う土木工事による破壊を免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される部分250㎡については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、調査費用については短期間の調査であることから国庫補助金を充てることとし、条件整備の整った平成14年2月18日に着手し、平成14年3月9日に終了した。

2. 調査体制（調査時）

調査委託	山根木材株式会社 代表取締役 山根恒弘		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	生田 征生（調査時）
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長	山崎 純男（調査時）
	同	埋蔵文化財課 第2係長	力武 卓治（調査時）
	同	埋蔵文化財課 事前審査係長	田中 壽夫（調査時）
調査庶務	同	文化財整備課	御手洗 清（調査時）
調査担当	同	埋蔵文化財課 事前審査係 第2係	大塚 紀宣（調査時） 本田浩二郎

調査期間中には板付小学校の方々に、多くの配慮を蒙った。記して感謝申し上げる次第である。深く感謝する。

3. 調査の概要

麦野A遺跡は福岡市の南端に位置しており、周辺には麦野B・C遺跡、雑餉隈遺跡、南八幡遺跡、井相田遺跡などの弥生時代から中世にかけての遺構が検出される遺跡群が展開している。これらの遺跡は近接する舌状台地状の丘陵上に点在しているが、戦前の区画整理により丘陵部は削平され谷部は埋め立てられるなど地形は大きく改変され、現在の地形からは境界は判別できない。

現在知られている麦野A遺跡の分布範囲は南北方向1.2km、東西方向0.4kmを測り、これまでの行われた発掘調査（平成17年3月段階で第14次）は中央部から南側半分に集中している（Fig. 5参照）。

麦野A遺跡第13次調査地点は遺跡範囲の北端部に位置しており、調査地点西側は高畑遺跡の範囲に接している。申請地は東西方向に長い敷地で、東側は宅地となり、実際に調査を行った申請地西側部分は西側の宅地より30～50cmほど低い畑である。

発掘調査はバックホーを使用して約30cmの耕作土を除去することから着手した。遺構面は耕作土直下で検出される標高12.5m前後の鳥居ローム層面で設定した。西側部分は過去の開発によって削平が著しく、遺構のほとんどが消滅していることが試掘調査から明らかにされていたが、これを確認するためにトレンチ状に発掘区を設け、合計250㎡について発掘調査を実施した。

調査区は丘陵東側斜面上に位置するため、遺構面は東側に向かって緩やかに傾斜しており、斜面際に相当する東側端部に土坑などの遺構・包含層が集中して検出される。検出された遺構は古墳時代の土坑・古代の時期が考えられる掘立柱建物二軒・時期不明の方形土坑・包含層・建物としてはまとめられない柱穴群などである。調査区北側隅部で検出された古墳時代の土坑（SK-015）内には土師器

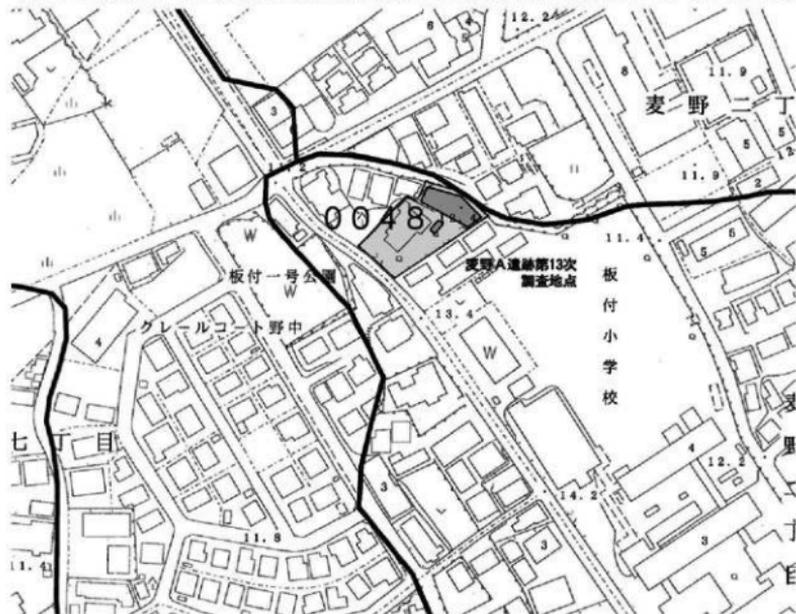
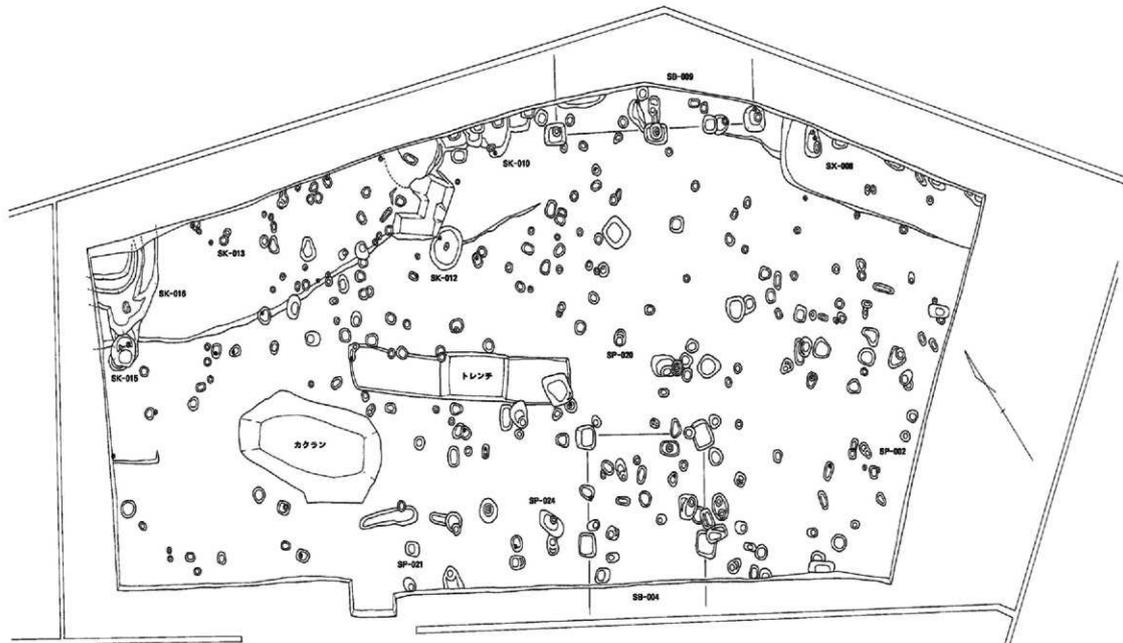
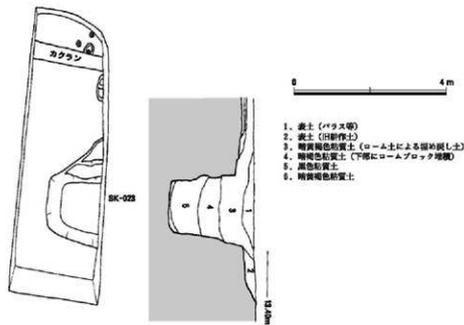


Fig. 1 調査区位置図 (1/4000)



Ph. 1 調査区全景（南東から）



1. 黄土（バラス層）
2. 黄土（2000年式）
3. 暗褐色粘質土（ローム土による締め固め土）
4. 暗褐色粘質土（下部にロームブロック埋め）
5. 暗褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土

Fig. 2 遺構実測図（S=1/100）

小塊が正位の状態では埋置されていた。近接する高畑遺跡第13次調査においても古墳時代後期の土坑などの遺構群が検出されており、これらと一連の遺構と考えられる。

掘立柱建物は柱穴列の一部を検出したのみで、その全容は明らかではないが、二棟は柱筋を同一方向に採り建てられており、意図的な建物配置が看取される。その他の遺構は調査区外に延びるものが多く、全体の形状を把握できたものはわずかであった。検出された古代の掘立柱建物は、調査地点の北東側に位置する高畑遺跡・井相田C遺跡で調査された古代の官道に対してほぼ直交する柱筋方向で建てられており、付近一帯の建物配置に対して官道が影響を及ぼしていたことが推測される。

遺物は弥生土器・土師器・須恵器・陶器などがコンテナケース1箱分が出土した。

以下に検出された遺構・出土遺物について説明を行う。

4. 遺構と遺物

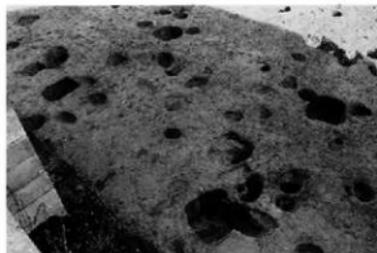
調査では前述のように、掘立柱建物2棟と土坑数基、建物としてはまとめられない柱穴群である。調査区は丘陵北東斜面上に位置しているため、北東側には丘陵端部際に堆積する黒褐色土の包含層が形成されるが、遺物はほとんど含まれておらず少量の土師器片・須恵器片が上層付近から出土するのみである。形成時期については出土遺物からは特定することはできないが、古代の掘立柱建物柱穴が切るように掘削されていたことから古代以前の形成されたものと考えられる。西側部分で設定したトレンチでは大型方形土坑(SK-023)の西側部分を検出し完掘を行った。短軸1.8m前後で、長軸1.4m分を掘り下げたが埋土からの遺物の出土はなく時期は特定できなかった。検出面から土坑底面までの深さは2.2m前後を測り、底面直上には暗黄褐色粘質土が堆積する。土層観察より時期的に新しいものと推測される。



Ph. 2 調査区全景(南東から)



Ph. 3 調査区全景(北西から)



Ph. 4 掘立柱建物検出状況(南から)



Ph. 5 拡張遺構検出状況(北西から)

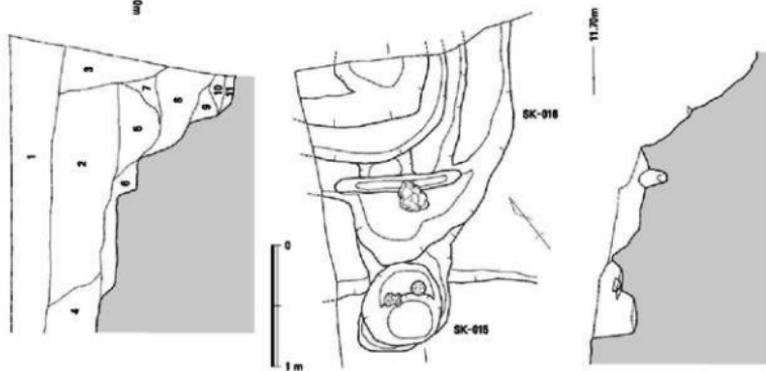
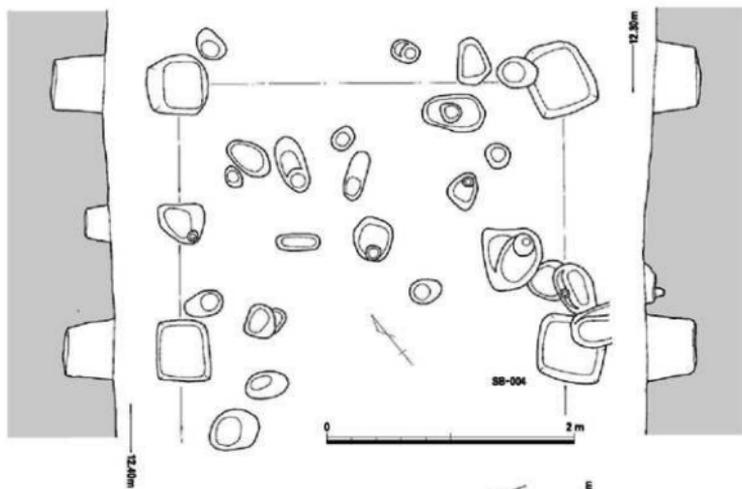
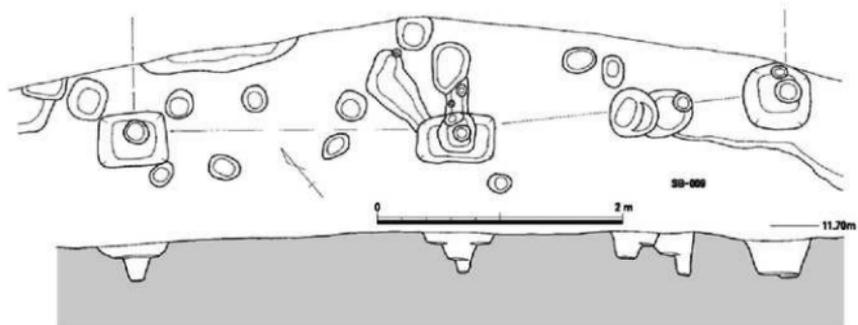


Fig. 3 遺構実測図 (1/40)

a. 掘立柱建物

SB-009 (Fig. 3)

調査区北東側で検出された掘立柱建物で、調査区内では南西側の梁間2間分が検出されただけである。柱穴は方形から長方形を呈し、長軸60cm前後、短軸40cm前後を測り、底面には柱痕が残る。検出面から底面までの深さは35cm前後を測る。柱裏間の距離は2.6m前後を測る。柱穴埋土内より須恵器碗の破片が数点出土した。出土遺物より9世紀前半代の時期が考えられる。

SB-004 (Fig. 3)

調査区南西側で検出された掘立柱建物で、調査区内に北東側の梁間1間×桁間1間以上分が検出された。柱穴は方形を呈し、一辺40cm程度を測る。検出面から底面までの深さは40~50cm程度を測る。梁間で3.0m、桁間で2.2mを測る。北東側で検出されたSB-000とほぼ同軸方向のN-38°-Eを主軸方向とする。出土遺物はSB-000と同様に須恵器小破片のみが出土したのみである。

b. 土坑

SK-015 (Fig. 3)

調査区北側隅で検出した楕円形土坑である。長軸70cm、短軸60cmを測り、検出面から土坑底面までは40cmを測る。土坑北側に段を有し段上に土師器碗が正位の状態検出された。土坑北側には大型土坑が検出されるが、南側の一部が調査区にかかるのみで全体の調査は行っていない。土層観察よりSK-015を切るように掘削されている。土坑内には白色粘土と焼土が検出される。形状から住居カマド張り出し部とも考えられるが判然としない。出土遺物をFig. 4に示した。

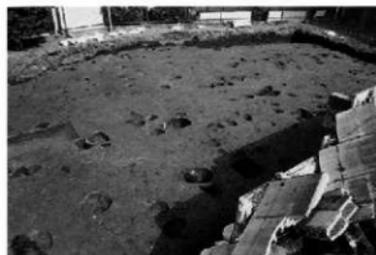
1は土師器碗である。底部はへら切り調整され、体部には指頭圧痕が残り、色調は褐色を呈する。

c. その他出土遺物 (Fig. 4)

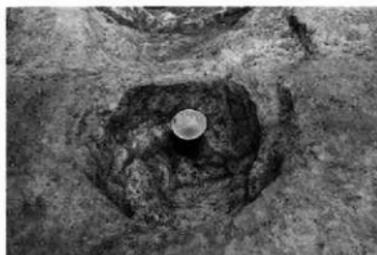
2はSK-018より出土した須恵器碗である。3はSK-007より出土した弥生土器壺口縁部片である。



Fig. 4 遺物実測図 (1/3・1/4)



Ph. 6 掘立柱建物検出状況 (西から)



Ph. 7 遺物出土状況 (南西から)

5. まとめ

第13次調査では、古墳時代の土坑1基、古代の掘立柱建物2棟・土坑1基などの遺構を検出・調査した。調査区は古代の官道とは180m程度の距離があるが、丘陵東側斜面上に位置するため、東側で南北方向に延びる官道が一望できる位置にある。このような地形的要因により、官道を強く意識した建物が設営されたものと考えられる。

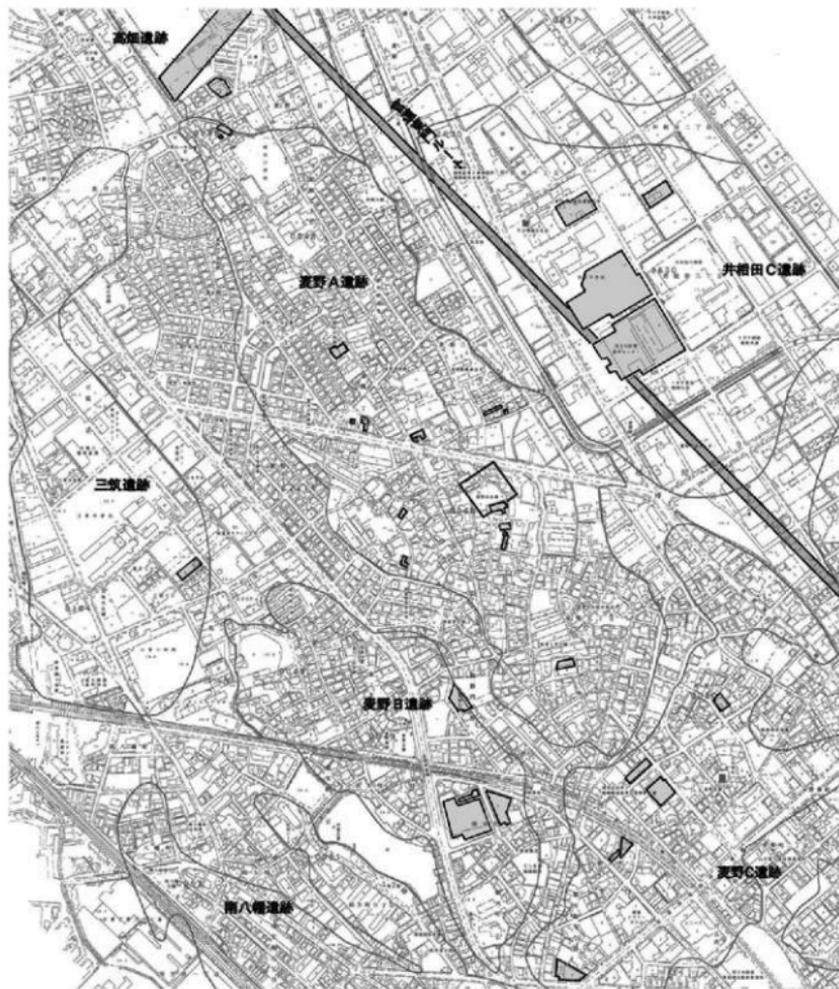


Fig. 5 調査区位置図 (1/8000)

VI 麦野C遺跡群 第4次調査

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成8年(1996年)5月22日、松田昇三氏より福岡市博多区銀天町2丁目3-6におけるビル建設工事に先立って、埋蔵文化財事前審査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された(8-2-79)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野C遺跡群に含まれ、道路を挟んで北側に位置する第2次調査地点では、竪穴住居址が確認されていることなどから、試掘調査をおこなった。その結果、申請地内の現地表土直下のローム層上面にて竪穴住居、柱穴などの遺構が残存していることを確認した。この結果をもとに協議をおこない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課があたり、平成8年8月5日に着手、同月13日に終了した。

2. 調査組織

調査は以下の組織でおこなった。

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田 英俊
調査総括	福岡市教育委員会	埋蔵文化財課 課長	荒巻 輝勝
		第2係長	山口 謙治
調査席務	福岡市教育委員会	埋蔵文化財課 第1係	西田 結香
調査担当	福岡市教育委員会	埋蔵文化財課 第2係	松村 道博 池田 祐司(試掘調査) 加藤 隆也(本調査)
調査作業	池田 省三 古林 茂夫 羽岡 正春 平井 武夫 山口 熊孟 山田 孝允 有田 恵子 泉本タミ子 田中トミ子 播磨千恵子 藤野トシ子 北条こず江 天野 玄普 石塚 正芳 内村 洋一 加集 寛隆 黒岩 敬太 土器 屋剛 柳谷 美佳 日林 強		
整理作業	入江のり子 尾崎 君枝 加集 和子 山本 良子		

II. 調査の記録

1. 調査の概要

今回の調査は、平成8年8月5日から同月13日にかけて実施した。調査地は二辺を道路に面する三角形をなし、面積は308㎡である(Fig. 2)。発掘調査は、表土剥ぎ作業から始めたが、調査地内東側において遺構は検出されなかった。調査区の東側は、地山ローム層の土質や色調から判断して、本来は西側に比べ標高が高くなっていてと考えられ、集落遺跡が広がっていた当時の地形は、大きく改変されていることが分かった。また、遺構の残存する調査地西側においても、竪穴住居の床面直上まで削られており、一定の削平がおこなわれたことがうかがえた。このような状況から、遺構がみられる調査地西側を中心に発掘調査をおこない、東側部は調査のための廃土置き場とした。遺構の実測は、調査地南側道路に平行して任意でグリッドラインを設定し、それを基準としておこなった。

調査の結果、遺構は現地表面下20~30cmの黄褐色を呈するローム層の上にて、奈良時代の竪穴住居址3基、柱穴7穴を検出した。遺物は主に竪穴住居址から土師器の皿、高杯、甕、甌、須恵器の坏、蓋、壺、鉄製の刀子などコンテナ7箱分が出土した。

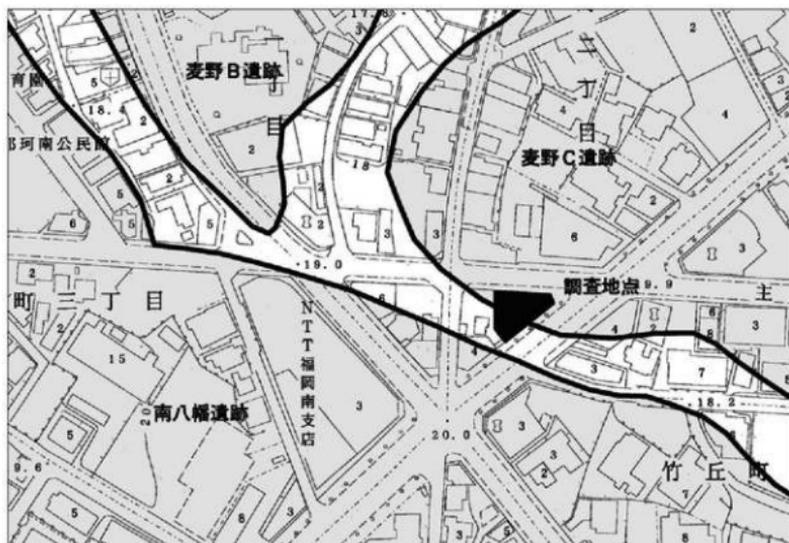


Fig. 1 調査地点位置図

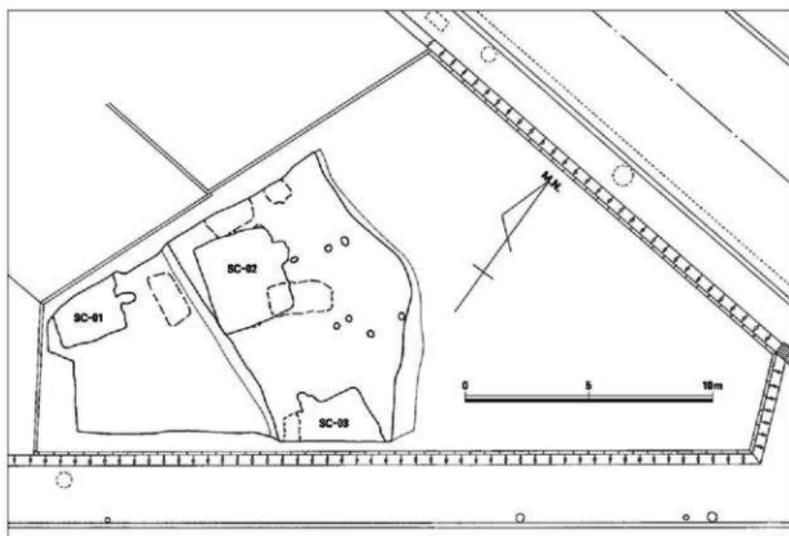


Fig. 2 遺構配置図 (1/200)

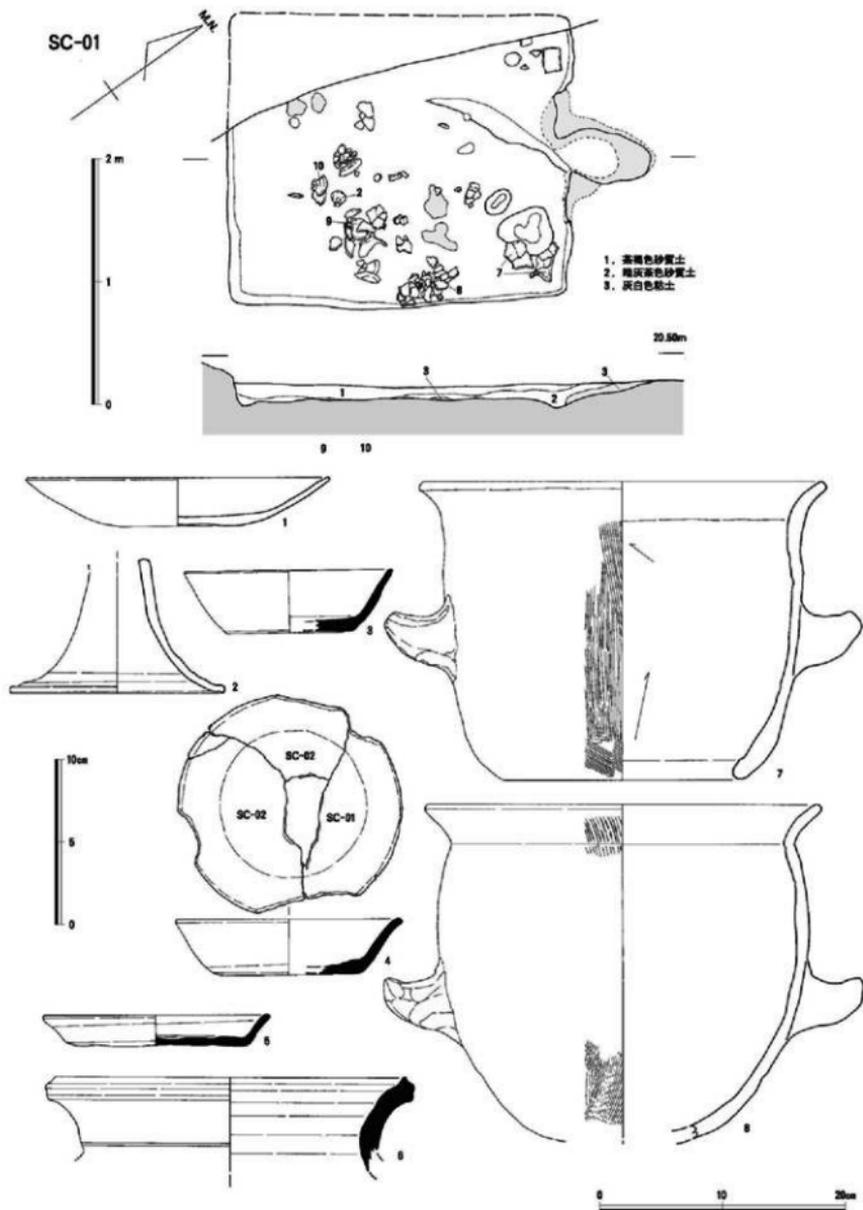


Fig. 3 SC-01実測図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

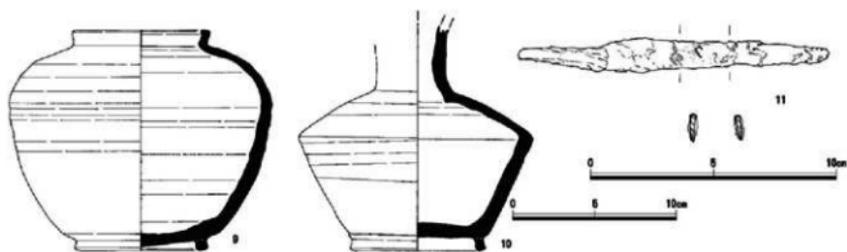
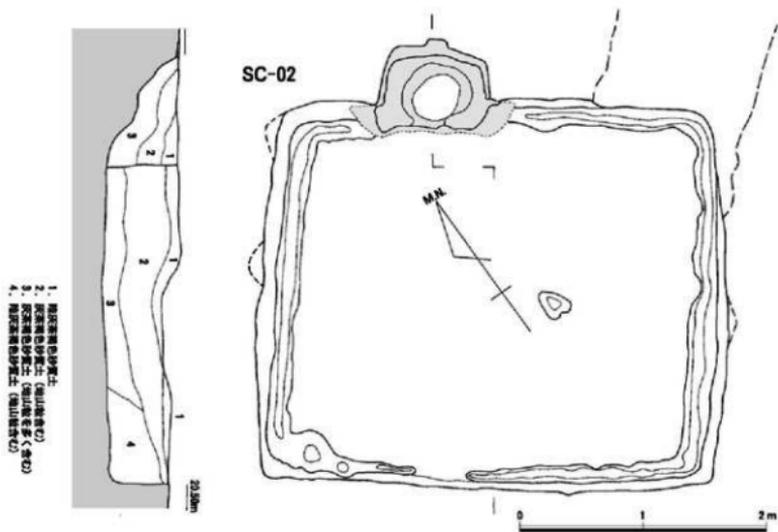


Fig. 4 SC-01出土遺物実測図2 (1/3、1/2)



1. 褐色系黄砂質土 (M11) (M11)
2. 灰褐色系黄砂土 (M11) (M11)
3. 灰褐色系黄砂土 (M11) (M11)
4. 褐色系黄砂質土 (M11) (M11)

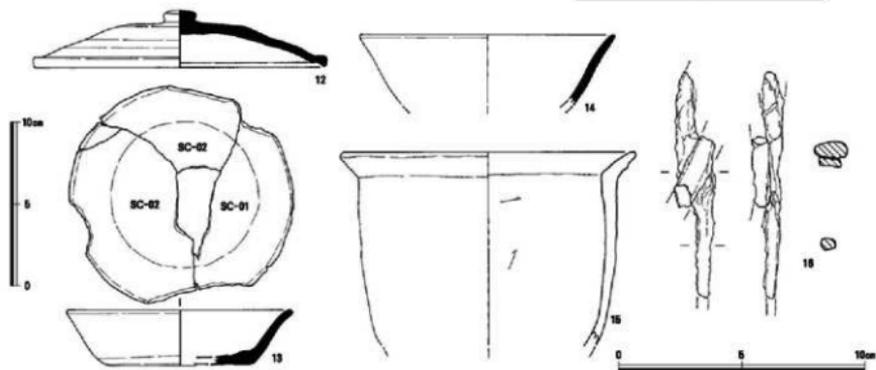


Fig. 5 SC-02実測図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/3、1/2)

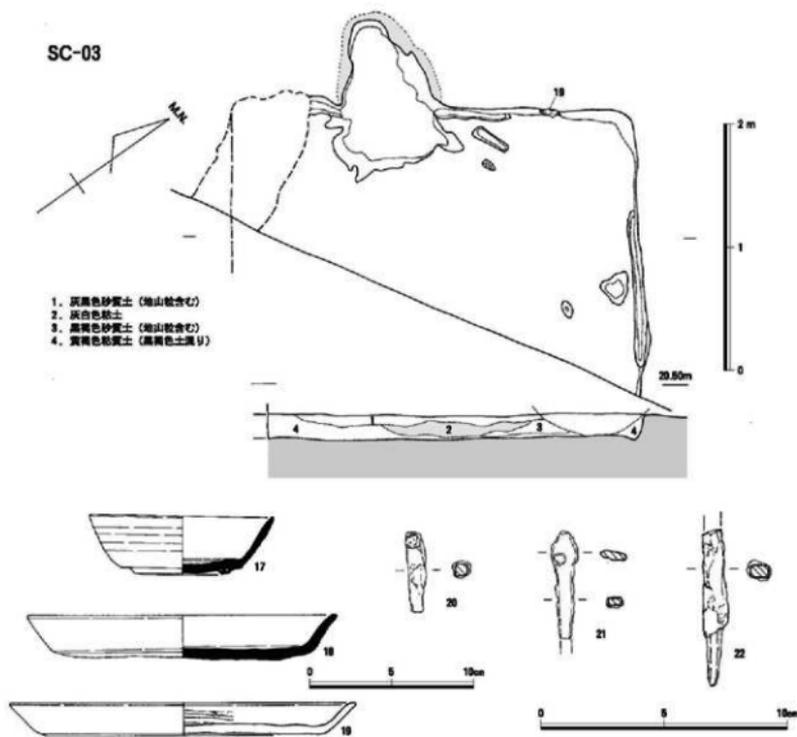


Fig. 6 SC-03実測図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/3、1/2)

2. 遺構と遺物

SC-01 (Fig. 3, Ph. 2)

調査区の西側調査区端にて検出した竪穴住居址である。遺構の一部は調査区外へ広がり、南隅を攪乱によって切られる。検出された住居址の一边は2.75mを測り、残存する深さは約20cmであった。床には、地山ロームブロックを含む暗茶褐色粘質土により、10~20cmの張り床がされており、床面には土師器・須恵器の遺物のほかに、灰白色の粘土塊がみられた。張り出し型のカマダが住居址北東方向につくられている。上屋構造に伴う柱穴等は、床面上では確認できなかった。出土遺物 (Fig. 3・4) 1は土師器の坏である。口径18.2cm、器高2.9cmである。平底で、弧を描いて緩やかに立ち上がる。2は土師器高坏の脚部である。底径は12.7cmである。3は床面上で出土した須恵器の坏である。口径12.6、底径7.4、器高3.8cmである。4は平底の須恵器坏である。口径13.5、底径9.1、器高3.4cmであり、床面上で検出された。出土遺物の整理段階でSC-02の覆土から出土した破片と接合した。5は須恵器の皿である。口径13.4、底径11.0、器高1.9cmである。6は須恵器壺の頸部の破片である。復元口径は21.2cmである。7は甗である。口径32.2、底径19.0、器高24.3cmであり、把手が付く。約1/3の残存であり、底部の張り出し等の状況については不明である。8は残存約1/4の甗である。復元口径

31.5cmであり、外面にはハケ、内面には荒いケズリ痕が残る。9は須恵器の壺である。口径10.4、底径9.4、器高17.9cmであり、断面四角形の高台は外側に傾斜する。10は須恵器の長頸壺である。高台径は10.0cmである。11は床面上で出土した鉄製刀子である。残存長は12.5cmである。

SC-02 (Fig. 5, Ph. 3)

調査区西側にて検出した竪穴住居址である。長軸3.8、短軸3.15mであり、東隅を攪乱によって切られる。張り出し型のカマドが住居址北東壁のやや西寄りにつくられ、カマドとその反対側壁以外の壁際には、幅5~20cmの周壁溝がみられる。深さは約65cm残存しており、今回検出された3基の住居址のなかでは最も残存状況が良好であった。上屋構造に伴う柱穴等は、床面上では確認できなかった。出土遺物 (Fig. 5) 12はボタン状のつまみが付く土師器の坏蓋である。口径17.6、器高3.4cmである。13は住居内覆土から出土した須恵器の平底環である。SC-01の床面上から出土した破片と接合した。14はカマド内の白色粘土中から出土した須恵器の坏である。口径は15.4cmである。15はカマド内から出土した甕の破片である。復元口径は17.5cmである。16は鉄製品である。2個体のものが錯着している。釘であろうか。長い方の長さは9.2cm、短いものは3.1cmである。

SC-03 (Fig. 6, Ph. 4)

調査区西側にて検出した竪穴住居址である。住居址の隅を攪乱により切られ、大半の遺構は調査区外の道路側に広がる。住居址の一边は約3.2mを測り、残存する深さは約20cmであった。壁際の一部に周壁溝がみられる。張り出し型のカマドが住居址北西方向につくられている。上屋構造に伴う柱穴等は、床面上では確認できなかった。出土遺物 (Fig. 6) 17は床面上にて出土した須恵器の高台付の坏である。口径15.0、底径8.6、器高4.8cmである。18は須恵器の皿である。口径18.8、底径15.8、器高2.6cmである。19は土師器皿である。カマドが付く側の壁に立てかけた状態で出土した。口径20.1、底径17.2、器高1.9cmである。20、21、22は鉄製品である。各残存長は20が3.2cm、21が4.2cm、22は6.1cmである。釘であろうか。

3. まとめ

今回の調査面積は265㎡と決して広いものではないが、8世紀代の3基の竪穴住居址と柱穴を検出した。また、調査地の北東側では遺構面が大きく削られていることから、以前この地は丘陵斜面であったと考えられ、第2次調査の遺構分布状況などを含めて考えれば、かなり起伏のはげしい複雑な地形をしていたと考えられる。

今回の調査成果で特に注意しておきたいことは、SC-01床面直上から出土した須恵器坏破片とSC-02覆土から出土した須恵器坏の破片が接合したことである。同様の事例は、同年隣接する麦野B遺跡第3次調査で検出された8世紀後半の竪穴住居址SC-02と、SC-03から出土した須恵器高台付坏の破片が接合した例が報告されている(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第568集)。この2例に共通することは、8世紀代に、二棟の竪穴住居が方向を描いてつくられ、張り出し型カマドを同じ方向の壁に付設するという点である。竪穴住居廃棄の同時性からも、この二棟の住居は同一家族のものであろうと考えられるが、一つの土器(須恵器坏)を割り欠き各住居に投棄したのであるならば、住居廃棄時の祭祀に伴う可能性が考えられる。しかし、須恵器の坏という共通性はあるものの、事例は少なく、深く掘削された住居址が徐々に自然埋没していく過程で、偶発的に一つの土器が割れ、近接する凹みに混ざり込む可能性も否定できない。今後、同時期遺跡の調査に注意したい。



Ph. 1 調査区全景 (北東から)



Ph. 2 SC-01調査状況 (南東から)



Ph. 3 SC-02調査状況 (南東から)



Ph. 4 SC-03調査状況 (東から)

Ⅶ 麦野C遺跡第7・8・9次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成14年12月18日、日高正温氏・中谷渉氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区麦野6丁目18番16(162.33㎡)、18番1(162.32㎡)地内における個人専用住宅建設予定地内に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された(事前審査番号14-2-0677・14-2-0676)。申請地は周知の遺跡である麦野C遺跡の北側部分に位置しており、これを受けて埋蔵文化財課では平成15年1月7日に現地での試掘調査を行った。試掘調査の結果、現地表面から35cm程度掘り下げた鳥栖ローム層上面において古代から中世にかけての溝、柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。

この後の平成15年3月10日に、黒田哲夫氏より前2申請地に挟まれる福岡市博多区麦野6丁目18番5(162.33㎡)地内の共同住宅建設予定地内についての埋蔵文化財事前審査願が提出された(事前審査番号14-2-0861)。これを受けて埋蔵文化財課では平成15年3月20日に現地での再度の試掘調査を行った。申請地の現状は西側道路との比高差2m程度、北側道路とは1.5m程高く残る宅地であり、現地表面の標高18.30m前後を測る。試掘調査の結果、前回の試掘調査の成果と同様に、現地表面から35cmほど掘り下げた鳥栖ローム層上面において古代の竪穴住居、土坑等の遺構を再度確認した。

これらの遺構は住宅建築に伴う工事による破壊を免れないため、3件の申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、調査費用については個人専用住宅・短期間の小規模な調査であり、国庫補助金を充てることとした。

発掘調査は3申請地について順次行うこととし、次数は申請順ではなく南側より第7次・第8次・第9次調査とした。調査作業は申請地に合わせての3分割が不可能であったため、南北で2分割し南側の第7次・第8次調査の一部から着手した。調査期間は、第7次調査については平成15年4月14日から平成15年4月23日まで、第8次調査は平成15年4月24日から平成15年5月7日まで、第9次調査は平成15年5月8日から平成15年5月20日まで行った。調査面積については第7次調査が121.38㎡、第8次調査が121.38㎡、第9次調査が40.98㎡となる。

2. 調査体制(調査時)

調査委託	日高 正温(第7次)			
	黒田 哲夫(第8次)			
	中谷 渉(第9次)			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		生田 征生(調査時)
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長		山崎 純男(調査時)
	同	埋蔵文化財課 第2係長		田中 壽夫(調査時)
	同	埋蔵文化財課 事前審査係長		池崎 諒二(調査時)
調査庶務	同	文化財整備課		御手洗 清(調査時)
調査担当	同	埋蔵文化財課 事前審査係		田上勇一郎(調査時)
		第2係		木田浩二郎

3. 調査の概要

麦野C遺跡は南北方向800m、東西方向400mの分布範囲を持ち、現在まで行われた第1次から第6次までの調査はその南側半分に集中して行われている。遺跡範囲内では周辺の遺跡と同様に、戦前の土地区画整理によって道路部分を中心に大幅に削平されており、検出される遺構は島状に高く残存する宅地部分でのみ検出される状況である。麦野C遺跡で行われた、これまでの調査では旧石器時代の遺物、弥生時代から古代の集落、中世の遺構群などが検出されている。

調査は重機により表土を除去した後、南側より着手した。遺構面は烏栖ローム土層面上で設定し、標高は18m前後を測る。遺構面はほぼ平坦となり、過去の宅地造成時に削平されたことが分かる。

調査区内で検出した遺構は、古代の竪穴住居2軒・独立柱建物・落し穴状遺構・建物としてはまとめきれない柱穴群・溝状遺構などである。検出された竪穴住居（SC-057・SC-090）は平面形が方形であり、一辺2.8m前後を測る。北側で検出されたSC-090の北側隅部にはカマド・煙道部が検出される。白色粘土で形成されるカマド本体は住居廃絶時に破壊されていたが、カマド背面から住居外へと延びる煙道が良好に遺存していた（Ph. 15）。壁溝は住居西側隅部でのみ検出されるが、壁には沿っておらず別用途が考えられた。住居床面では柱穴は検出されず、住居外に柱穴が並んで検出された。

SC-057とした方形竪穴住居は15cm程度しか残存しておらず、北側で壁の立ち上がりがわずかに残る。住居東側壁南側に白色粘土・焼土が検出され、カマドの痕跡と考えられた。

SB-102とした独立柱建物は、調査区北側端部で1間×1間分が検出された。柱穴は直径50cm前後の円形であり、底面には柱柱痕が残る。調査区外の北側に延びる可能性が考えられるが道路部分は削平のため既に消滅している。

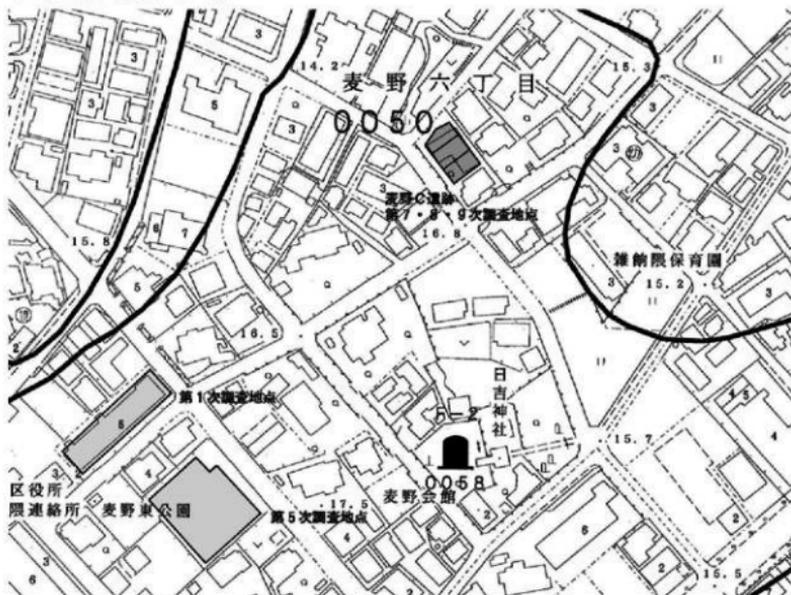


Fig. 1 調査区位置図 (1/4000)

調査区北側の第8次調査部分で検出された落し穴状遺構（SK-110）は、上面では崩壊のため楕円形の平面形を呈するが、底面では長方形となる。底面には規則的に配置された杭の痕跡が検出された。埋土からの遺物の出土はなく、時期は確定しがたいが、これまでの調査においても同様の遺構の報告がなされており、弥生時代以前の時期である可能性が考えられる。

柱穴群は調査区西側と東側の二カ所に集中して検出され、列状に並ぶものも確認できる。直径20～30cm前後のものが多く、検出面から底面までの深さは20～120cm前後を測る。これらの柱穴の底面には柱圧痕が見られるものもあるが、調査区内では建物としては復元できないため、櫓列の可能性も考えられた。これらの柱穴遺構の埋土は、しまりのない黒褐色土であり、埋土中からは弥生時代前期の時期と考えられる黒曜石剥片や古代の土師器片などが出土するが、いずれも後生に混入した遺物と考えられる。

遺物は第7～9次調査で概観すると、甕などの土師器・環や壺などの須恵器・貿易陶磁器・旧石器時代から弥生時代前期の黒曜石製の石器・剥片などがコンテナケース3箱分が出土した。

調査区付近は戦前の地形図（Fig. 10）より、南北方向に延びる低丘陵の西側斜面上に位置していたことが分かる。南側の丘陵頂部に近い7次調査地点では、削平が著しく遺構の残存もわずかであったが、9次調査地点は裾部近くに位置するため、7次・8次地点よりも遺構の残存は良好であった。

調査地点周辺・周辺遺跡のこれまでの調査成果より、古代には大規模な集落が付近一帯に展開していたことが知られており、調査地点付近もこの集落の一端であったことが判明した。また、戦前の地形図からは7～9次調査地点一帯は、丘陵上に拓かれた一辺約50m前後の方形区画内に位置していることがわかる。周辺の調査成果より中世の段階で行われた地形改変の痕跡と推測されるが、本調査では柱穴以外で中世の時期と判断できる遺構の検出はなかった。



Ph. 1 調査区全景・南半部（南西から）



Ph. 2 調査区全景・北半部（南西から）



Ph. 3 調査区全景・南半部（北西から）



Ph. 4 調査区全景・南半部（北から）

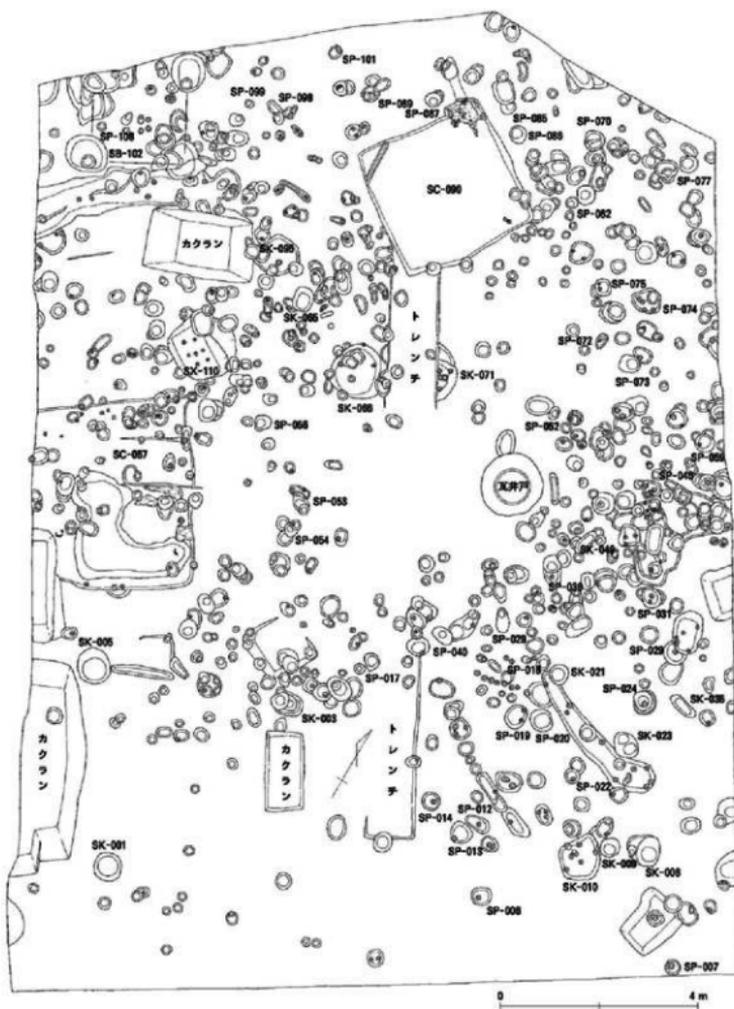


Fig. 2 遠構実測図 (1/100)

4. 遺構と遺物

第7～9次調査では、前述のように方形竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、落とし穴状遺構1基、建物としてはまとめられない柱穴群・楕列、溝状遺構等を検出した。以下に遺構と遺物の説明を行う。

a. 竪穴住居

SC-057 (Fig. 3)

調査区中央部（8次調査区）西側で検出した方形竪穴住居で、住居西側は調査区外へと延びるため、住居全体を完掘していない。南北方向で一辺4.0m前後を測り、東西方向では3.2m分の検出した。検出面から住居床面までの深さは8～20cm前後を測る。上層にはしまりのない黒色土が堆積し、床面直上にはローム粒を多く含む黒褐色土が堆積する。住居床面には一部ローム土を用いて貼床を行う。貼床は住居南側半分で行われており、厚さ5cm前後で行われている。

住居北東側壁の東寄りの部分で白色粘土の塊が検出される。周囲には焼土・炭化物が散乱した状況で検出され、この部位にカマドが設置されたものと考えられる。カマドは張り出しを持たない形態で、住居壁に直接作り付けられたものと考えられる。カマド下には基底部の掘り込みも確認できなかったが、中央部付近には被熱して赤変色・硬化する範囲（直径10cm程度）が確認できた。カマド壁体は白色粘土を使用して成形されたものと考えられるが、廃絶時に破壊されたものと考えられ、左側袖部の一部のみが検出された。カマド内の被熱した部位上には須恵器蓋が正位の状態出土した。廃絶時の祭祀土器と考えられる。カマドの煙道は削平のため完全に消滅しており、住居外まで延びる形態か、斜めに立ち上がる形態かのどちらかは確認できなかった。

住居床面上からは主柱穴は検出されない。周辺の調査区で検出された同時期の住居と同様に住居外



Ph. 5 調査区全景・北半部（南東から）



Ph. 6 調査区全景・北半部（南から）



Ph. 7 掘立柱建物検出状況（南から）



Ph. 8 SC-057検出状況（南から）

に掘削されるものと考えられるが、削平のため柱穴は完全に失われている。住居埋土からは須恵器・土師器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig. 6に示した。

5は土師器甕である。住居西側土層中から出土した。口径11.4cm、器高6.8cmを測る。底部付近はヘラ削りされ、体部は横ナデ調整される。内器面上位は横位の刷毛目調整が施され、内底付近はヘラ削りされる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。6は須恵器壺である。口径15.4cm、器高4.0cmを測る。天井部はヘラ削り調整され、体部はナデ調整で成形される。色調は暗灰色を呈する。

7は土師器甕口縁部片である。復元口径20.8cmを測り、器面調整はナデ調整以外は失われているため観察できない。色調は橙色を呈する。8は土師器甕口縁部である。口径17.4cmを測る。外器面には横位の刷毛目調整が残り、内器面には横ナデ調整・ヘラ削りが施される。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。これらの出土遺物より住居の年代は7世紀後半代の時期が考えられる。

SC-090 (Fig. 5)

調査区北側で検出された竪穴住居で、平面形は方形を呈する。一辺2.6m前後を測り、検出面から住居床面までの深さは45cm前後を測る。住居北側隅部には、方形の張り出しを設け白色粘土を用いてカマドを作り付ける。カマドは廃絶時に完全に破壊されており、袖部も残存していなかった。白色粘土と焼土・炭化物・灰・土師器甕破片が入り交じった状態で堆積していた。カマド背面には煙道が残存する。住居外に延びる形態をとり、50cmほど煙道を掘削し立ち上がる。煙道は直径20cm前後の断面楕円形を呈し、しまりのない黒褐色土が充填されていた。煙道入口は張り出し部壁で床面から15cm程度の高さの場所に位置する。廃絶時の祭祀土器などは出土しなかった。

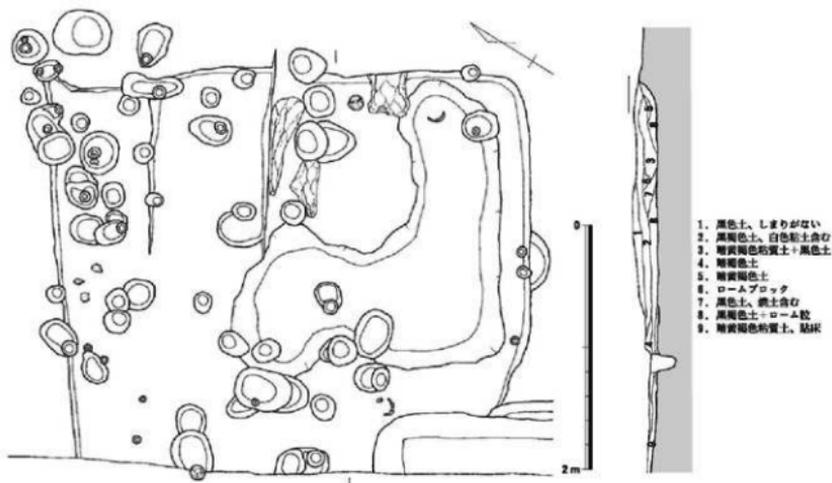


Fig. 3 SC-057遺構実測図 (1/40)

住居西側隅部で壁溝が検出されるが、壁沿いではなく住居主軸からずれた南北方向で掘削されており、用途としては住居内区画溝が考えられる。住居床面上では柱穴は検出されなかったが、住居外円周部で多角形状に配置される柱穴が検出された。煙道部付近では煙道を跨ぐように柱穴が配置されており、煙出し部は上部構造外に位置するものと考えられる。検出された柱穴は直径30cm前後の楕円形のものが多く、検出面から底面までの深さは30~50cm前後を測る。これまで麦野C遺跡内で検出された古代の竪穴住居で、住居に伴う柱穴が検出された例はわずかであり、当時の住居上部構造を考える上で貴重な知見を得ることができた。なお、住居床面では貼床は行われておらず、1次掘削で床面まで掘り下げ整えられたことが想定される。

住居土層断面からは廃絶後に徐々に周囲から埋没し、その後に黒褐色土などで埋没する過程が見られる。住居床面直上に堆積する層位からは、白色粘土・焼土・炭化物とともに土師器甕破片などの遺物が出土した。埋土上層中からは弥生土器・黒曜石剥片などの遺物も出土した。

出土遺物をFig. 6に示した。

1は土師器蓋である。復元口径16.0cmを測り、天井部はへら切りされ体部は横ナデ調整される。色調は褐色を呈する。2は土師器壇高台部である。底部はへら切りされ、断面が台形の高台が貼り付けられる。色調は暗褐色を呈する。3は弥生土器甕胴部片である。遺存状態が悪く器面調整は観察できない。4は弥生土器甕底部片である。復元底径9.0cmを測る。外器面には刷毛目調整が施され、内器面には指ナデ調整が施される。色調は暗褐色を呈する。埋土上層より出土した遺物である。12~18は土師器甕口縁部片である。12は復元口径20.6cmを測り、やや厚い口縁部を持つ。13は復元口径19.2cm、14は復元口径20.0cmを測る。15は復元口径22.2cm、16は口径22.6cmを測る。16は外器面に横位の刷毛目調整、内器面に横位の刷毛目調整が施される。17は大きく開いた口縁部を持つ甕で、復元口径25.6cmを測る。外器面には刷毛目調整が観察でき、口縁部下には煤が付着する。19は土師器鉢である。外器面には刷毛目調整、内器面には刷毛目調整とへら削りが施される。色調は暗褐色を呈する。これらの出土遺物より、住居の年代は8世紀後半頃の時期が考えられる。

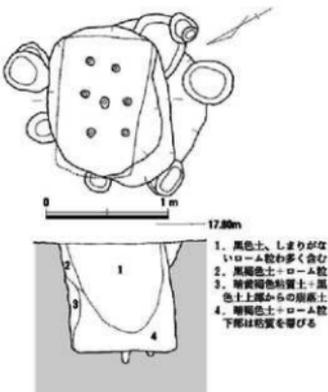
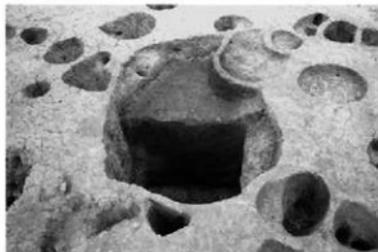


Fig. 4 SX-110遺構実測図 (1/40)



Ph. 9 SX-110土層断面 (南東から)



Ph. 10 SX-110完壁状況 (南東から)

b. 落し穴状遺構

SK-110 (Fig. 4)

調査区北東側で検出された遺構で、検出時には円形プランであったが、掘り下げ後に長方形を呈する壁面・底面を検出した。土坑底面では長軸1.2m×短軸0.9m前後を測る。検出面から土坑底面までの深さは0.9mを測り、土坑内には上部から崩壊したローム土や暗褐色土が堆積する。中央部上層にはしまりのない黒色土が70cm前後の厚さで堆積する。これまでの麦野C遺跡で検出・調査された落とし穴状遺構と同様に、土坑埋土からは遺物の出土はなかった。

今回の調査地点は低丘陵の西側斜面上にあたるが、区画整理による宅地造成前の地形図では北側に開く谷地形の東側斜面上でもある (Fig. 10参照)。この谷地形南端部の谷頭部にあたる位置で行われた第5次調査地点においても3基 (第643集参照) の落とし穴状遺構 (SX-010・SX-016・SX-164) が検出・調査されている。これらの落とし穴状遺構は谷頭付近の等高線 (標高18m前後) に沿う形で配置されており、谷頭方向への追い込み狐が想定される。今回検出されたSK-110も検出面は削平されているが標高17.6m前後の地点に掘削されており、同時に設置された一連の遺構群である可能性が考えられた。第5次調査検出の落とし穴状遺構からは、古代に属する遺物が出土しているが遺構自体の時期は弥生時代以前と想定されており、本調査検出の落とし穴状遺構も弥生時代以前の所産と考えられる。

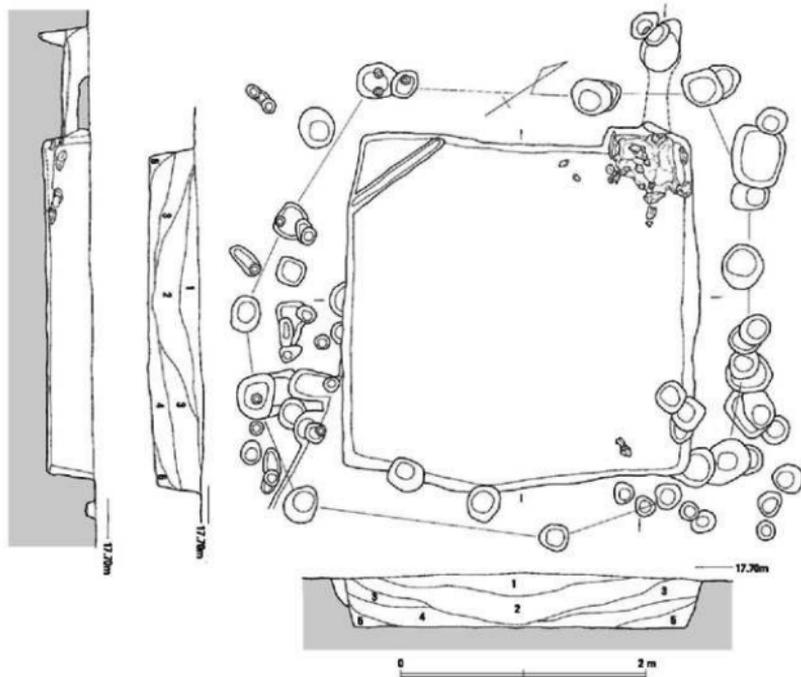
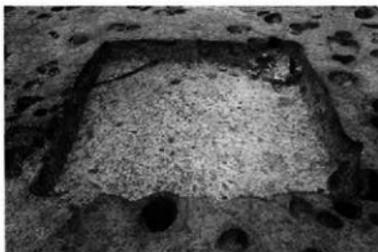


Fig. 5 SC-090遺構実測図 (1/40)



Ph. 11 SC-090調査状況（南東から）



Ph. 12 SC-090完掘状況（南東から）



Ph. 13 SC-090カマド検出状況（南東から）



Ph. 14 SC-090カマド検出状況（南東から）



Ph. 15 SC-090煙道検出状況（北西から）



Ph. 16 SC-090煙道断面（南西から）



Ph. 17 SC-090土層断面（南西から）



Ph. 18 SC-090土層断面（南西から）

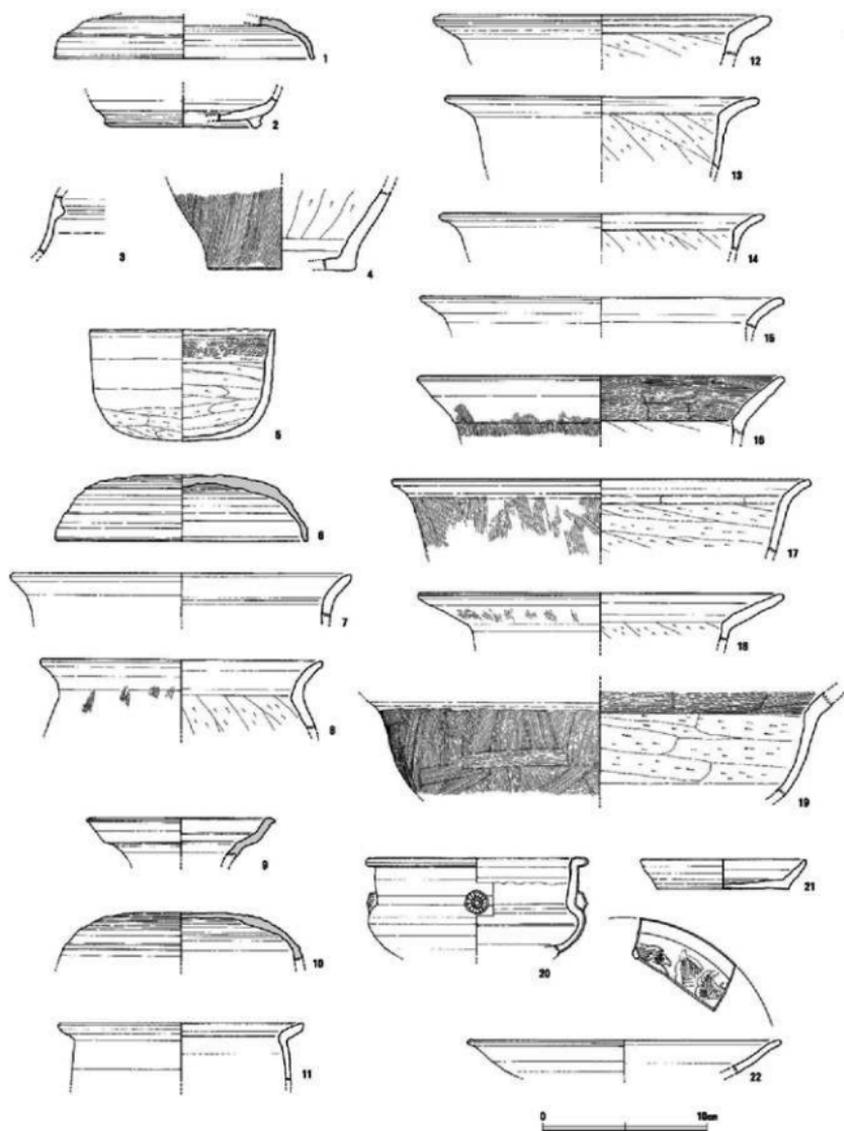


Fig. 6 遺物実測図 (1/3)

c. 掘立柱建物

SB-102 (Fig. 7)

調査区北西端部で検出した掘立柱建物で、調査区内では1間×1間分を確認した。北側は調査区外へと延びるため、全体の規模は不明確であるが、梁間2.0m前後、桁間1.8m前後を測る。柱穴は平面形が楕円形を呈し、長軸80cm×短軸70cm前後を測り、検出面から底面までの深さは70cm前後を測る。底面には直径25cm前後の柱尻痕が検出される。埋土はややしまりのある黒色土が上層に堆積し、下層には暗褐色土が堆積する。遺物は土師器等の細片が上層から出土したのみで、時期を特定できる遺物の出土はなかったが、弥生時代に属する可能性が考えられる。

d. 柱穴列・櫛列 (Fig. 2)

前述のように、調査区内では建物としてはまとめられない柱穴が多数検出された。これらの柱穴群の中には列状に検出されるものもあり、櫛列などの存在も考えられる。柱穴列・櫛列はN-45°E前後、またはこれに直交する主軸方向を採るものが多く見られる。これらの多くは中世の時期に属するものと考えられる。

e. その他の出土遺物 (Fig. 6)

調査では前述の遺構に伴う遺物の他に、旧石器時代の石器・弥生時代前期の石器や中世に属する遺物などが出土する。旧石器時代・弥生時代前期の石器類については後述するため、出土した土器類について報告を行う。

9は須恵器甕の口縁部である。復元口径11.6cmを測る。10は須恵器蓋である。天井部はヘラ切り調整され、色調は黒灰色を呈する。11は弥生土器甕口縁部片である。摩滅のため器面調整は失われている。20は遺構検出時に出土した伊万里焼の香炉である。21は試掘調査時に出土した土師器小皿である。22も遺構検出時に出土した伊万里焼浅皿である。

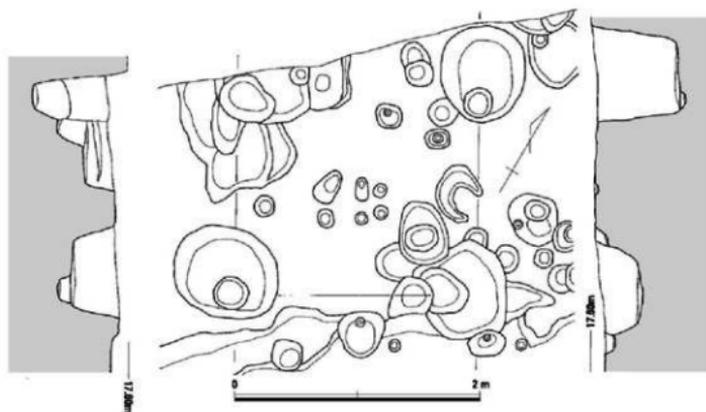


Fig. 7 掘立柱建物実測図 (1/40)

f. 旧石器時代の遺物 (Fig. 8)

本遺跡からは少量の旧石器時代遺物が出土した。明瞭な集中分布状態は示さない。

1は半透明黒色黒曜石を素材とする細石刃である。両端を折断した完成品である。長さ2.1cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmである。背面には二面の先行剥離と頭部調整痕が見られる。右側縁に微細剥離が認められる。2は弱透明黒色黒曜石を素材とする細石刃の先端破片である。長さ1.0cm、幅0.6cm、厚さ0.2cmである。背面には自然面と調整剥離と見られる複数の小剥離、一面の先行剥離が認められる。細石刃核左側縁部から剥離された細石刃であろう。3は半透明黒色黒曜石を素材とする小剥片である。長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmである。調整打面があり、背面には三面の先行剥離と剥離面調整がある。細石刃作業面の再生にともなう調整剥片か。4は弱透明黒色黒曜石を素材とする横長の小剥片である。長さ1.5cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmである。背面には上方からの大剥離と右方からの小剥離があり、何らかの調整剥片と見られる。5は半透明黒色黒曜石を素材とする不定形剥片である。長さ1.8cm、幅2.7cm、厚さ0.5cmである。背面には円礫自然面があり、上方からの先行剥離がある。初期の調整剥片である。6は弱透明黒色黒曜石を素材する不定形剥片である。打面部を折損し、長さ2.6cm、幅2.8cm、厚さ0.7cmである。背面に先行剥離があり、主剥離面には素材ホールが介入している。1、2は細石刃、3～5は細石刃核の調整剥片と考えられる。3、4など横長の調整剥離の存在から舟底形細石刃核が予測されよう。僅かではあるが、一括性のある資料であろう。

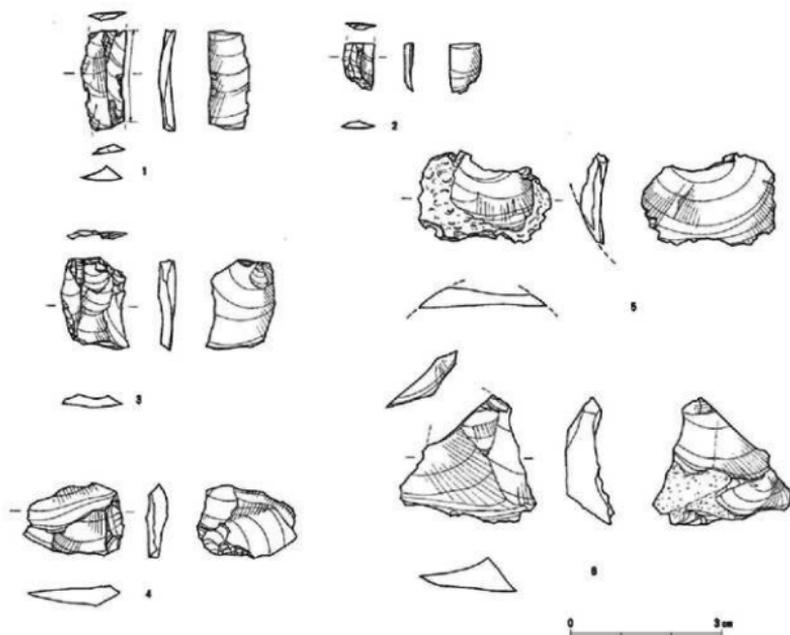


Fig. 8 遺物実測図

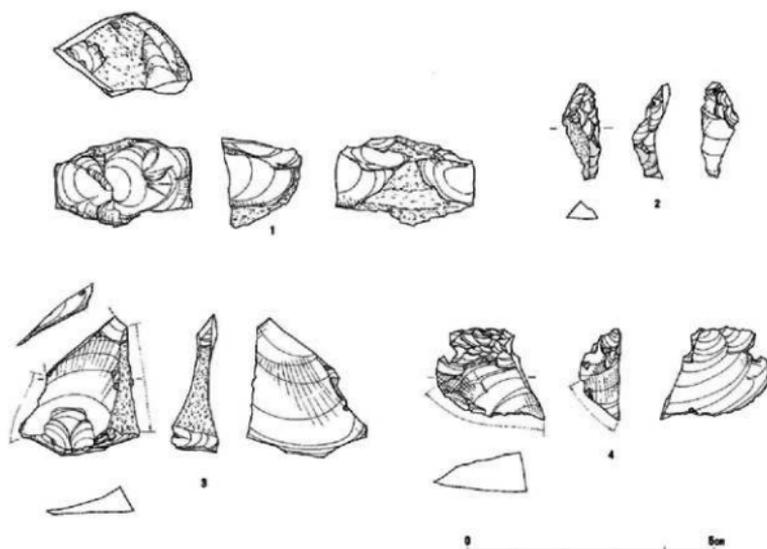


Fig. 9 遺物実測図 (S=1/1)

g. 弥生時代の石器 (Fig. 9)

本調査区では旧石器時代以外の少量の石核、剥片類が出土した。全て漆黒色の黒曜石を素材とし、表面の風化が弱く光沢がある。関連するとみられる弥生土器は3点あり、すべての石器・土器片は遊離・再堆積状態であり共伴は不明である。土器片はFig. 6-3、4が亀の甲式古段階で前期中葉、11が須玖Ⅱ式新段階～高三瀧式で中期末～後期初頭である。本地域の剥片石器は須玖Ⅱ式古段階に失われることから、出土石器類は亀の甲式古段階に伴う可能性が高い。

1はSC-057から出土した石核である。三面に平滑な自然面があり、本来一辺数cmの角礫状の原石が素材である。分割面と表面の剥離面は特徴的な熱剥離による放射剥離をなしている。現状で長さ2.8cm、幅1.6cm、厚さ1.8cmである。2はSP-101から出土した小剥片である。一部に自然面を残す。背面に自然面と熱剥離面(トーン部)がある。背面の稜線に沿った交互の調整剥離があり、その稜線に沿って剥離した削片状の剥片である。主剥離面基部側に僅かな二次調整があるものの、石器としての機能は不明である。現状で長さ2.0cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmである。3はSC-090埋土から出土した使用痕ある剥片である。縦長剥片であり、基部を欠損する。背面に自然面と先行剥離があり、それに180°対向して本剥片剥離を行っている。両側縁に微細剥離や摩擦が認められる。現状で長さ2.9cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmである。4はSC090から出土した使用痕ある剥片である。不定形の横長剥片であり、背面に上下からの剥離がある。打面は線状であり、背面には階段状剥離が著しい。剥離面は多くが圧迫剥離面で中央に截断状分割面ができる。下縁に微細剥離が見られる。現状で長さ1.8cm、幅2.2cm、厚さ0.8cmである。

5. まとめ

以上、簡単ではあるが第7～9次調査検出の遺構・遺物について概要を述べた。最後に本調査の簡単なまとめを行いたい。

本調査での遺構の初現は弥生時代に位置づけられる掘立柱建物である。これまで行われた麦野C遺跡内での発掘調査で、弥生時代に属する遺構が検出されたのは第5次調査で、本調査は二例目である。遺物としては各調査においても検出されるが、遺構は後生の掘削によって消滅しているものと考えられる。遺構が検出された調査区はいずれも丘陵斜面上付近に位置してことから削平を免れて残存していたものと考えられ、同様な立地の調査での弥生時代の遺構検出は増加するものと考えられる。

古代の時期には、大規模な集落の範囲内に含まれていることが住居の存在から伺える。この集落は麦野C遺跡・麦野A遺跡・雑餉隈遺跡などの遺跡群に広範囲に展開しており、いくつかのグループを形成するものと考えられるが、この集団の差違が何に起因するものかは現在判明していない。

中世の時期には、調査区付近は50～70m前後の方形区画内に位置していることが過去の地形図より分かる。南西側の第5次調査は別の方形区画内に位置するが、調査で検出された12世紀後半から13世紀代にかけての溝状遺構は、方形区画端部を巡るように掘削されていることが判明している。本調査で検出された柱穴列・柵列も方形区画の縁辺を巡るように検出されており、丘陵頂部を方形に造成して屋敷地などの施設を造営していたことが想定できる。

旧石器時代に属する剥片や細石刃等の出土は第1次調査地点に次ぐもので、該期から調査地点付近が狩猟場として使用されていたことが伺える。

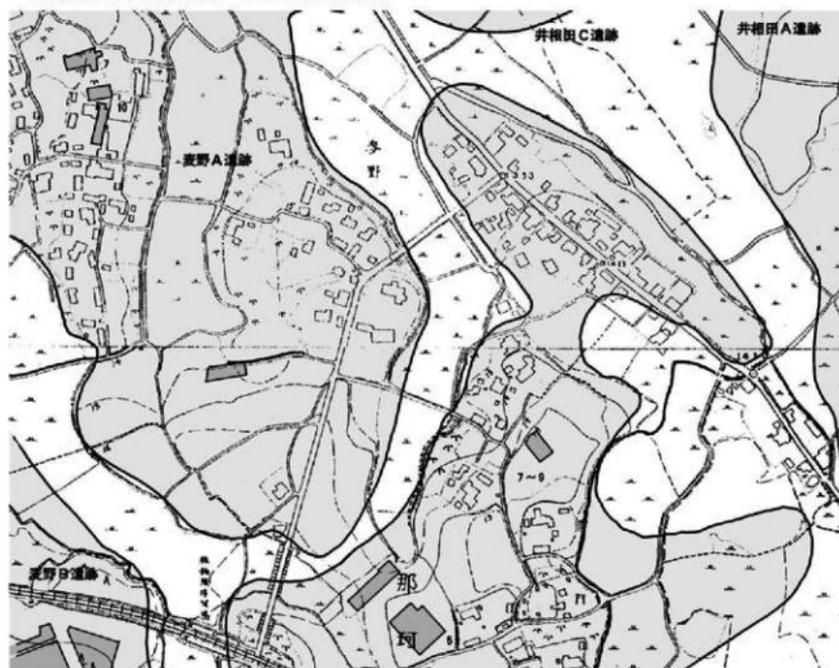


Fig. 10 調査区位置図

Ⅷ 雑餉隈遺跡第11次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成11年5月17日、伊藤光廣氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区昭南町1丁目36地内における個人専用住宅建設予定地内（敷地面積114.51㎡）に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された（事前審査番号11-2-0106）。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である雑餉隈遺跡の範囲内北西部に位置しており、これを受けて埋蔵文化財課では既存建物の解体作業・建築廃材の撤去が終了した平成11年5月19日に現地での試掘調査を行った。申請地の現状は宅地であり、現地表面の標高20m前後を測る。

申請地中央部付近で行った試掘調査の結果、現地表面から30cmほど掘り下げた烏栖ローム層上面において古代の方形竈穴住居、柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。

これらの遺構は、住宅建築に伴う基礎工事による破壊を免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される部分（60㎡）については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、調査費用は個人専用住宅であることから国庫補助金を充てることとし、原因者負担による表土掘削・場外への排土搬出などの条件整備が完了した平成11年5月24日に着手し、平成11年6月3日に終了した。

2. 調査体制（調査時）

調査委託	伊藤 光廣			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		西 憲一郎（調査時）
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長		山崎 純男（調査時）
	同	埋蔵文化財課 第2係長		力武 卓治（調査時）
	同	埋蔵文化財課 事前審査係長		田中 壽夫（調査時）
調査席務	同	文化財整備課		谷口真由美（調査時）
調査担当	同	埋蔵文化財課 事前審査係 第2係		加藤 隆也（調査時） 本田浩二郎

調査期間中には伊藤光廣氏をはじめ株式会社共和住宅の方々に、多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

3. 調査の概要

雑餉隈遺跡は福岡市南端部の春日市・大野城市との市境付近に位置している。遺跡周辺には麦野A・B・C遺跡、南八幡遺跡、中ノ原遺跡などが展開している。これらの遺跡群は近接する舌状台地上に点在するが、地形的な境界は失われており現地地形からは判別できない。調査区一帯は南西側に緩やかに下る緩斜面上に位置しており、現地表面の標高は20m前後を測る。

申請地の全体面積は114㎡であったが、表土掘削の結果、申請地北側から西側にかけては過去の開発により遺構面以下まで掘削されており、遺構などは消滅している状態であった。よって発掘調査は残存する60㎡の面積について行った。

検出された遺構は9世紀初頭から前半頃の竪穴住居3軒、中世の土壇墓1基、柱穴群などである。検出された竪穴住居（SC-003）は、平面形が方形で一辺が3.2m前後を測り、検出面から住居床面までの深さは30cm前後を測る。住居南西端に張り出し部を設け、白色粘土でカマドを形成する。カマドは住居廃絶時に基底部を残して破壊されていた。周辺で調査された同時期の住居と同じく、住居床面上からは柱穴は検出されないが、住居周辺で柱穴と考えられるピット群が住居を巡るように検出された。住居は切り合いを持ち、SC-003はSC-004を切るように掘削されている。調査区西側で検出されたSC-002は大部分が既に失われていたが、カマド張り出し部の一部が残存し西側壁面土層にて規模・深さが確認された。SC-003上に掘削された土壇墓は1.3m×0.9mの長方形を呈し、深さは検出面から30cm前後を測る。糸切り調整された土師器環などが出土し、中世中頃の時期と考えられる。

遺物は土師器・須恵器・貿易陶磁などがコンテナケース4箱分が出土した。周辺の調査成果から旧石器時代・弥生時代に属する遺構・遺物の検出も予想されたが、本調査地点からの出土はなかった。

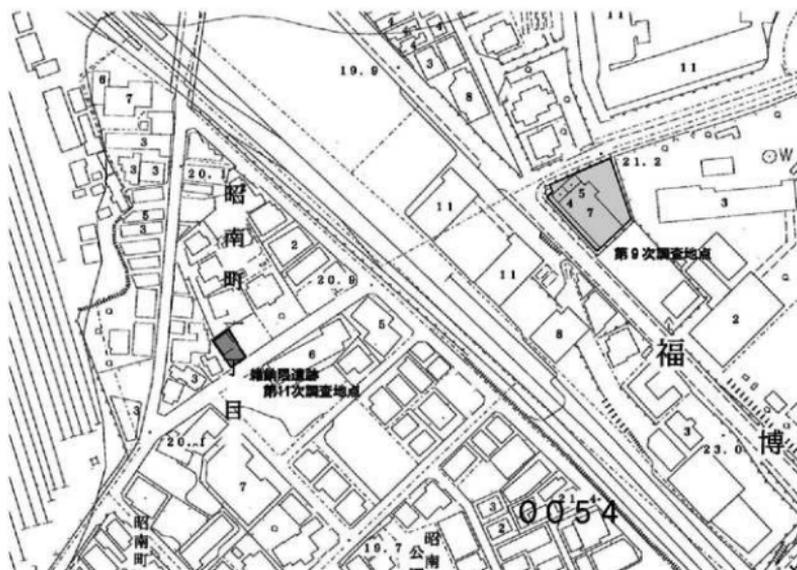


Fig. 1 調査区位置図 (1/2000)

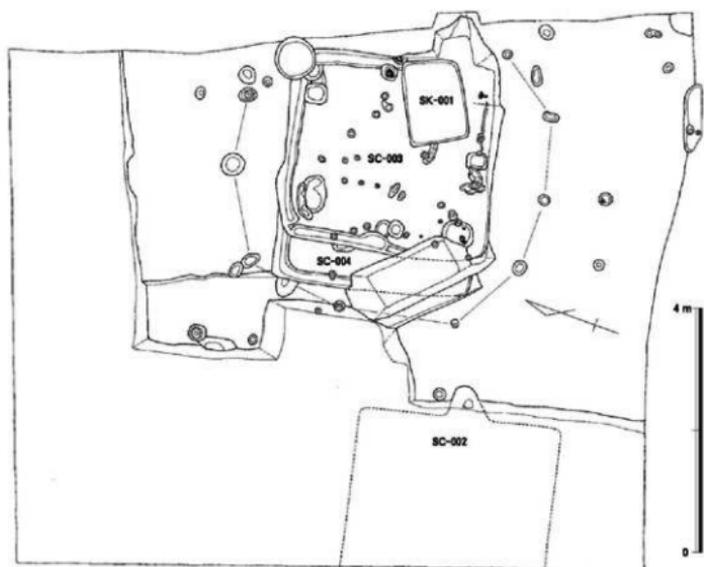
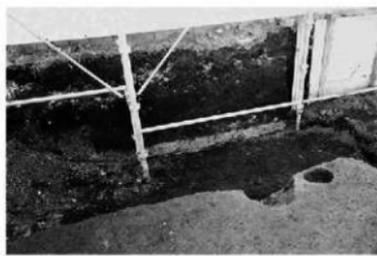


Fig. 2 遺構実測図 (1/80)



Ph. 1 調査区全景 (南西から)



Ph. 2 SC-002土層断面 (東から)



Ph. 3 SC-003・004完掘状況 (西から)



Ph. 4 SK-001検出状況 (東から)

4. 遺構と遺物

前述のように調査で検出された遺構は、竪穴住居3軒、中世の土壌墓1基（SK-001）、柱穴群などである。以下に検出された遺構と遺物について説明を行う。

a. 竪穴住居

SC-002 (Fig. 2)

調査区西側攪乱部で検出した方形竪穴住居である。東側に掘削されたカマド煙道部のみが残存し、調査区内に位置する住居本体は過去の開発により既に失われていた。調査区西側土層断面に住居南北壁が観察でき、これにより住居の規模・残存高が計測できた（Ph. 2）。土層断面より一辺3.2m程度の規模が復元され、残存する上場より住居床面までの深さは25cm前後である。埋土は上層にしまりのない黒褐色土が堆積し、中層には白色粘土を含む暗褐色土、下層には白色粘土・焼土を含む黒褐色土が堆積する。この住居からの出土遺物はなかったが、住居規模・配置・埋土よりSC-003とほぼ同時

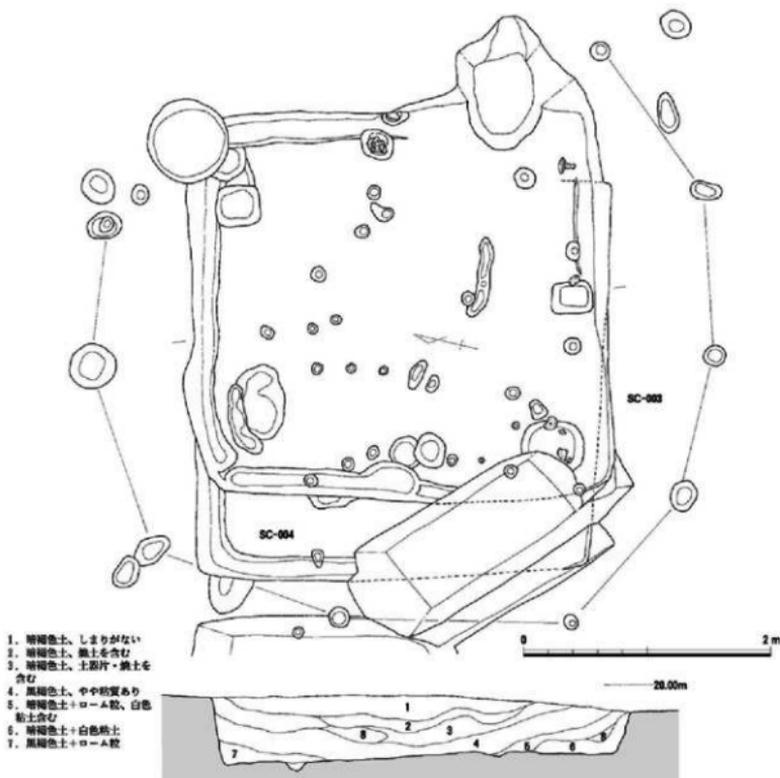


Fig. 3 SC-003・004実測図 (1/40)

期の住居と考えられる。

SC-003 (Fig. 3)

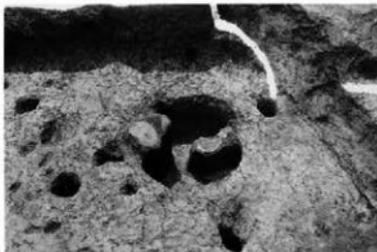
調査区中央部で検出された堅穴住居である。SC-004を切るように掘削される住居で、平面形は方形を呈する。東西方向で一辺3.2m、南北方向で一辺3.4m前後を測り、検出面から住居床面までの深さは40cm程度を測る。土層は上層にしまりのない暗褐色土が堆積する。この暗褐色土は住居北側部分にのみ検出され、住居がある程度埋没した段階で流入した埋土である。これ以下には焼土を含む黒褐色土（2層）、土器片・焼土を含む暗褐色土（3層）、やや粘質を帯びる黒褐色土（4層）と堆積する。3層と4層の間には白色粘土がブロック状に混入する。5～7層は住居埋没初期段階に堆積した層位で、白色粘土・須恵器・土師器などを含む。

住居内の南側を除く周囲には壁溝が掘削され、住居東側壁の南側部分に張り出し部を設け白色粘土を壁体としてカマドが構築される。カマドは住居廃絶時に袖部まで破壊され、焼土・炭化物と混ざった状態で検出された（Ph. 8）。カマド基底部分は住居床面より5cm程度楕円形に掘り下げられており、中央部付近は被熱ため赤変・硬化する。煙道部はカマド背面から住居外へ直接立ち上がる形態であるが、削平のため大半が失われた。

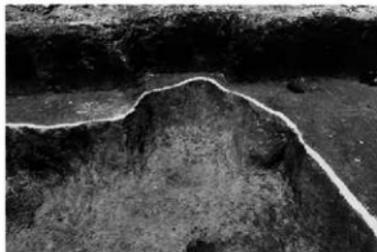
住居床面上からは支柱穴は検出されない。周辺の麦野遺跡群・南八幡遺跡などで調査された同時期の住居群からも、床面上から柱穴が検出された例はなく住居外に掘削されたものと考えられているが、これまでの調査での住居外柱穴の検出例もわずかである。本住居周囲には1.2～2.0m間隔で柱穴が多角形状に検出された。調査区内で検出された柱穴は9基で、配置と検出状況から住居に伴う柱穴と判断した。柱穴は直径20～40cm前後で、検出面から底面までの深さは10～50cm前後を測る。柱穴は住居



Ph. 5 SC-003土層断面（西から）



Ph. 6 SC-003遺物出土状況（西から）



Ph. 7 SC-003カマド検出状況（西から）



Ph. 8 SC-003カマド土層断面（北から）

壁から80cm程度の離れた位置に配置されており、カマド張り出し部の柱穴は煙道との位置関係から若干住居寄りに配置される。

住居床面上の南西側隅部と南側中央部、東側中央部からは土坑が検出される。土坑内には黒色粘質土が堆積し、埋土中から須恵器蓋・碗が出土した。住居内土坑の一種と考えられるが用途は特定できなかった。

遺物は埋土、床面直上から須恵器蓋・碗・甕・高坏や土師器杯・甕などが出土した。同時期・同規模の住居と比較して出土量はやや多く、総量はコンテナケース1箱分以上となる。

出土遺物をFig. 4に示した。

1・2は須恵器蓋である。1は口縁部が如意形を呈する蓋で、摘みまではば完存する。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。2は天井部を欠損する蓋で、体部はナデ調整される。色調は灰褐色を呈する。3～7は須恵器碗である。3は直線的に開く体部を持つ碗で、高台の断面形は台形を呈する。4・5・7は口縁端部でわずかに外反する器形で、体部は横ナデ調整される。高台は外底部内側に接合され、断面形は台形を呈する。色調は暗灰色を呈する。6は外底縁から連なる高台が接合され、口縁端部はわずかに内反する。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。

8～14は須恵器杯である。底部はいずれもヘラ切り調整される杯で、口径は14.6～17.4cmを測る。口縁端部でわずかに外反するものと直線的に開く器形に分けられる。焼成は良好で、色調は黒灰色～灰褐色を呈する。

15～19は土師器杯である。底部はいずれもヘラ切り調整される。口径は12.4～16.8cmを測り、焼成は良好で色調は褐色から橙色を呈する。SC-003上に検出された中世前半期の土坑であるSK-001からの混入品と考えられる。

20は須恵器高坏である。口径15.8cm、底径11.2cm、器高11.8cmを測る。脚部はナデ調整で成形され、坏部と接合される。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。

21は土師器瓶把手である。体部に直接貼り付けられるもので、把手基部に胴部の一部が残る。焼成は良好で色調は褐色を呈する。22～26・28は土師器甕である。22は復元口径22.2cmを測り、外器面はナデ調整、内器面には横位のヘラ磨きが施される。23は復元口径25.0cmを測り、外器面には縦位の刷毛目調整、内器面にはヘラ削りが施される。口縁部下には指頭圧痕が残り、煤が付着する。

24は復元口径30cmを測る中型の甕口縁部である。色調は褐色を呈する。25は復元口径28.2cmを測る。外器面には縦位の刷毛目調整が施され、口縁部内器面には横位の刷毛目調整が施される。28は復元口径40.4cmを測る大型の甕口縁部である。器面調整は横ナデ調整のみ観察できる。

26・27は須恵器蓋である。同一器体の可能性が考えられるが接合部がなく断定できない。焼成はいずれも良好で、色調は黒灰色を呈する。これらの出土遺物よりSC-003とした住居の年代は9世紀初頭と考えられる。

SC-004 (Fig. 3)

調査区中央部で検出された竈穴住居である。SC-003に東側の大部分を切られ、南西隅部を攪乱によって失う。住居西側80cm分が検出された。残存部分より一辺3.4mの規模が復元できる。住居床面はSC-003より20cmほど浅く検出され、検出面からは20cm程度の残存である。出土遺物はなく時期の特定はできないが、8世紀後半代の時期が考えられる。

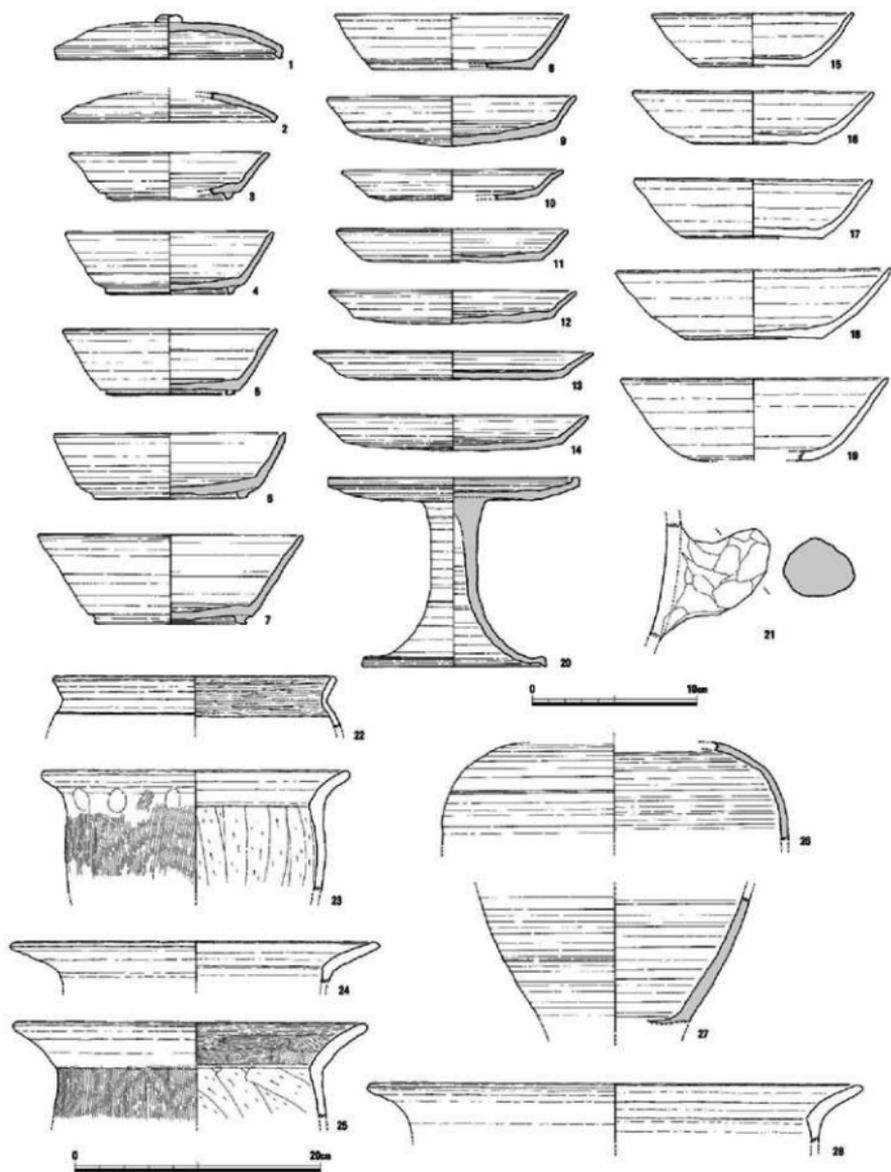


Fig. 4 出土遺物実測圖 (1/3・1/4)

b. 土坑

SC-003上面で検出した長方形土坑で、長軸1.5m×短軸0.9mを測る。検出面から土坑底面までの深さは20cm程度で、埋土より土師器環小片・須恵器碗などが出土した。前述のSC-003出土遺物の土師器環は土坑西側隅の位置から出土したが、埋土が住居上層の暗褐色土と識別できなかったため、混同してしまった。本来はSK-001に伴う遺物であろう。土師器環は両部からまともに出て出土し、平面形・遺物出土状況から土壌墓と考えられる。遺構の時期は11世紀前半代と考えられる。

c. その他の出土遺物 (Fig. 5)

29・30は須恵器壺である。29は宝珠型の摘みを持つ壺で、口径17.6cmを測る。31は須恵器環である。32は須恵器壺である。片部に突帯状に段を有する。33は須恵器碗である。試掘調査時に出土した碗でSC-003に伴う遺物である。34は土師器瓶把手である。35は土師器甕口縁部である。これらの遺物はSK-001掘り下げ時に出土したものでSC-003に伴う遺物であろう。

5. まとめ

雑餉隈遺跡周辺に位置する麦野遺跡群・南八幡遺跡では、これまでの調査で8世紀後半から9世紀初頭にかけての壑穴住居が約200軒以上検出されており、広範囲にわたる大規模な集落の存在が知られている。この広大な集落範囲の中で、住居は数軒程度を最小単位として群を形成しているものと考えられるが、各住居群間での壑穴住居の構造差・出土遺物の差違はこれまでの調査成果からは見いだせない。また、これらの住居群の中には調査成果から約半世紀間に5回以上の建て替えが想定される例もあるなど、住環境が限定・固着される状況が見られる。強制力を伴う何らかの目的・要因により、この集住が発生したものと考えられるが、現在の成果からは確たる要因は知り得ない。

雑餉隈遺跡では平成17年3月現在までに第17次までの発掘調査が行われている。なお、雑餉隈遺跡東側には近接して中ノ原遺跡が存在している。両遺跡の間には現在は埋没している谷地形が存在しており、それぞれ独立して存在する遺跡であることが近年の試掘調査から判明している。なお、雑餉隈遺跡第2次・第3次調査は現在では中ノ原遺跡範囲内に含まれており、それぞれ中ノ原遺跡第1次・第2次調査と調査次数を変更している。平成16年4月には中ノ原遺跡範囲確定後福岡市では初めての発掘調査が行われたが、第3次調査として登録されている。

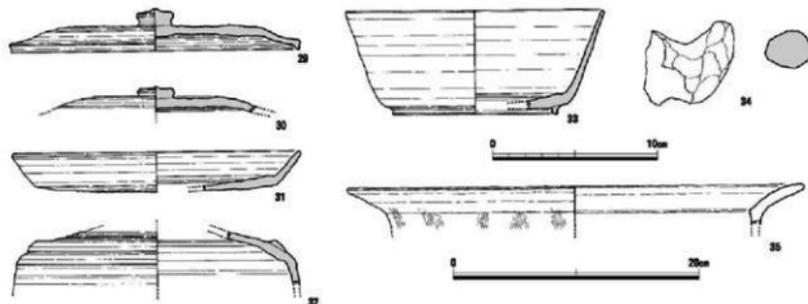


Fig. 5 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

IX 雑餉隈遺跡第13次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成14年、福岡市博多区新和町2丁目7番11において天野金光氏による鉄筋コンクリート造中層共同住宅の施工が計画され、8月26日付けで「埋蔵文化財事前審査申請書」が福岡市教育委員会にて提出された。申請地は「福岡市文化財分布地図」上では雑餉隈遺跡に含まれ、これまで周辺で実施した12次におよぶ発掘調査で、奈良時代時代の竪穴住居跡や掘立柱建物等からなる大規模集落、および先土器時代の遺物包含層が確認されていた。このため福岡市教育委員会埋蔵文化財課では申請地にも遺跡が存在する可能性が高いものと考え、試掘調査を平成14年9月17日に行い、東西方向に設けた1本のトレンチにより、現地表下35cmで黒色土の包含層を、45～55cmのローム層上でピット等の遺構を検出した。このため、遺構は少ないものの、出土遺物および周辺の調査例から古代の集落が広がっているものと推定した。試掘調査の結果をふまえ遺跡の保存について協議を行ったが、予定建築物の構造上、工事による地下の遺跡への破壊は避けたい状況にあり、敷地面積291.78㎡のうち破壊を受ける150㎡を対象として記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は実働日数10日以内の短期で終了すると見込まれたことから国庫補助金をあてることとし、平成14年9月26日から10月11日に実施した。また、整理報告書作成は平成16年度に行った。

2. 調査の組織

調査は以下の組織で行った。地権者である天野金光氏、及び施工業者である大東建託株式会社には調査事務所・トイレ・水・駐車場等の条件整備で多大なご協力を頂いた。厚く感謝申し上げたい。また、先土器時代調査並びに報告書作成に際し、埋蔵文化財課の吉留秀敏氏にご教示を頂いた。

調査委託	天野 金光
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 生田 征生(前)、植木とみ子(現)
調査総括	埋蔵文化財課長 山崎 純男(前)、山口 譲治(現) 埋蔵文化財課調査第2係長 田中 壽夫(前)、池崎 譲二(現)
調査職務	文化財整備課管理係 御手洗 清
調査担当	埋蔵文化財課事前審査係 田上勇一郎(試掘調査・事前協議担当) 埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学(本調査担当)
調査協力	嶋 ヒサ子、清水 明、長田 嘉造、西田 文子、野口 ミヨ、野田 淳一、 平川 正夫、宮崎タマ子、持丸 玲子、森田 祐子、山内 恵、山崎 光一 (五十音順、敬省略)
整理協力	田中 克子(技能員)、上塘貴代子、下山 慎子、萩尾 朱美 森 寿恵 (五十音順、敬省略)

3. 発掘調査地点の位置と周辺の調査例 Fig. 1

福岡平野には御笠川・那珂川等の河川により形成された顕著な洪積中位段丘面の断続的な連なりが東西に2列認められる。福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川、井尻、寺島、春日市須玖、下白水を経て那珂川町安徳にのびる面と、福岡市博多区板付から踏岡、麦野、元町を経て春日市春日原

に達する面で、これらは地質学上須玖面と呼ばれ、主に阿蘇山起源の広域テフラであるAso-4火砕流堆積物によって構成され、沖積低地から3~20mの比高差を有する台地となっている。これらの台地上は生活適地として一部が先土器時代から居住地としての利用を受けており、沖積作用で作られた谷底平地を利用した水田耕作を基盤として一部縄文時代晩期から農耕集落の発達をみる。雑餉隈遺跡は上記のうちの元町周辺に形成された台地の頂部付近に立地しており、麦野方面に向かって枝状に分かれる台地上に展開する遺跡を麦野A~C遺跡、南八幡遺跡と区分しているが、その内容は類似しており、大きく同一の遺跡としてくることができそうである。

雑餉隈遺跡は、2004年度までに計17次の調査が行われたが、第5・8・10次調査を除けば共同住宅建設等に伴う小規模調査が大半を占める。遺跡は主に古代を中心とした広がりを見せ、竪穴住居跡群や掘立柱建物群などがいずれの地点においても検出される他、第9次調査では官衙的性格を思わせる規模と配置を持つ掘立柱建物群が確認された。この他、第15次調査では副葬土器と磨製石剣・石鏃を伴う弥生時代の墓塚が確認されたが、第5次調査でも弥生時代前期を主とする集落内に大量の打製石鏃とその素材である石核・剥片を持つ竪穴住居があり、調査担当者は石鏃を「武器」と捉え、農耕集落の拡大に伴う「争い」の実像の一端を示すものとしている。また、先土器時代の遺物集中箇所が認められる地点も多く、ナイフ形石器や三稜尖頭器などが出土例を増しつつある。

第13次調査地点は雑餉隈遺跡南半部の最高所に近い部分に位置しており、上記の第5・8・10次調査地点の道路を挟んだ西側に隣接する。

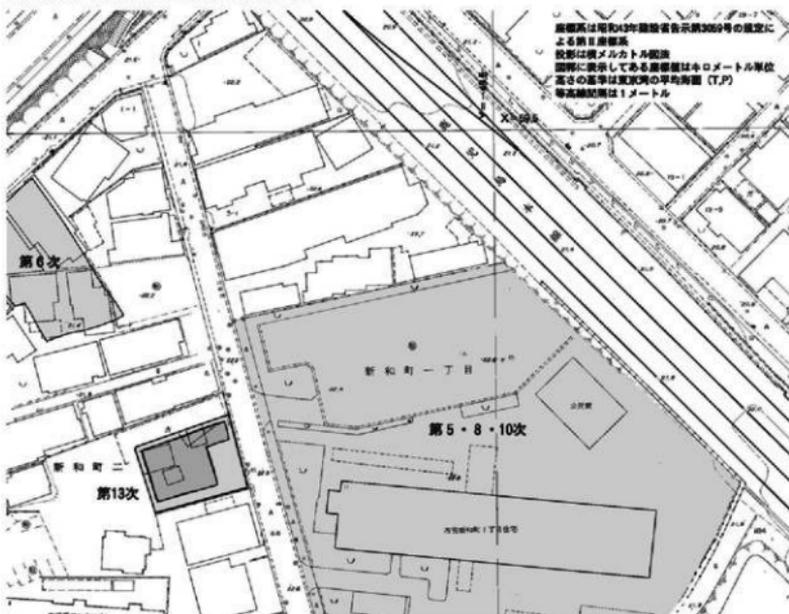


Fig. 1 雑餉隈遺跡第13次調査区の位置 (1/1,000)

II. 発掘調査の記録

1. 調査の概要 Fig. 2

調査は重機による表土除去とその搬出から開始した。調査前の現況は駐車場で、標高22.5mである。地表下0.35mで黒色土（古代遺物包含層）、0.45mでローム層（遺構検出面）となるが、調査期間の制約及び出土遺物が極く少量であるため、黒色土は重機で除去した。その後人力による掘削作業を行ったが、先土器時代の遺物が認められたためローム層の一部を対象として先土器時代の調査を行った。

基盤土はAso-4火砕流堆積物上部の鳥栖ローム層で、調査区内でゆるく西に下る。最上部には黄砂等を含む暗褐色粘質土が乗り、この上面が遺構検出面となる。検出遺構は、竪穴住居跡の床面の可能性がある浅い土坑1基の他はピットのみである。掘立柱建物4棟を復元したが、他のピットの多くは木根等によるものと考えられる。これらの遺構は出土遺物が少なく時期判定に苦しむが、遺構覆土が古代遺物包含層と同様の黒色土であることや周辺の調査事例から推して古代のものと考えられよう。

古代遺構の調査終了後、ローム層を対象に先土器時代の調査を行った。計3カ所に4m四方を基本とするグリッドを設けて掘り下げを行った結果、暗褐色粘質土直下の鳥栖ローム上部より黒曜石・安山岩などの割片・チップ類が出土した。しかしながら定型的な利器は認められず、また出土状況も散漫であった。これらの石器はナイフ形石器文化期後半期のものと考えられるが、定型的な石器を含まないため詳細な位置づけは困難である。出土遺物はあわせてコンテナ4箱を数える。

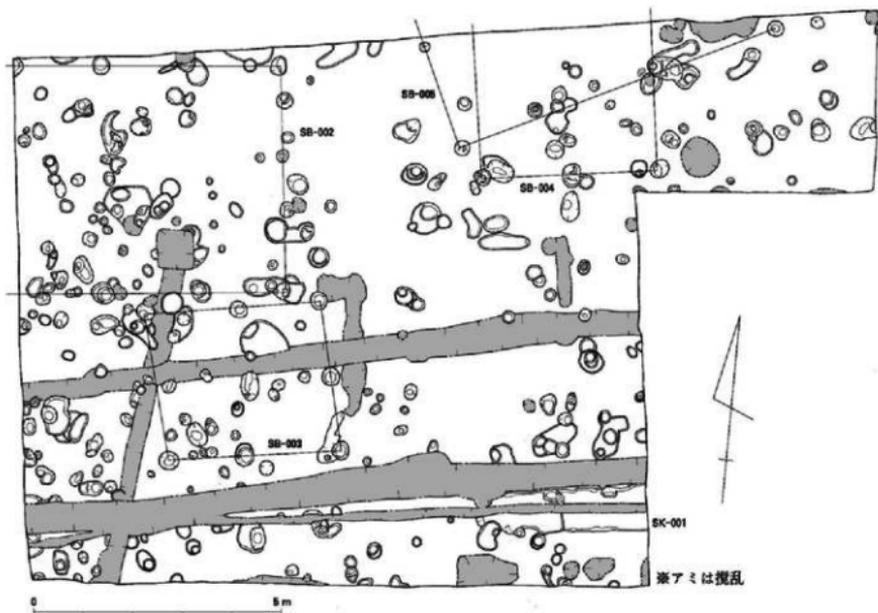


Fig. 2 別館原遺跡第13次調査の遺構配置 (1/100)

2. 古代の遺構と遺物

土坑

SK-001 Fig. 3

調査区南東隅に検出した浅い窪みである。東西に細長い長方形プランをなし、東側は調査区外へと伸びている。攪乱溝に切られて残りが悪いが、現況で東西長3.5m、南北幅0.9m前後、深さは0.05m未満である。底面には凹凸があり、削平された溝底、あるいは堅穴住居床面が一部残った可能性もあろう。覆土は黒色土である。土師器甕類の小片が7点出土したが、図化し得るものはない。

掘立柱建物

SB-002 Fig. 4

調査区北西隅に検出した東西に長い掘立柱建物で、西側は調査区外に伸びる。梁行3間、桁行3間以上の建物と考えられ、桁行方位をN-83°-Eにとる。桁行全長は現状で5.49mを測り、柱間は東から1.85m、1.83m、1.81mとはほぼ等しい。梁行全長は4.71mで、柱間は北から1.52m、1.44m、1.75mである。柱穴平面プランは円形を呈し、径23~50cm、深さ11~58cmを測る。柱痕跡はない。

SB-002出土遺物 Fig. 6

極く少量出土した。1は土師器杯の口縁部小片である。直線的に開き端部は丸い。摩滅が著しく調整不明。赤褐色を呈し、法量不明。2は土師器碗の底部小片である。著しい摩滅により調整不明。淡灰~黄褐色を呈し、法量不明である。古代の遺構だが、出土土器から詳細時期は決め難い。

SB-003 Fig. 4

SB-001の南に隣接する。東西にやや長い2間×2間の掘立柱建物に復元した。長軸方位をN-80°30'-Eにとる。東西全長は3.55mで、柱間は東から1.80m、1.75m。南北全長は3.06mで、柱間は北から1.43m、1.63m。柱穴は円形プランで、径17~45cm、深さ18~30cm。柱痕跡は認められない。

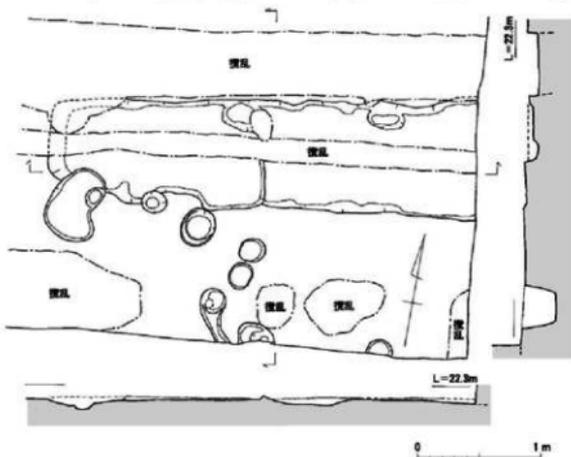


Fig. 3 土坑SK-001 (1/40)

SB-003出土遺物 Fig. 6

極く少量出土した。3は甕の口縁部小片で、法量不明。摩滅が著しく調整痕は残らない。胎土に砂粒を含み、焼成不良。4は甕の頸部小片で、法量不明。外面に縦刷毛目、内面に横ヘラ削りを施すが、著しく摩滅している。砂粒を含み、焼成良好で外面に黒斑がある。古代の土器だが詳細時期は不明である。

SB-004 Fig. 5

調査区北東部に検出した。調査区の北区外へ伸展する

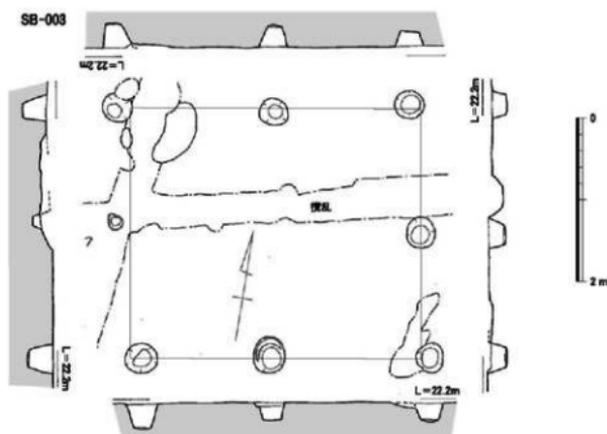
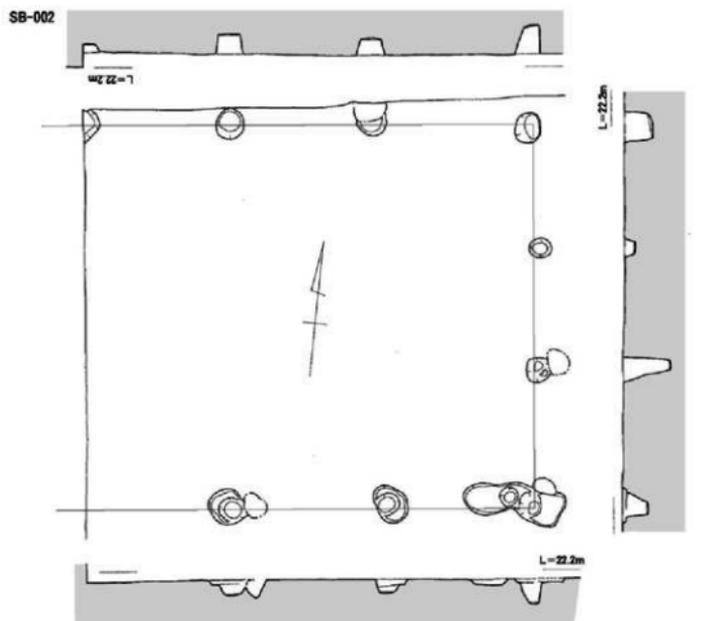


Fig. 4 獨立柱建物SB-002・003 (1/60)

東西2間×南北2間以上の掘立柱建物であろう。主軸方位はN-9°-W。東西全長は3.57mで、柱間は東から1.74m、1.83m、南北の柱間は1.85m。柱穴平面プランは円～楕円形を呈し、径26～48cm、深さ24～38cm。柱痕跡はない。

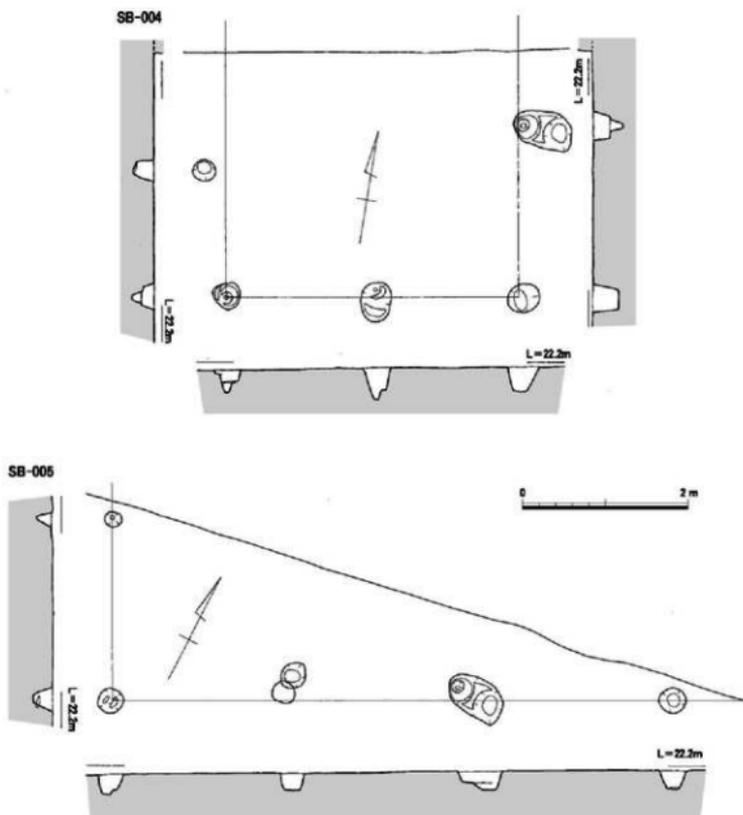


Fig. 5 掘立柱建物SB-004・005 (1/60)

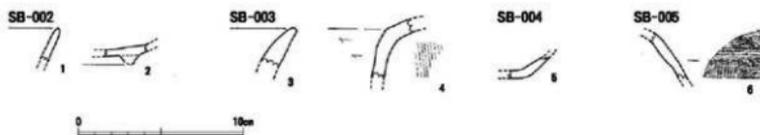


Fig. 6 掘立柱建物の柱穴出土遺物 (1/3)

SB-004出土遺物 Fig. 6

極く少量出土した。5は土師器環の小片で、底部へラ切りである。淡橙色を呈し、法量不明。

SB-005 Fig. 5

SB-004と重複する。調査区壁際に4個の柱穴が東西に並んでおり、北区外へ展開する掘立柱建物に復元した。主軸方位はN-63°-E。東西全長は現状で6.83m、柱間は東から2.23m、2.40m、2.20m、南北の柱間は2.23m。柱穴は平面円形を呈し、径19~42cm、深さ18~25cm。柱痕跡はない。

SB-005出土遺物 Fig. 6

極く少量出土した。6は須恵器の小片である。内面ナデ調整、外面は格子状にカキ目を入れた後、縁辺をナデ消している。壺類の一部であろうか。

その他の出土遺物 Fig. 7

掘立柱建物にまとまらないピット、木根痕、古代遺物包含層などから出土した遺物をまとめた。いずれも小片・細片で、法量の方かるものはない。

7~10は土師器環である。7は内面から口唇外面に油煙が付着する。9と10はともに内面へラ磨き、外面下端から外底に回転へラ削りを施しており、同一個体か。7~10の色調は赤褐色である。11は土師器碗で、外面高台胎まで黒色に燻される。12~14は土師器甕である。摩滅しているものが多いが、外面を縦位の刷毛目、口縁内面を横位の刷毛目、胴部内面を縦位のへラ削り調整するものとみられる。頸部内面には明瞭な稜を持つ。

15・16は須恵器環蓋である。16は口縁端部を下方へ肥厚させる。17~19は須恵器皿であろう。いずれも口縁端部を丸くおさめる。20は須恵器環である。21~23は須恵器壺の胴部片か。21・22は外面に回転へラ削り、内面にロクロ目を残す。23は外面を雑にへラ削り、内面は当て具痕をナデ消す。22・23は底部に近い部位の破片で、高台が付くのであろう。24は須恵器甕である。外面の平行タタキと内面の当て具痕をとともに半スリ消し調整している。

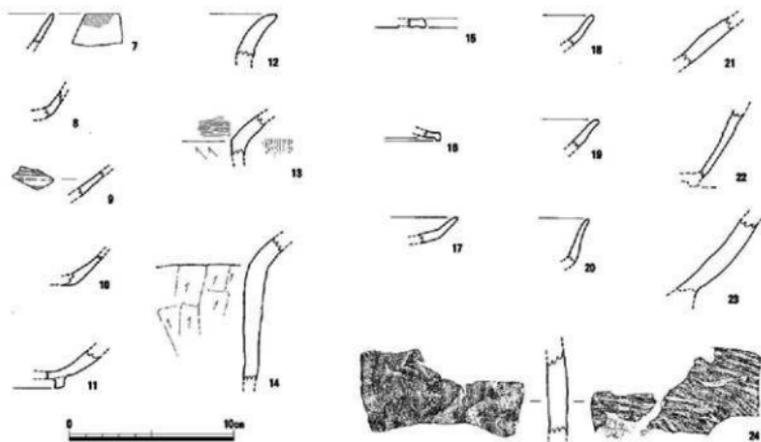


Fig. 7 その他の出土遺物 (1/3)

3. 先土器時代の出土遺物 Fig. 8~10

古代遺構の一部より先土器時代の剥片類が出土したため、調査区北西部に4×4mのグリッドを設けてルーム層を掘り下げ、ほぼ全域で7点の出土をみた。更に南側と東側にグリッドを拡張したが、ここでは1点の出土に留まり、北西部に集中する平面分布を示した。垂直分布は10cm以内におさまり、土層柱状図に示す④層下部から⑤層最上層(海拔標高22.0m)に集中する。Fig. 8に番号のない遺物は古代遺構から出土した。25~31は黒曜石製、32~36は安山岩製で、典型的な利器は出土していない。

25は縦長剥片で、両側縁に使用痕がある。小さな平坦打面を有し、打面と主要剥離面との角度は115°を測る。漆黒色の黒曜石で、節理を多条に含み、赤褐色の不純物が帯状に入る(石材A)。26は寸詰まりの剥片で、両側縁に使用痕がある。打面は失う。下端に自然面が残る。石材は25に酷似し、同一母岩か。小円礫素材である。27は厚みのある不定形な剥片で、左側縁に僅かに使用痕がある。大きめの平坦打面を有し、打面角度は130°。不純物を含まない漆黒色黒曜石(石材B)である。28~30は接合資料で、いずれも不純物を含む漆黒色黒曜石(石材C)である。30は表裏にネガティブ面を持つ石核で、29はこの石核から最後に剥離された碎片、28はその前段階の剥片である。28は左上側縁に使用痕があり、背面の稜に擦痕がある。平坦打面で、打面角度は117°。29は階段状剥離を起こして途中から折れた碎片の先端部で、使用痕はない。30の石核は上面に平坦打面を持つが、剥離作業は上、左の二方向から行っており、最後に下方から29を剥出して石核を放棄している。上側縁に使用痕がある。31は薄い碎片で、上半部を欠き、使用痕はない。石材Aで、25・26と同一母岩であろう。

32は横長剥片で右端部を欠く。左側面に自然面を残す。複数回の剥離により打面をなし、打面角度は130°。使用痕は認められない。流紋岩質安山岩製。33・34は剥片で、使用痕はない。33は平坦打面で、打面角度は86°。ともに流紋岩質安山岩製。35は剥片、36は碎片で、打面は複数回の剥離により作られ、35の打面角度は117°である。35・36の石材は近似しており、いわゆる「多久のサヌカイト」と呼ばれるものである。

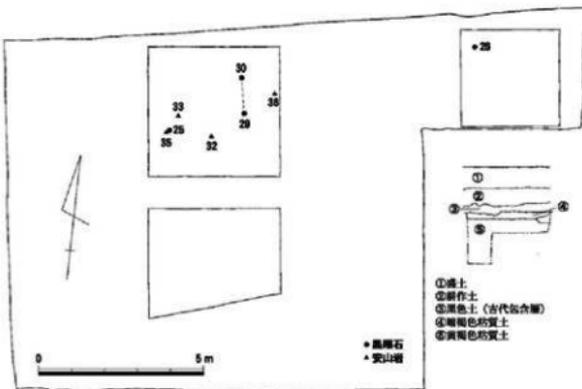


Fig. 8 先土器時代の遺物出土状況 (1/150)

III. 小結

古代の遺構から出土した土器器・須恵器は大半が小片だが、8世紀代の特徴を示すものが多い。第5・8・10次調査の所見から今回の調査地点には奈良時代を中心とする掘立柱建物群が展開していることが予想されたが、これを追認する結果となった。先土器時代については同調査で4カ所の遺物集中区が認定されており、これに1群を追加することとなった。今回出土の剥片類はナイフ形石器文化期後半期の所産と考えられるが、典型的な石器を含まないため、その詳細な位置づけは困難である。

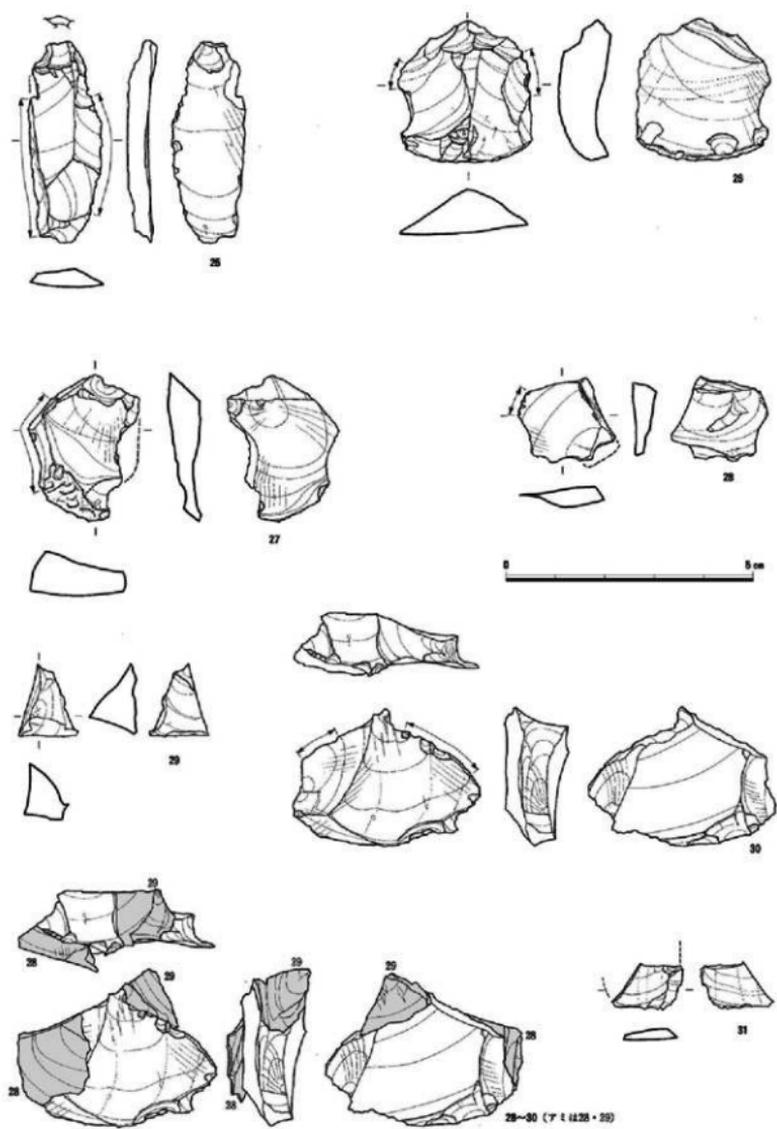


Fig. 9 先土器時代の黒曜石製石器 (1/1)

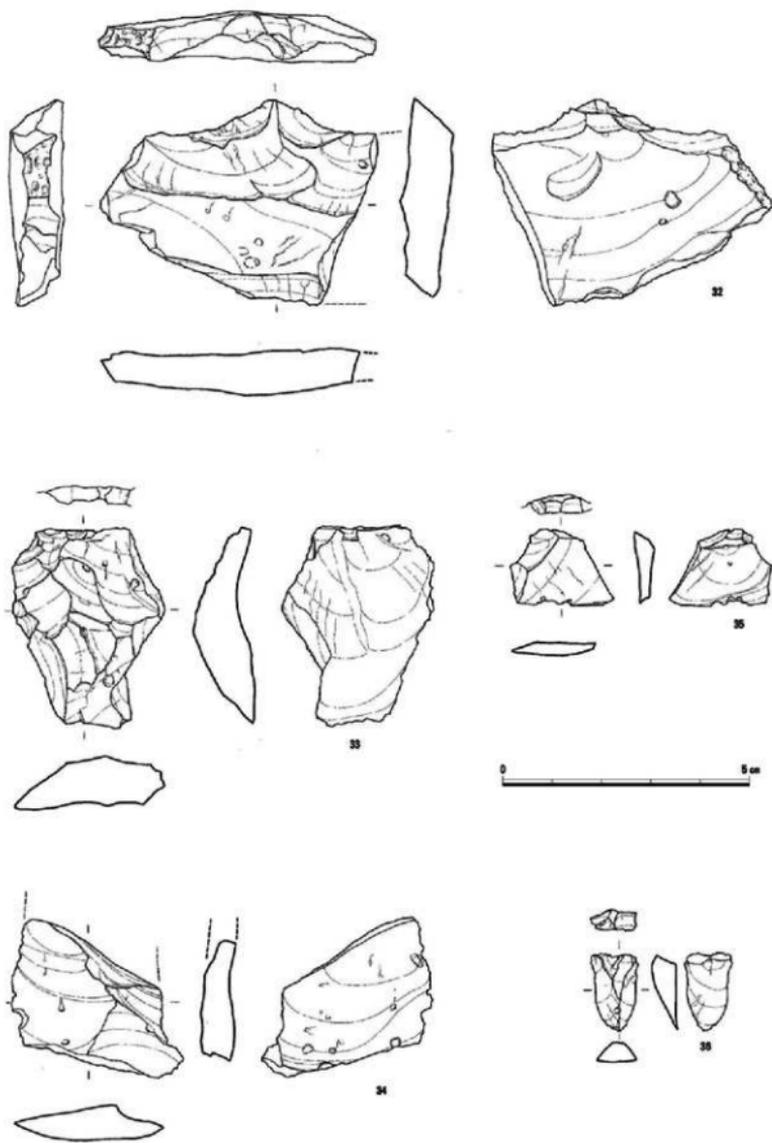


Fig. 10 先土器時代の安山岩製石器 (1/1)



1. 調査区全景（北から）



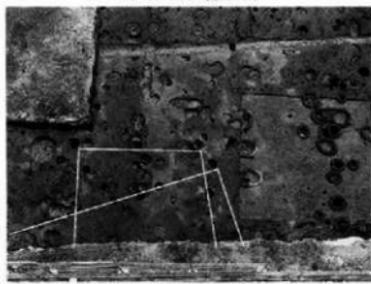
2. 調査区遠景（南東から）



3. SB-002（東から）



4. SB-003（北東から）



5. SB-004・005（北から）



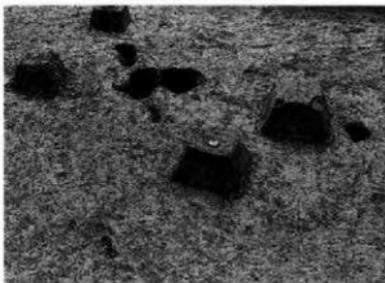
1. 調査区北壁土層（南から）



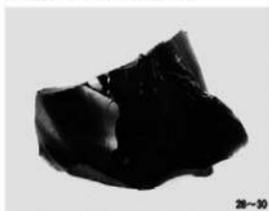
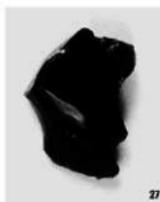
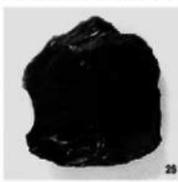
2. 先土器時代調査区（北から）



3. 先土器時代調査区（北東から）



4. 石器の出土状況（北から）



5. 出土遺物（縮尺不同）

X 寺島遺跡群第2次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経過

2002年1月31日付で久保俊夫氏より、共同住宅新築に先立ち、福岡市南区横手南町30-4, 17-7 地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は寺島遺跡群内に位置し、隣地における試掘調査で現地盤面より60cm下で遺構面が検出されていることから、試掘調査を行った。その結果、現時盤面より90cm下で遺構面が検出され、計画されている工法では遺跡の破壊が免れないことから、その範囲においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。発掘調査は2002年4月1日から2002年4月12日までの期間で行った。

2. 調査体制

調査委託 久保俊夫
調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田 征生（前任） 植木とみ子（現任）
調査総括 埋蔵文化財課長 山崎 純男（前任） 山口 譲治（現任）
調査第2係長 力武 卓治（前任） 池崎 譲二（現任）
調査庶務 文化財整備課管理係 御手洗清

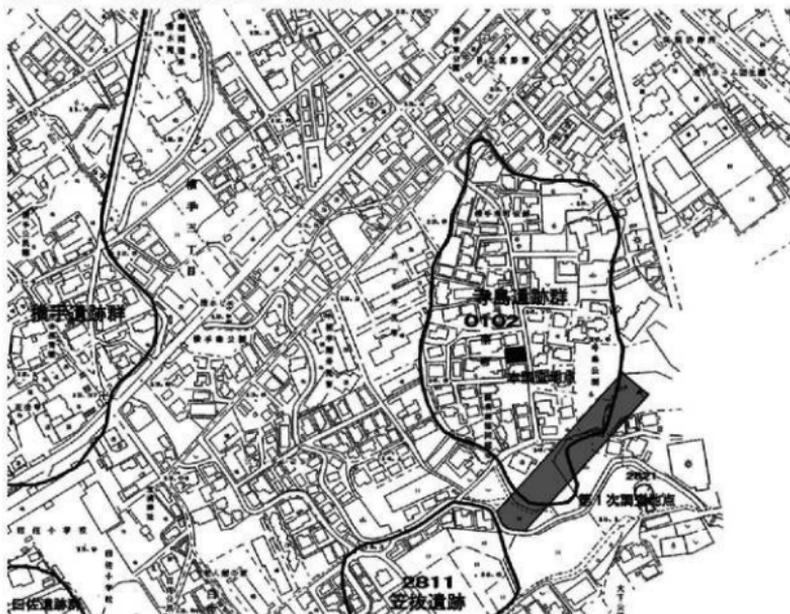


Fig. 1 周辺の遺跡 (1/4,000)

試掘調査 大塚紀宣 田上勇一郎
 発掘調査 井上 繭子
 調査作業 石川 洋子 泉本タミ子 伊藤 美伸 乾 俊夫 桑原美津子 志堂寺 堂
 柴田 博 田中トミ子 鍋山 治子 濱地 静子 林 厚子 播磨千恵子
 平井 武夫 吹春 憲治 藤原 直子 北条こず江 水野由美子 森本 良樹
 整理補助 谷 直子 (九州大学大学院)
 整理作業 川田 京子 坂井かおり 佐々木涼子 馬場 弓子 福島由衣子 山口とし子

このほか、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について久保俊夫氏をはじめとする関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝致します。

II. 遺跡の立地と環境

福岡平野は、東から南にかけて背振、三郡山塊に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に延びる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。寺島遺跡群は、背振山地北東部の牛頭山から派生した須玖丘陵の先端に所在し、須玖遺跡群と井尻B遺跡群の中間に位置する。本調査地点の南側、遺跡群の南端に、外環状道路建設に先立って行われた第1次調査地点が位置し、旧石器時代後半期から中世に至る遺構が検出されている。本調査地点は寺島遺跡群のほぼ中央に位置し、敷地は道路面と同レベルである。遺構は現地盤面から約1m下、標高約16mの鳥栖ローム上面で検出された。

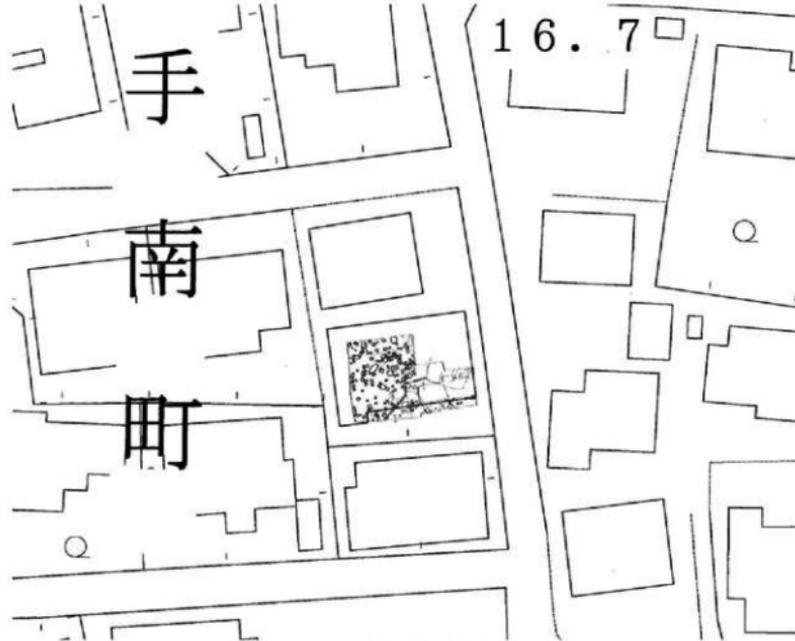


Fig. 2 調査区の位置 (1/500)

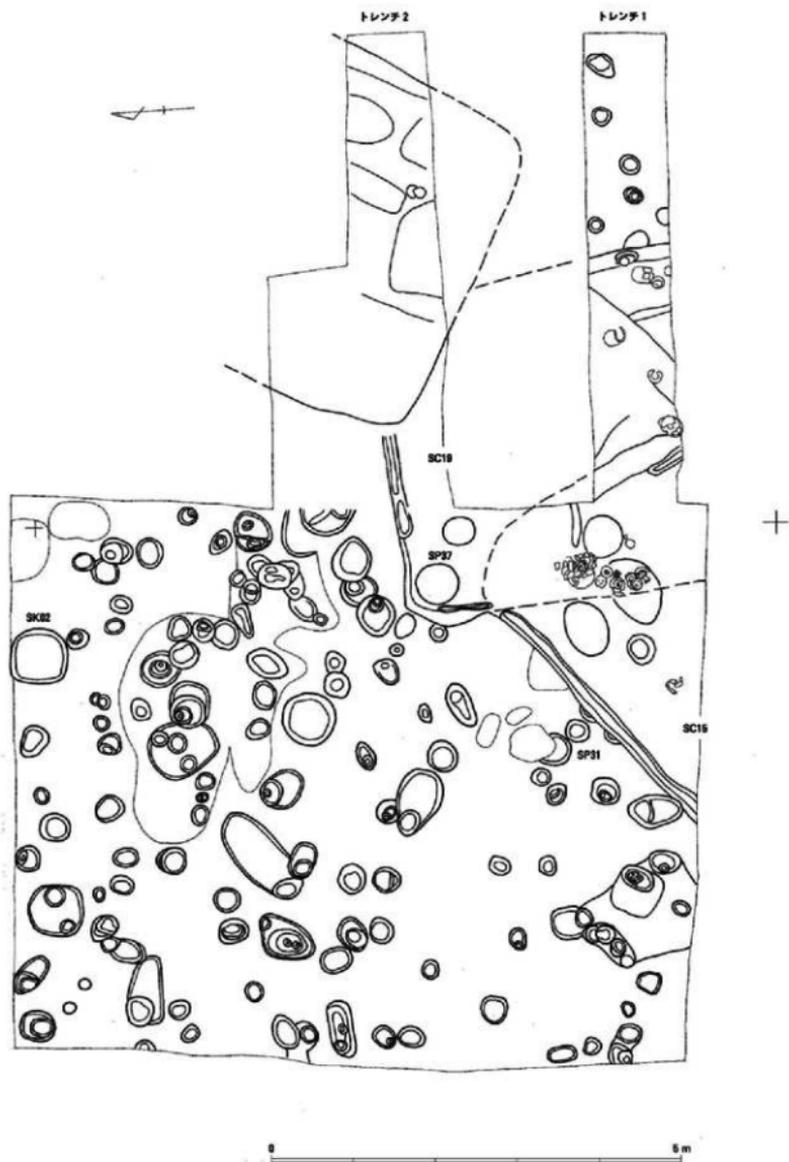


Fig. 3 遺構配置図 (1/60)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の経過

排土の土練りの関係上、調査予定範囲の北側半分から表土掘削を行い、遺構掘削、図面、写真撮影等の記録を行った後、反転して南側半分において同様の調査を行った。この時点で住居址が検出されたため、調査予定範囲外ではあったが、トレンチを2箇所調査区東側に設定し、住居址の確認のみを行った。4月12日に撤収を行い、調査を終了した。

2. 遺構と遺物

SC15

調査区の南端壁に切られる。東側のSC19と切り合っている。SC19の床面より低く、さらに床面上に投棄されていた土器群のレベルからSC19を切っていると推定される。一辺が4m以上の方形を呈し、床面までの深さは25cmで、貼床が敷かれ、壁溝がめぐる。住居址の北隅付近に床面から若干浮いた状態で土器溜が検出された。主軸はN-52°-Wを測る。

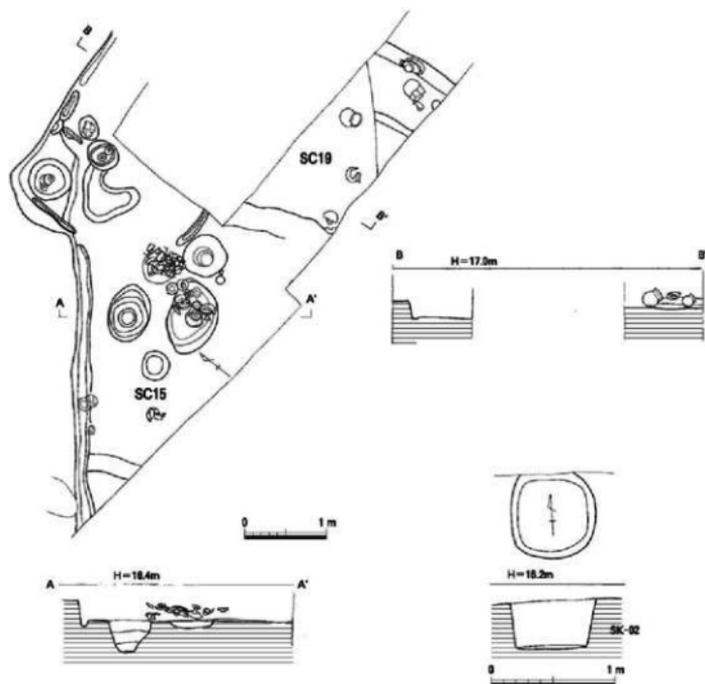


Fig. 4 遺構実測図 (1/60, 1/40)

出土遺物

1は甕。口径16.6cm、器高25.8cmを測る。口縁部はほぼ直線的に開き、胴部は丸張り、底部は丸底を呈する。外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。2は壺。口径は20.0cmを測り、胴部下半は欠損する。口縁部は屈曲した段を作り大きく外反し、胴部は大きくふくらむ。内外面ともにハケメで調整され、口縁部は外面にヨコハケが施される。3から5は鉢。各々口径11.6cm、11.0cm、10.4cm、器高6.0cm、6.6cm、6.0cm以上を測り、碗形を呈する。6から10は高坏。いずれも杯部は屈曲して大きく外反する。また、脚部は6と10はハ字状に開き、その他は、L字状に開く。各々口径は20.4cm、17.0cm、17.6cm、15.6cm、15.8cm、器高は14.2cm、13.4cm、13.2cm、11.8cm、14.0cm、底径17.3cm、13.2

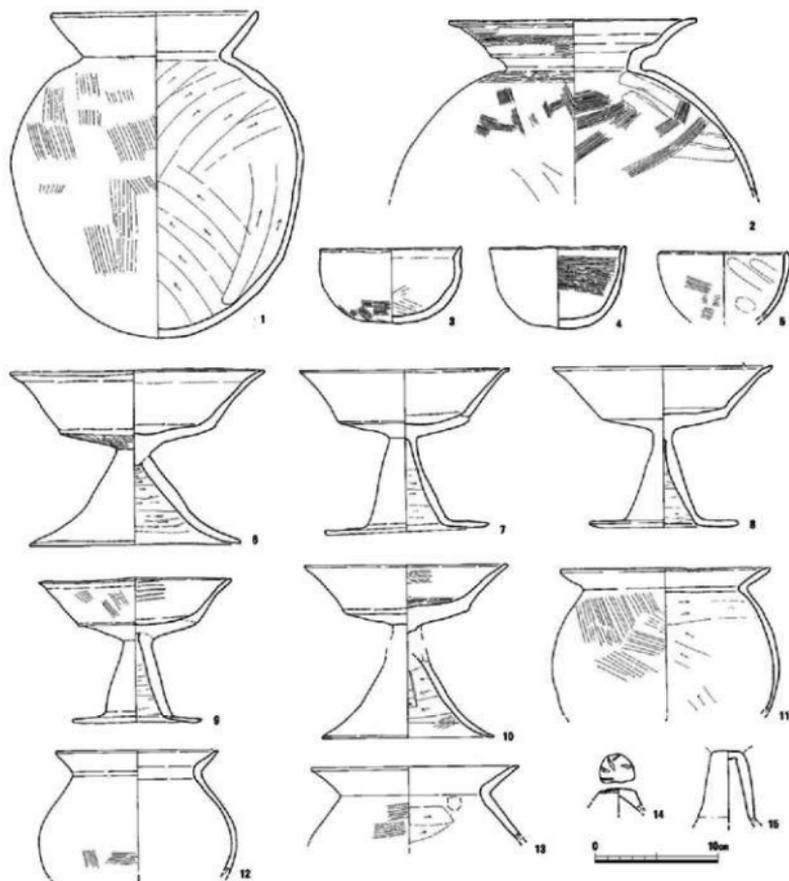


Fig. 5 SC15出土遺物実測図 (1/4)

cm、12.2cm、11.0cm、14.0cmを測る。いずれも脚部内面はヘラケズリで調整され、杯部は部分的にハケメが施されている。以上は土器溜の土器である。11から13は甕。口径は各々16.8cm、13.1cm、17.8cmを測る。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整される。14は蓋のつまみ部分である。頂部に刻み目が施される。15は高環の脚部。

SC19

調査区南東寄りに位置し、SC15に切られる。SC15よりも床面は高く、壁溝をめぐる。一辺が4mの方角を呈する。支柱穴は不明である。北西隅に竈の粘土が残存していた。調査区の南壁よりの床面上に土器が投棄されている。主軸はN-86.5°-Wを測る。

出土遺物

16から18は甕。各々口径は17.6cm、14.4cm、12.0cm、器高26.3cm、22.1cm、13.7cmを測る。いずれも

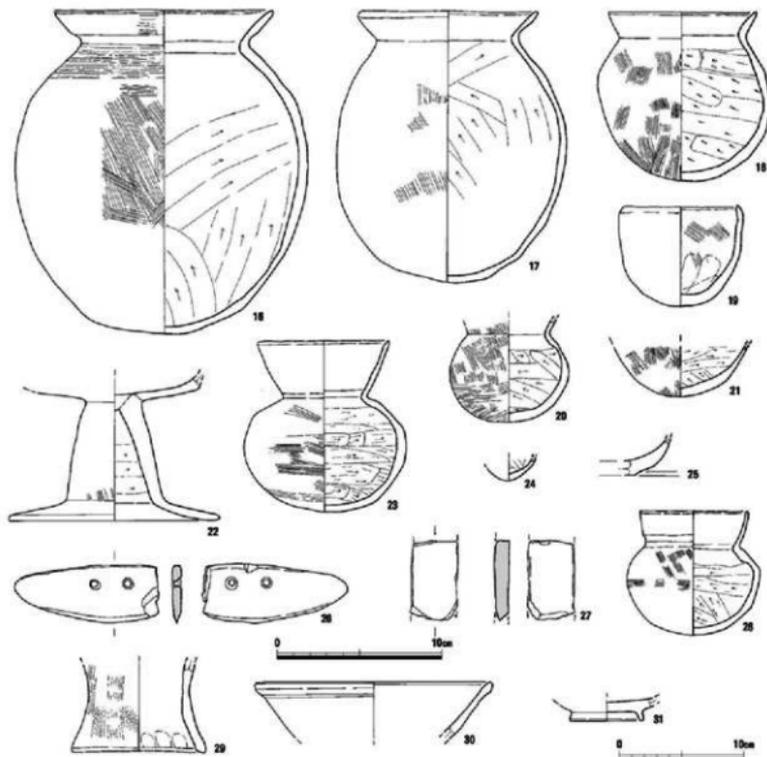


Fig. 6 SK02その他出土遺物実測図 (1/4、1/3)

口縁部が外反し、胴部が丸く張る器形で丸底を呈する。16、17はやや長胴となる。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整される。19は鉢。口径9.2cm、器高8.0cmを測る。碗形を呈する。20は小型丸底壺。外面にはハケメ、内面はヘラケズリが施される。21は壺の底部か。丸底を呈する。外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。以上は住居址床面上から検出された。22は高環の脚部。L字状に開く器形で底径17.0cmを測る。内面はヘラケズリが施される。23は小型丸底壺。口径10.6cm、器高14.0cmを測る。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整される。24、25はミニチュア碗形土器の底部。26は石包丁。残長8.6cm、幅3.5cmを測る。27は砂岩製の砥石。残長4.8cm、幅3.0cm、厚さ0.9cmを測る。

SP37

SC19の北西隅に位置するが、住居址に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物

28は小型丸底壺。口径9.0cm、器高10.0cmを測る。口縁部はやや屈曲して立ち上がる。外面にはハケメ、内面はヘラケズリが施される。

SK02

調査区北壁近くに位置する。径70cm、深さ40cmの隅丸方形を呈する。

出土遺物

29は器台。外面はハケメ、内面は指ナデによる調整が施される。底径11.0cmを測る。

SP31

31は土師器杯の高台部である。径6.0cmを測る。

遺構検出中出土遺物

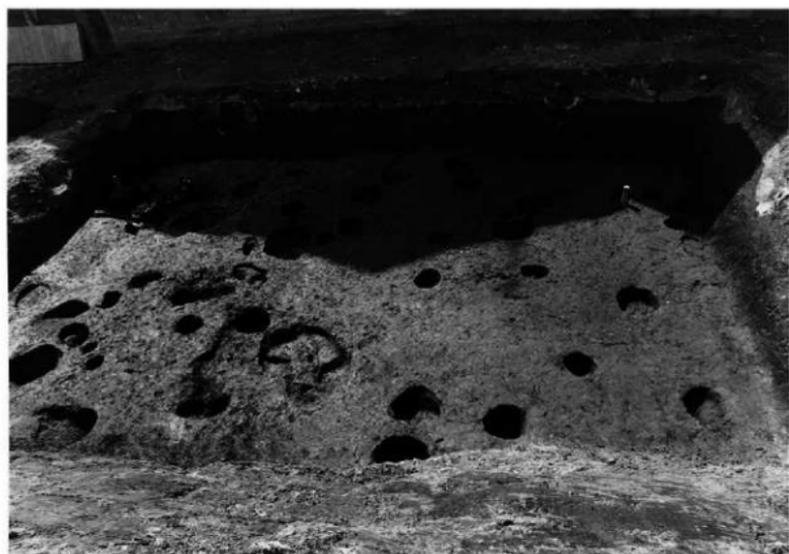
30は白磁碗である。口径19.3cmを測る。白色の胎土に淡緑色の透明釉がかかる。

3. 小結

今回は調査面積が狭かったが、3軒の住居址と土坑、ピットが検出された。住居址のSC15とSC19は出土遺物から古墳時代中期前葉頃と想定される。第1次調査地点では、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落が中心であり、本調査地点から南側へ向けて該期の集落が展開していたといえる。



1. 調査区北側全景 (南から)



2. 調査区南側全景 (北から)



1. SC15 (南から)



2. SC15内土器濶 (東から)



3. SC15内土器濶 (西から)



4. トレンチ1 (北から)



5. トレンチ2 (北東から)

報告書抄録

書名	中南部(8)		
副書名			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書	シリーズ番号	第867集
編集者名	本田浩二郎	発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 Ⅸ092-711-4667		
発行年月日	2005(平成17)年3月31日		

所収遺跡名	麦野A遺跡第6次調査 <small>むぎのえーいせき</small>		
所在地	福岡県福岡市博多区麦野3丁目11-29		
調査面積	244㎡	調査期間	1998.07.01～1998.07.16
調査原因	個人専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0048
北緯	33° 32' 57"	東経	130° 27' 46"
種別	集落	主な時代	古代/中世
主な遺構	竪穴住居1/溝3/井戸1/土坑9/ピット		
主な遺物	土師器/須恵器/黒色土器/貿易陶磁器		

所収遺跡名	麦野A遺跡第7次調査 <small>むぎのえーいせき</small>		
所在地	福岡県福岡市博多区麦野5丁目2-33・36		
調査面積	450㎡	調査期間	2000.03.13～2000.05.02
調査原因	個人専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0048
北緯	33° 32' 53"	東経	130° 27' 50"
種別	集落・官衙	主な時代	古代/中世
主な遺構	溝/孤立柱礎基礎/柱穴/土坑		
主な遺物	土師器/須恵器/貿易陶磁器/国産陶器など		
特記事項	官衙関連遺構を検出		

所収遺跡名	麦野A遺跡第11次調査 <small>むぎのえーいせき</small>		
所在地	福岡県福岡市博多区麦野4丁目11-5		
調査面積	130.00㎡	調査期間	2001.11.20～2001.12.01
調査原因	個人専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0048
北緯	33° 32' 51"	東経	130° 27' 42"
種別	集落	主な時代	縄文/古代/中世
主な遺構	竪穴住居2/土坑/溝/落とし穴/柱穴		
主な遺物	土師器/須恵器/貿易陶磁器/国産陶器など		
特記事項			

所収遺跡名	麦野A遺跡第13次調査 わぎのえーいせき		
所在地	福岡県福岡市博多区麦野2丁目1-8		
調査面積	250.00㎡	調査期間	2002.02.18～2002.03.09
調査原因	宅地造成・専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0048
北緯	33° 33' 11"	東経	130° 27' 32"
種別	集落	主な時代	古墳/古代/中世
主な遺構	土坑/溝/掘立柱建物2/柱穴		
主な遺物	土師器/須恵器/貿易陶磁器/国産陶器		

所収遺跡名	麦野C遺跡第4次調査 わぎのしーいせき		
所在地	福岡県福岡市博多区銀天町2丁目3-6		
調査面積	265.00㎡	調査期間	1996.0805～1996.08.13
調査原因	ビル建設(短期調査)		
市町村コード	40132	遺跡番号	0050
北緯	33° 32' 27"	東経	130° 27' 54"
種別	集落	主な時代	古代
主な遺構	竪穴住居3/柱穴7		
主な遺物	須恵器/土師器/鉄製品		
特記事項	別の住居から出土した遺物が接合		

所収遺跡名	麦野C遺跡第7次調査 わぎのしーいせき		
所在地	福岡県福岡市博多区麦野6丁目18-1		
調査面積	115.83㎡	調査期間	2003.04.14～2003.04.23
調査原因	個人専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0050
北緯	33° 32' 42"	東経	130° 28' 04"
種別	集落	主な時代	古代/中世
主な遺構	柱穴/土坑		
主な遺物	土師器/須恵器/貿易陶磁器/国産陶器/黒曜石		
特記事項			

所収遺跡名	麦野C遺跡第8次調査 わぎのしーいせき		
所在地	福岡県福岡市博多区麦野6丁目18-15		
調査面積	121.38㎡	調査期間	2003.04.24～2003.05.07
調査原因	個人専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0050
北緯	33° 32' 42"	東経	130° 28' 03"
種別	集落	主な時代	旧石器/古代/中世
主な遺構	竪穴住居1/土坑/溝/柱穴		
主な遺物	土師器/須恵器/貿易陶磁器/国産陶器/黒曜石		
特記事項			

所収遺跡名	麦野C遺跡第9次調査　むぎのしーいせき		
所在地	福岡県福岡市博多区麦野6丁目18-16		
調査面積	40.98㎡	調査期間	2003.05.08～2003.05.20
調査原因	個人専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0050
北緯	33° 32' 42"	東経	130° 28' 03"
種別	集落	主な時代	弥生/古代/中世
主な遺構	竪穴住居1/土坑/溝/柱穴		
主な遺物	弥生土器/土師器/須恵器/貿易陶磁器/国産陶器/黒曜石		

所収遺跡名	雑餉隈遺跡第11次調査　ざっしょのくまいせき		
所在地	福岡県福岡市博多区昭和町1丁目36		
調査面積	60㎡	調査期間	1999.05.24～1999.06.03
調査原因	個人専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0054
北緯	33° 32' 12"	東経	130° 27' 50"
種別	集落	主な時代	古代
主な遺構	竪穴住居3/土坑/柱穴		
主な遺物	土師器/須恵器/貿易陶磁器		
特記事項			

所収遺跡名	雑餉隈遺跡第13次調査　ざっしょのくまいせき		
所在地	福岡県福岡市博多区新和町2丁目7番11		
調査面積	156.00㎡	調査期間	2002.09.26～2002.10.11
調査原因	共同住宅建築(短期調査)		
市町村コード	40132	遺跡番号	0054
北緯	33° 32' 05"	東経	130° 27' 59"
種別	集落	主な時代	先土器/古代
主な遺構	竪穴住居/掘立柱建物/土坑/柱穴		
主な遺物	土師器/須恵器/石器		
特記事項			

所収遺跡名	寺島遺跡第2次調査　てらしまいせき		
所在地	福岡県福岡市南区横手南10-8		
調査面積	89㎡	調査期間	2004.04.01～2004.04.12
調査原因	個人専用住宅建築		
市町村コード	40132	遺跡番号	0102
北緯	33° 32' 32"	東経	130° 26' 37"
種別	集落	主な時代	古墳
主な遺構	竪穴住居/土坑/柱穴		
主な遺物	土師器		
特記事項			

中南部(8)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第867集

2005年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会
印刷 衛大進印刷

